

たものゝ代償として、イギリス政府はマルタ島の保持を主張したが、ナポレオンはそれを拒絶したので、其の結果は、千八百三年五月十八日の開戦となつた。

ナポレオンが世界帝國のためにイギリスと決闘することは、殆ど避け得られな
い所であつた。何故ならば東洋の統治は、彼れの胸底深く喰込んで、どうしても取
れなかつたからである。而してそれは全く、イギリス帝國との生死の戦を意味す
るものであつた。然かし戦争の開始は、彼れに取つて約二ヶ年尙早であつた。千
八百三年一月の中旬、彼れがデカン將軍指導のために書上げた秘密命令(インド征
略に關する)は、彼れ(デカン)に向つて、インドの虐主イギリスの羈絆を脱しようとする
ものとは、其の何人たるを問はず、それと親密な關係を結ぶべきことを命じてゐ
る。尙それは千八百四年九月の戦争開始に際し、大體オランダ共和國を誘ふ様に
指令し、そして若し最初から、敵軍が優勢であつたならば、モリシウスか或は喜望
峯(當時オランダ領)まで退却すべきことを命じてあつた。而して若し又彼れが
巧みに任務を完行したならば、世紀の流を超越して、人々の記憶に永久傳はる、無上

の光榮を擔ふべしとあつた。

これはナポレオンが海軍の強くなるまで、待機の戰略に甘んじた時の結果であ
る。然かしながら斯かる所に、彼れの性格の弱點が存在してゐた。彼れには待機
することは出来なかつた。彼れは餘り物事に熱中し過ぎ、又強情であつた。吾人
は茲に彼れに取つて最善であるべき政策を察知することが出来るものと考へる。
即ちそれはフランス、オランダ、北イタリア、更に又云ふならば、イスパニア等の諸邦
の優勢な造船力が、海上でイギリスに對しバランスを顛倒する時が到來するまで、
イギリスとの修交に盡力しなければならぬことは是れである。而も彼れとして
は、マルタ或はラムベデッサ問題、其の他の懸案に關する、外交上の遷延は決して不
可能ではなかつた。如何となれば、因循なアッディントン内閣は、平和が戦争より
も危険な形勢に立到らない以上は、戦争を起さうとは思はなかつたからである。
此の間の消息は、諸君が戦争再開前、ロンドン、パリ、間を往復した文書を精讀され
たならば、知ることが出来るのである。即ち既述の如く結局争鬭は免れ難かつた

であらうが、近き將來に於て頗る有効な打撃を敵に加へる爲に、一時的にでも問題を彌縫しなかつたのは、ナポレオンとして決して良策であつたとは云へない。そして彼れは自分の要求全部を固執しながら、イギリスの代償地に關する要求を拒絶して、彼の女(イギリス)を唯一つの安全の道と確證された、直接の戰爭に導いて了つたのであつた。

イギリスとの關係が危險に陥る以前ですら、彼れはルイジアナを確保することの、不可能なのを覺悟してゐた。さればあの廣漠たる領土を、アメリカ合衆國に賣却した取極めは、永久の利益であり又輕視すべからざるものであつた。此れは北アメリカに優越の地歩を占めようとする、フランスの計畫を終息させるものであり、又それは到底首肯し難い程の小額——六千萬フラン——で、アメリカ合衆國に其の境界を、カリフォルニアのイスパニア領まで擴張させたものであつたが、其の代りにアメリカ合衆國とナポレオンとの間に、強い友交關係を齎したのであつた。(今茲に吾人の關說する範圍内の)彼れの立脚點から、此の事件を觀察するに、彼れは

合衆國の好意を受けて、目先大いに利益を得たと云ひ得られる。然かしながらフランス民族のために、彼れがルイジアナを支持して居てはならなかつたかどうかと云ふことは、又別問題である。ナポレオンが依然ルイジアナを保有して居たならば、アメリカ合衆國との間に、幾多の面倒な問題が生起することはあつたらう。然かし一方に於て、恐らくフランスは従前の所領を維持し、そして若しヨーロッパの平和が速かに回復されたならば、ナポレオン戰爭に於て無益に殺さるべかりし彼の女の子供(フランス國民)のために、茫洋たる領域の植民地までも得たであらう。然かし此の問題は全く和戰の問題と切離すことの出来ないものである。千八百二年の末までに、ナポレオンは、第一に、イギリスとの戰爭を意味し、且附隨的にルイジアナの賣却を意味する、東方政策を持続すべきか、第二に、東方に於て對英問題を解決して、一時的の平和を得、西方アメリカに於て彼れの大牧場を確守すべきか、其のいづれか一つを決定しなければならなかつた。彼れは此の兩者に就いて選擇を試みた。そしてその結果、彼れは遂に吾人が既に研究した様に、舊世界に於け

る戦争とアメリカ合衆國に對する、平和的開進に向つて傾いて行つたのであつた。尙此のナポレオンがなした選擇の明不明を、吾々が何と論ずるとも、彼れは凡べての點で、完全に其の政策を遂行することは到底不可能であつた。自分の云ふ凡べての點とは、ルイジアナと東方政策の雙方を意味するものである。千八百二年に於けるナポレオンの理智と判斷とは、合衆國とイギリスの兩者を怒らすべき結果を豫知すべく、未だ十分に健全であり又十分に鋭敏であつた。然かし千八百十二年に至つては既に、政治界の總べての方面で、自己の要求を貫徹せんとするまでに、彼れの勇氣は硬化してゐた。これに就いては間もなく改めて話す機會があるであらう。

彼れの海軍が未だ完全に整備せざるに先立ちて、イギリスと開戦した結果は、トラファルガーの海戦で明かとなつたが、斯の時一方陸上では、千八百五年六月彼れがジエノアを併合したのが動機となつて、新しい列國大同盟が生れ出た。そして此の大同盟はナポレオンのエネルギーを、ブローローニエのフロティラから、オース

トリアとロシアの軍隊へと轉向せしめた。茲にウルムの戦が起り、アウステルリッツの大戦が交へられた。ユニオンジャックが海上に成功したのを見た此の年の秋は、又中央ヨーロッパに於て、三色旗が獲たところの同様な決定的戦勝を目撃した。ナポレオンはトラファルガーの結果を餘り重大視せずして、イギリスの貿易破壊戦に備へたフランスの巡洋艦全部に、豫定の行動を執るべく命令した。大體彼れは、オーストリアやロシアの屈伏よりも、遙かにイギリスの降参を熱望してゐたのであつた。アウステルリッツの前夜彼れは注意すべき言葉を口にした。『余は此の舊いヨーロッパに倦きた』と。即ち彼れの主要なる目的は、船舶であり、植民地であり、而して世界帝國であつたのである。

註 ナポレオンの雄圖の多方面なりしことと、彼れの不眠不休の活動とは、次の如き面白い事實によつて立證される。即ちナポレオンは千八百五年から同十四年までの十年間の中、約七年以上、パリー及び其の附近に居なかつたことである。

トラファルガーの海戦とアウステルリッツの戦とは、ナポレオンの進むコースを變更した。トラファルガーは、彼れがアレクサンドル大王の役割を演ずることを不可能ならしめたが、アウステルリッツは彼れの手に、カロロ大帝の笏を持たせた。此處に一つの壯麗なる舞臺が展開した。而してナポレオンの性質と時代の趨勢とは、その演劇に對して、彼れ自身を此の上なく好い適り役たらしめた。されば若し彼れが大きな幻想即ち東洋の統治を放棄することに満足し、エルベ、ビレネー間の國家の建設に甘んじたならば、成功は恐らく其の努力に報いるに、榮冠を以てしたであらう。西ドイツと南ドイツとは、以前から渾沌たる状態であつた。ゲーテを始めドイツ人の多くは、ナポレオンを目して、永い間分立してゐた彼等の同胞を、一つの大きな單位、又より幸福な活動状態に招致すべく、先天的に運命付けられた人と考へた。新しきカロロ大帝として、ナポレオンはドイツ民族の歴史的觀念に訴へ、彼等を割據せる二百の國家と自由市との狹隘な獨立主義から、パリを中心とする、超國家的生活に入るべく覺醒せしめた。千八百六年から同十一年に

至る間に、彼れはドイツ皇帝領と騎士領とを一掃し、又別の手段に依つて西南兩ドイツの地圖を作り換へた。更に非常に重要な目的のために、ナポレオンの意志のままになるライン同盟は、一國家を形成した。封建制度は絶滅され、社會的平等と信教の自由とは、新政體の基礎となつた。農夫、市民、ユダヤ人の區別もなく、何人も以前に優る明るい日の曙光を睇み見た。新制度の活用は一種變つた不平等を呈示したが、大體から見てドイツは其のために商業が熾んとなり、又平等簡易となつて、大なる利益を得たのであつた。

ナポレオンはドイツの輿論を懐柔するために、凡有る努力を試みた。千八百七年八月新しく創設されたウエストファリア王國の有力者の代表委員に向つて云つた、次の言葉が其の間の消息を説明する。『宗教は道念の問題であつて、國家に關係ある問題ではない。小國家は感心したものではない。卿等は今に恐らくハンブルグにまで領域の届く、一大國家を作り上げることになるだらう。兵士は卿等を保護すべきもので、決して壓制を加へるものでない。貴族だと云つても偉らい

ことはない。名を揚げ功を樹てる人間が昇進するのだ。〇〇はそれ自身のために存在するものでなく、臣民の幸福のために存在するのだ」と。出来るだけの手段を用ゐて、彼れはドイツ民族の心を、ウインナやベルリンからパリに轉向する様に試みた。此の仕事は現在の吾々には、馬鹿らしい企としか見られないが、ドイツ民族の觀念が、フィヒテやアルントが愛國を絶叫したにも拘らず、殆どそれを感じなかつた當時では、其の成功も不可能なことではなかつた。超國家的思想はフィヒテやシルレルがそれ以前に書いたもの、中にも見える様に、大學や文學に於て可成りな勢力を持つてゐた。然かし千八百六年以後となつて、ドイツ人の感情は漸く、而も極めて緩慢な速度で、パリからベルリンの方へ轉歸して來た。勿論此の間もナポレオンはライン彼岸の民心を緩和すべく、大いに努力したことはしたのであつた。即ちナポレオン法典は、ドイツをフランス化すべき原動力として働き、其の編纂者たる彼れは、フランス語の使用を一般化すべく盡瘁した。或る時彼れはマインツの高等學校を訪れて、上級生の教室に行つて、ラテン語と數學の試験

を學生に課した位であつた。

ナポレオンは商業の方面に關しても、ドイツ、イタリア兩國のために、新しい行途を打開した。既述の如く彼れはライン河とローヌ河とを連絡する運河を計畫したが、其の他千八百十五年の初エルバで、ヴィヴァン少將に向つて云つた通り、彼れはライン流域とダニューブ上流とを結ぶ運河の開鑿を計畫した。而して同工事は僅か二千萬フランを要する程度のものに過ぎなかつた。此の會話に於て、ナポレオンは又イタリアとフランスとを聯絡する山路に關して、深い注意を拂つてゐることを明かにした。ヴィヴァンがコルデテ^{コルデテ}越の道路が悪いことを話したのに、皇帝は即座にそれは自分の作つたものでないと云つた。又彼れは少將に、アヴィニオンでローヌ河に彼れが架けようと計畫した橋は未だ竣工しないか何うかと尋ね、ハンブルグ、ウーゼル間に、彼れが開き始めた大道の費用に就いて語り、更に彼れが日常自慢してゐた工學上の功績である、^註シンプロン越の道路の状態をも(少將に)尋ねた。ナポレオンの遺業中最も記憶すべきもの、一つは實

に『ナポレオン道路。千八百七年——千八百十二年』の記念碑を以て飾られた、ゴンドの隧道と隘路とである。

註 ナポレオンがシンプロン道路を改修したのは、大體千七百九十八年にフランス軍をスウイスに侵入せしめようとする彼の決心から來たものである。そして彼れは遂に千八百十年スウイスの西南部ヴァレー州を併呑した。(ロイズ著、ビットとナポレオン、ギーヨ著、總裁政治とヨーロッパの平和)

大衆の想像は常に偉人の功績を張説する。即ちオックスフォード大學や陪審制の裁判を、アルフレッド大王に歸する如き、其の一例である。フランスの格言の通り、『人は金のために夢中になる。』利益は人間の理性を眩惑するものである。故に余はシンプロンミラン街道が家の前を通つてゐるマッジョール湖畔の旅館の主人が、其の街道をナポレオンが颯々たるパリーミラン街道となしたと、誇張して云ふのを聞いても敢へて驚かない。然かし此の變な誇張も、意義がないもので

はない。何故ならばそれは、ナポレオンの偉大に對する、無意識の讚辭だからである。彼れの性格は何人にも優つて民衆の想像を刺戟した。それ故に彼等は悦んで凡有る事を彼れに結び付けた。傳説は出鱈目に、無能なジョージ三世やルイ十八世には、月桂冠を與へない。

ナポレオンが隣國民のために企て、未完成に了つた計畫の中で、ローマに關するものは、最も興味が深いものである。彼れは非常にローマを好んでゐた。千八百二年、カノヴァが彼れの胸像を製作してゐた折、彼れは部屋の中を彼方此方と歩きながら、絶えずローマのことを話し續けた。彼れはリヴィーが書いた諸英雄に就いて、自分の考へてゐる所を發表したり、法皇のローマを痛く攻撃し、シーザーのローマを稱讚したりした。カノヴァがタイタスやトラヤン、或はマーカス・アウレリアスのことを話すと、彼れは大聲に、『さう、彼等は皆大人物だつた』と云つた。彼れはローマの古風俗である、あの血生臭い劍闘技をすら欣んで嘆賞した。されば彼れはセント・ヘレナで、此の蠻的なゲームは、ローマ人の強壯な體格と鐵の如き

精神に適當した唯一つの悲劇の型式だと云つてゐる。ナポレオンは熱心にローマを再興しようとした。即ち新しい宮殿、新しい學校、新しい運河、或は新しい道路を作らうとした。然かしながら彼れは例によつて、自分がローマ皇帝となつて、永遠の都(ローマ)を訪ね、それに幼きローマ王を示し得る時まで、此の公共事業を延期した。而して此の夢は千八百十一年中、彼れを惱まし通したので、彼れはあのモスコイ大敗の年千八百十二年中にはローマを訪問すべく計畫を立ててゐた。

然らば何故に此の開明的なコスモポリタニズムが破れたのか。疑もなくそれは一面に於て、時代に先んじてゐたからであつた。大衆は其の理想郷に到達するには、先づ吾人が今立つてゐる中間の階段、即ちナシ・ナリズムを通つて行かなければならない様に考へられる。マッジニが道破した通り、國家主義はコスモポリタニズムに到達する階梯である。一世紀以前中央ヨーロッパを支配した、粗蕪にして且渾沌たる状態より、一躍四海兄弟の理想郷に跳び込むには、夢想だもなし

得ざる努力を要すべきは當然のことであつた。然かしながら此の高遠な理想が、強大な力で人類を引寄せより先に、恐らく國家主義は、武装を以てそれ自身を毀滅するであらう。千八百六年から同十一年に至るヨーロッパは、バルト海から地中海に及ぶ、大コスモポリタン帝國を形成するには、確かに合適なものではなかつた。此の時ドイツ人、オランダ人、スウィス人、フランス人、イタリア人、或はイスパニア人等、幾多の異人種は、漸くのこと一つ一つの弛い同盟の下に寄集められてゐたのである。さればそれらをナポレオンのフランスが主權を持つ一大組織の中へ織込むことは、到底不可能であつた。吾人が此の問題に關する意見を、組織的に述べようとする時、直ぐ其の無限の複雑さに氣が付く。ヨーロッパが合衆國を組成し得る唯一の條件は、其の中に含まれる諸國民の絶對的忍従であつた。然かし千八百六年には、此等ヨーロッパの諸國民は決して左程従順ではなかつた。彼等は此の時既に、國民生活を自覺し始めてゐた。諸君がアメリカ統一當時の歴史に就いて熟知されてゐる通り、一つの大きい合成帝國、否國家の聯合でも、それを作るこ

は非常に困難な事業である。アメリカに於ては、諸種の條件は聯邦組織に好都合であつた。即ち人種、言語、感情而して或る點までは利益が共通であつた。それでも尙數年の間聯邦問題は、不定の裡に動搖してゐた位である。決して當時の政治家の手腕と穩健のために、聯邦が成立したのではない。而して更に、ジェファーソンやハミルトン或はワシントンと、此のナポレオンとを比較する時は、より一層明瞭に、彼れが種々雑多の民族を、彼れの統治下に統轄するのに失敗した事由が看取されるのである。

聯邦統治者に必要な政治的長所は、第一に手腕、寛恕及び忍耐である。ナポレオンの天性は、此等の資質に缺乏してゐた。寧ろ其の反對に性急な點が目立つ位であつた。千八百六年には既に彼れは、所構はず我儘勝手をする様な習慣が付いてゐた。幸運は彼れを増長させて了つたのである。セント・ヘレナで彼れは後悔して告白した。曰く『余は自分自ら増長したのを認めない譯には行かない。余は常に人に命令してゐた。生れつき力は余の特性であつた。余は目上や法律が嫌ひ

であつた』と。斯の如き人物は異民族を宥和すべき器ではない。其の上イギリスの商業的壞滅を確實ならしめんとした大陸制度は、北ドイツ、オランダ、イタリアを始め、其の他の屬邦に、甚だ苛酷な重荷を背負はせた。其のために諸國は、ナポレオン法典と彼れの工學上の離れ業によつて得た所のものを、此の大なる經濟上の試み（大陸制度）と、それが原因となつて起つた戦争によつて失ふ様な不始末を呈した。千八百十五年になつてナポレオンは、漸く譯が分つて來た。此の年に及んで彼れは心から、フランスの利益と隣接諸國の利益との協調を計らうとしたのであつた。然かし茲に至るまでには、既に此の種の企を無効にする程、彼れの信用は地に墜ち、又諸國から憎まれてゐた。冷酷な逆境の迫害に身を委せなければならなかつたセント・ヘレナに至つて、初めて彼れは自分の生涯の弱點を見付け出した。しかも彼れは尙自分の經歷の何れの點に於ても、異つた行き方をすることは不可能であり、又ヨーロッパに於ては、ワシントンの様に振舞ふことは出來ないと強辯して、其の弱點を陰蔽しようと努めたものである。それは確かにさうに違ひない。然か

しながら彼れは、アミアン條約で得た光榮ある地位に満足し、又千八百三年イギリスとの再戦の原因をなした不斷の東方政策、千八百五年對奧戰の原因となつたジエノアの併合等を思ひ切つて、平和な第一統領であり得たのである。而してヨーロッパ聯邦を實現せんとする彼れの要求は、唯全世界的統治、殊に千八百十二年のモスコウの勝利による外なしといふ、彼れ自身の主張によつて失敗に歸したもので、而かも此の様な遣り方のために、ヨーロッパは平和と友愛とを失ひ、其の延長である聯邦を見ることが出来なくなつて了つたのである。

尙云へば、既に述べた様に、ナポレオンは隆盛時代に、概して外面的統治に重きを置き、而して最後の手段として『力』に頼つた。若しドイツ人が、彼れの政治の優越してゐるのを信じなかつたならば、彼れは強制を以て其の目的を貫徹しようとするのであつた。即ち茲に、愛國的パンフレットを發賣した廉で、ニールンベルグの書籍商バルムを、即決死刑に處した如き、言語道斷の暴行が發生するのである。此の種の挿話は、單りこれのみに止まらない。千八百七年の初め、彼れはワルソウ

から、カッセル市附近に起つた一揆に就いて、其の起つた村落を焼き拂ひ、首魁三十人を銃殺し、其の他二百乃至三百人の暴徒を囚虜として、フランスに送致すべく命じた。而もそれから少し経つて、またまた六十人の死刑を命令したのであつた。吾人はナポレオンが地方的一揆を鎮壓する手段として、銃殺さるべき人々を、數學の計算的に處刑した似寄つた例に出逢ふこと度々である。即ち千八百九年七月三日、彼れはニールンベルグの住民六名を死刑に處すべきことを命じたし、千八百十三年一月二十八日には、エルベルフェルド附近の人々六名が處刑された。而して彼れの亂暴はこれらに止まらず、千八百十三年三月五日には、遂にベルリン駐屯フランス軍司令官たりし義子ユーージェーヌに向つて、必要とあらば見せしめのために同市を焼拂つてもよいとすら命じたものであつた。

斯の様な苛酷な遣り口は、イタリアに於ても強制的に實行された。其れ故前方は、元氣のない分裂してゐた其の人民が、自由と統一の保證だと讚美した彼れの政治を、後には一般に嫌ふ様になつて了つた。イタリアの熱狂的愛國者アゼリは、

ナポレオンのロシアに於ける災難の報道を聞いて起つたチ・リン市民の感激や、彼れの如き常勝者でも、或る點に至つては蹉跌するかといふ彼等の驚異、又彼等が最大にして最強の暴政が滅亡したことを喜ぶ無限の歡喜等を、燃える様な言葉で述べてゐる。然かし此のイタリア民族の歡喜は、『エスイタ教徒の服装せるナポレオン、サーザイテスの手に持つアキレスの槍』と云はれた、ヴィクトル・エマヌエル一世の微弱であるけれども不快な政治の置換へによつて、間もなく夢散されなければならなかつた。なぜなら、不遇から不遇へ踰越として歩むのは、人間の運命だからである。それは兎も角、アゼリ・ヤ其の他イタリアの自由主義者の言葉は、ナポレオンの統治が、以前最も其の恩恵を蒙つた土地に於てすらも、到底堪へられな

いものとなつたことを明示してゐる。

新カロロ大帝(ナポレオン)は更に、法外に苛酷な手段を以てローマ法王を取扱ひ、頗る重大な過ちを重ねた。千八百一年から翌年に跨がつて、有益な協商コンコルダットをヴァティカンと締結した第一統領は、千八百七年以後、律儀で遠慮勝ちな

法王を威壓しようとした皇帝ナポレオンとは、全然別な人間であつた。然かし此の變化を説明するのは容易なことではない。如何となれば、シーザーの後繼者たるナポレオンは、明かにベテロの後繼者(ローマ法王)の援助を失つてはならなかつたからである。然かしヨーロッパをナポレオンの脚下に置いたチルジット條約(千八百七年七月)以後は、驕慢が彼れの政策を指圖する様になつた。此の條約が成立してから二週間を経て、彼れは法王ピウス七世に、義子ユージェーヌを通じて、酷い手紙を送つた。それから後度々見られた様に、彼れが出塵の徳について、教會の主長を説教する時程其の得意なことではなかつた。ナポレオンは法王に對する説教の材題として、キリストの『我が王國は現世のそれにあらず』といふ言葉を取つて、彼れ(法王)にそれを考へよと命じた。その手紙に於て、皇帝は聲明した。『法王は、神が帝王の權能を、法王のそれよりも神聖ならずと思つてゐる』と、信じてはならない。如何となれば、國王は法王より遙かに以前より存在してゐるからである』と。更に云つた。『若しピウス七世が、キリスト教徒に向つて彼れ(ナポレオン)を非難するな

らば、彼れは反對に法王を、世界を目茶苦茶に破壊すべく遣された排キリスト教徒として取扱ひ、且彼れの國民をローマ教會から脱退させる。十年間に互つてヴァティカンに謀叛を宣傳し續けた。法王はナポレオンを破門しようと考へなかつたらうか』と。——『彼れ法王は武器がフランス軍の手から脱け落ちると思ひはしなかつたらうか。彼れは余を暗殺するために、我が國民に短劍を授けはしなかつたらうか。……』『彼れはルイル・デボンネールのために、余を捕へようとするか。……』『現在の法王は勢力が餘り大き過ぎる。僧侶は政權を持つべきものではない。彼等をしてユリウス・ボンファッス、グレゴリー、或はレオ輩よりも、一層價値あるセント・ペテロ、セント・ポール、其の他の神聖なる使徒に摸倣せしめよ。イエスキリストは、彼れの王國は現世のそれにあらずと云つた。なぜ法王はシーザーに屬すべきものを、シーザーに譲らないのか。現世の彼れ法王はイエスキリストより偉いのか。』云々。^註これが千八百七年七月ナポレオンがユージュエヌを通じて法王に致した手紙の要旨であつた。簡潔にして辛辣、傲慢な字句の連続は、全くナポレオンので

ある。それは練兵場での號令を聯想せしめる。更に又それは吾々をして、彼れの幼年時代の教師の一人が、彼れの風態に付けた形容の『火山的』なる言葉を想起せしめる。要するに、此の手紙が空虚な脅喝でなかつたことは、記憶すべきことである。即ち彼れと法王との不和が遂に破裂した時、彼れは自分が法王に與へた出塵脱俗の説教を地で行き、法王を位から追ひ、サヴァナに監禁したのであつた。

註、ナポレオンは陰險な詭策を懷いて、此の手紙をヴァティカンの法王に遞送する底意の下に、ユージュエヌ宛に送つたものである。而もそれに添書を附して、此の手紙は本當に祕密な私信であつて、決して法王に示す積りで書いたものではないと注意してあつた。

その後もナポレオンの法王いぢめは止まず、ピウス七世がフロレンスの僧會に向つて、ナポレオンが同會監督區へ推薦した僧侶を、承認しない様にと命じたのを理由として、彼れは千八百十一年の初、トランスアルプス州の長官公爵ボルゲー

ゼに、激しい手紙を送つて、法王を一層嚴酷に壓迫する様に命じた。以下其の手紙である。

余は余の人民を、此の無智にして我儘なる老耄の激情或は憤怒より、保護せんと欲するが故に、余は卿に、彼れが余の教會乃至臣民と交渉するべく、且若し彼れにしてこれに違背せば、其の不謹慎を罰せん旨を、彼れに通告することを命ずる。法王の家族中嫌疑あるものは、凡べてこれを退去せしむべし。彼れの側近には、只必要の人物のみ留め置くべし。而して何人たりとも彼れを訪問せしむべからず。サヴ・ナの守備兵を増加すべく準備せよ。法王の手許より、凡べての新聞、書籍、文書を押收すべく注意を怠らず、それをパリーに送付すべし。若し法王にして慮外の行爲を敢へて爲さば、卿は彼れをサヴ・ナ城に幽閉せよ。而して卿は、豫め其の糧食、或は必需品の供給に注意すべし。……法王の文書の檢閲は、最も巧妙なるを要す。卿は彼れの手許に一枚の紙、一

本のペン、一瓶のインク、其の他文字を寫し得る器具は、如何なるものと雖も存置すべからず。卿は彼れに許すに、佛人の僕婢二三人を以てし、それにして若し卿の意に充たざるものあらば、放逐せよ。而して法王一族の外出は、これを禁止すべし。

其の後法王は更にフ・ンテ・ヌ・ブローに移されて、苛酷な待遇を受けた。

斯の間數年に互つて、新カロロ大帝は、其の絶大なる勢力を以てすら、尙及ばざることも明かな大計畫に、彼れ自らを投入した。即ちヨーロッパ大陸の統治に満足すべきであつたにも拘らず、彼れは更にベルシアとの同盟計畫に手を染めた。これは彼れの宿望である東方遠征に際し、露佛の聯合軍が、ベルシア灣からインダス河乃至デリーに進軍する場合を考慮に加へた爲であつた。此の目的のために、彼れは將軍ガルダンヌを使節として、テラーンに遣した。此の他又彼れはチルジット

條約後、ロシア帝アレクサンドル一世と、トルコ分割の計畫についても協議した。取りも直さず、これは東方の形勢に、一層大なる變化を及ぼす所のものであつた。彼れはアレクサンドルに對し、二月二日(千八百八年)附で、次の如き意味の手紙を送つてゐる。即ち兩人の協約成立後一ヶ月を経ずして、彼等の聯合軍はボスファルス海峡附近に到着し得られる。而もこれは眞の手始めであつて、若し其の時イギリスが服従を肯んじなかつたならば、否服従の兆候すらも示さなかつたならば、兩國の軍隊はトルコより出發して、更に東方に進むだらうと。彼れは尙彼れらしい言葉を續けた。

五月一日に吾々の軍隊は、既にアジアに到達することが出来る。又これと同時に陛下の軍隊は、ストックホルムを占領し得る。然る時、東洋で脅威され、地中海東岸から放逐されたイギリスは、寡圍氣を飽和せしむる程、澤山な事變の重量によつて、壊滅するであらう。乃ち陛下と余は平和の美果を撰み、行

政の技倆と政治の恩恵とによつて振興し幸福ならしめた所の宏大無邊の國土内に餘生を送ることが出来る。世界の敵(イギリス人)は然ることを希望しない。吾等は不知不識の裡に、一層偉大とならねばならぬ。運命の命ずる所を行ひ、大勢の進展が導く所に赴くことは、共に聰明の象徴であり、慧慮の顯現である。而して、現今の時勢に對して、人々は其の相似せるものを、十八世紀の新聞中に求めず、六千年の歴史中より求むべきことの當然なるを、承認せざる小人共は敗北し、陛下と余が命ずる行動に、追隨するに違ひない。斯くしてロシア國民は、此の大事業に結果せる光榮、富貴及び幸運によつて恵まれる。余は此の簡短なる手翰に於て、陛下に余の全精神を表明するものである。チルジットの事業は、世界の運命を規定するであらう。

此れが運命論者の言葉だらうか。又それは世界を動かす挺を運命論の中に見出す、大精神の現れであらうか。「陛下と余が命ずる行動」なる言葉を伴ふ、「運命の

命する所のものを爲す」と云ふ言葉に注意すべきである。前者は後者を説明してゐる。運命に對する此の訴の意義を如何に解釋するとも、それは姑らく措き、吾人は斯くの如き大計畫を描き出す高遠の理想、斯くの如き大事業をロシア皇帝に推薦したオシアン的な手腕及び此の大事業を完成するために、ヨーロッパなる大建築を東方に向つて押歪めたるヘルクレスの如き大力を稱讚せざらんとして、これを得ざるものである。

さあれヨーロッパが戦争に動搖しつゝある時、斯くの如き老大な計畫を伸展しようとしたことは、彼れの考違ひであつた。新カロロ大帝の國土は、此の時整頓の爲に、時間が必要であつた。十八世紀に於て最も成功したる君主、即ちフレデリック大王や、ロシアのカザリン二世は、既に獲得した名譽に満足すべき時を知つて居て、後半生は慎重な保守主義を採り、前半生に得た結果を確保することに成功した。然るにナポレオンには靜止することが出来なかつた。斯かる時に當つて、千八百八年二月、彼れの軍隊と同盟國イスパニアの軍隊は、ポルトガルを占領したのであ

つた。然かのみならず、此の時既に彼れの胸中には、イスパニアのブルボン家を王位から退けようとする誘惑的思想が形成されてゐた。吾人が第一講で述べた通り、イエナ戦役中のイスパニアの行動に對して、彼れは含む所があつた。此れと共に、彼れは中央アメリカ及び南アメリカ(當時其の大部分はイスパニア領であつた)の實際上の君主として、又イスパニア軍の指揮者として、西方(アメリカ大陸)か或は東方(アジア)か何れかで、斷乎武力を以て世界のバランスを破らうとの希望を抱いた。而して彼れの書翰が示す様に、當時彼れの狙ふ的は西方よりも東方であつた。乃ち彼れは此の東方遠征に資する爲に、イスパニアと、イスパニアがアメリカから採掘した金塊とを、利用しようとして考へたのである。これが即ちナポレオンがイスパニアを名實共に併合した、主要な理由であると考へられる。吾々はこゝにカンニングの有名な言葉を借りて、彼れはイスパニアと新大陸とに援助を求めて、舊世界を顛覆せんとしたものである、と云ふことも出来るのである。

五年間の連戦連勝は、其の痕跡を彼れの性格の上に印刻した。前にも云つた通

り、千八百二年の年末には、ナポレオンは東西兩半球に於て、進取的の政策を取るの
は無謀であると考へてゐた。であるから東進政略を自由ならしめるために、ルイ
ジアナをアメリカ合衆國に賣却したのであつた。然るに今千八百八年の春に至
り、彼れがイスパニア併呑を企圖した爲に、彼れは東西兩方面の政策が生む必然の
結果に當面した。即ち中央及び南アメリカの主たらんか、彼れは遅かれ早かれ、ワ
シントン政府の恐怖を惹き起さなければならなかつたし、東洋の大部分を支配す
べき人たらんか、イギリスはさて置き、それは又必然セント・ピーターズブルグの嫉
妬心を喚び醒まさざるを得なかつたからである。然かもナポレオンはその何れ
にも注意しなかつた。況んやイスパニアそれ自身の反抗の如き、それを豫想する
ことだに爲さなかつた。千八百八年春の彼れの手簡を讀まれたい。それらは何
れも興味深いものである。彼れはチャールズ四世と強情な其の子フェルジナン
ドに、恩給を與へて讓位せしめると共に、當時マドリッドとリスボンとに居たミ
ラーとジュノーとに向つて、イスパニア、ポルトガル兩國の役立ち得る軍艦は、すべ

てこれを整備すべく命じた。將軍デ・ボンには又南方カディズに急行し、トラファ
ルガーの海戦以來同港に蟄居してゐる、五隻のフランス軍艦を保護すべき任務が
あつた。そして少くとも二十八隻の戦列艦を、東方遠征に用ゐる目的の下に、凡べ
ての造船所は、イスパニアの海軍を復活しなければならなかつた。其の上彼れは
ツローンの艦隊に、南イタリアの兵二萬を搭載し、エチプトに渡航させる計畫を立
案した。イスパニア人に關しては、彼等(イスパニア人)は多分自國の造船所の活躍
を喜ぶだらうし、又イギリスは、斯くの如き恐るべき襲撃によつて、何うしてポルト
ガルに援軍を派遣するかに就き、痛く心配するだらう。而して彼れ(ナポレオン)は、
同春期末に、確實にエチプトとトルコに、痛烈なる打撃を加へる。此れが千八百八
年五月中旬、マドリッド市民がフランス軍に向つて、絶望的暴動を起した事件を詳
細に聞知した後に於てすら、尙彼れが胸中に抱いてゐた案であつた。彼れは此の
騒動を『奇襲』と呼んだ。擬書は措いて問はず、ナポレオンが眞正に書いた手紙で
は、彼れが千八百八年五月及び六月のイスパニア國民の蜂起を、豫知してゐた證據

は認められない。然り、ナポレオン書翰集に載せられてゐる、千八百八年三月二十九日附の書面で、彼れは深慮ある哲學者の様な態度で、元帥ミューラーに對し、幼稚で熱情と勇氣に富み、且政治熱の無限なイスパニア人を取扱ふには、周匝の注意を以てすべきことを訓諭してゐる。然かし此の手紙はラ・カイズがセント・ヘレナで捏造した偽物であることは、殆ど疑を容れないもので、其の頃の彼れの本當の手紙は、明かにそれと違つた精神を示してゐるのである。

マドリッドに暴動が勃發する二三日前、ナポレオンは同市に駐屯してゐたミューラーに、次の様な手紙を送つて、彼れを咎責してゐる。曰く『卿がブルゴス一揆に關して軍隊に下した特別命令は、不愉快千萬のものである。噫、若し余が將卒に、彼等の武装解除を認めざる旨を告知して、又十五名の近衛兵が勇敢なる行爲の一端として暴徒に發砲せる事實を擧げて、四頁の告知書を送つたなら、何うなつたらう。フランス人は斯くの如き宣言を無視し去るには、餘りに聰明である。卿は決して斯くの如きことを、余に就いて學ばなかつたのだ』と。更に彼れは續けて云ふ『マド

リッド市の秩序を維持するには、三千の兵と十門の大砲が必要である。あの日卿が發した命令三ヶ條の如きは、全く士氣を挫折するものに過ぎず』と。疑もなく彼れの正筆である此の手紙と、セント・ヘレナから出たもの（前掲千八百八年三月二十九日附の書面）とを比較して見る時は、後者の信憑し得ざることが明瞭となる。それはイスパニアの暴動に關して、ナポレオンを庇護し、ミューラーを非難する様にたくまれたものである。其の他當時の手紙の何れに於ても、彼れはイスパニア人を極めて弱劣微力のものとして取扱つてゐる。ナポレオンは次の様に考へた。イスパニア人は、其の憤怒が沈靜したならば、トルコ帝國の分割とインドに於けるイギリスの勢力の顛覆を、遂行すべき東方遠征に、有效なる援助を與へるであらうと、五月十七日（千八百八年）彼れは又斯う書いてゐる。『イギリスは、東方に於ては非常に脆弱である。一隊の遠征軍が到着するならば、其の植民地は急轉直下滅亡するであらう』と。而して其の時彼れは又イスパニアの領内をカディズ指して南下の途にあるデ・ボン將軍の軍隊に就いても、それは同國內を自由自在に横行し得

る十分な強さを有してゐるものと、自負してゐたのであつた。

ナポレオンの性格と歴史とを組上げる諸原因の啓示として、千八百八年四月から翌五月に書いた彼れの手紙は、此の上なく興味深いものである。而もその長さ、精密さ及び熱烈さは、吾人をして彼れの頭の中を十分に透視せしむるに足るものである。隙間も無く印刷された八十三頁の中には、正史に載せられたあの宏大無比なる計畫の伸展及び彼れらが終に崩壊した理由が、克く現はれてゐる。それによれば此の偉人は、シシリイ征服の前奏として、イスパニア占領を計畫し、而して次にシシリイを足場として、トルコ帝國を分割し、エチプトを占領しようとしたものであつた。而もこれがナポレオンの目的の終局ではなかつた。即ち強大なる遠征軍の一隊は更にインドに渡航し、同時に分遣艦隊は、各海洋に於てイギリスの通商を破壊しようとするのであつた。此の計畫を完行するには、イスパニアの海軍が其の重要な役目を引受けなければならなかつた。それには同海軍が、少くとも二十八隻の戦列艦の外に、幾多のフリゲートと小船を提供する必要があつた。而

してナポレオンは、テクセルからジエノアまでの沿岸の海軍力は、トラファルガーの決定を改竄し、地中海をフランスの池沼とし、而して東方の征服を確實ならしむるだらうと考へたのであつた。

此等ナポレオンの希望は凡べて、イスパニアの連続的援助を假定した上に懸つてゐた。そして若し同國の國狀が其の頽唐的な宮廷と無氣力な貴族の狀態から、正確に判斷されるならば、前の結論は當然なことと考へられた。然かしナポレオンの觀察は誤つてゐた。年若い頃彼れは國家の真相を看取するのに、専ら國民に就いて考へ、王室や貴族には餘り注意を拂はなかつたものである。それが今や全然正反對の行き方をする様になつてゐた。彼れはイスパニア國民を判じるのに、目安をあゝの愚劣な君主に取つた。であるから引續いて起つた事件は、忽ち其の觀察の誤謬であるのを示すに至つた。マドリッド市民は數時間に亘る絶望的戰鬥に於て、ミューラーの全軍に堂々と對抗した。又デューボンは何處へ赴くにも心の儘にならなかつた。彼れはカディズに碇泊してゐる五隻のフランス軍艦を解放す

ることが出来なかつたのみか、却つてイスパニア軍にアンダルシアのバイレンで包圍され、七月二十二日(千八百八年)二萬二千八百の兵を率ゐて、終に降を其の軍門に乞はざるを得ない醜態を呈する始末であつた。此の出来事は今迄ナポレオンに加へられた打撃の中で、最も痛烈なものであつた。如何となればそれは差當り彼れの世界帝國の夢を抹消し、且彼れをして東方遠征に割當てた軍隊を、イスパニアに轉向するの餘儀なからしめたものであつたからである。彼れは手輕にトルコ帝國の分割、東方に於けるイギリスの勢力の顛覆、及び其の降服を確實ならしむること等を希望してゐた。然るに今やイスパニア及びウエリントンと闘ふために、六つの戦争を交へざるべからざる場合に立到つたのである。戰術的の判断から見て、最初彼れは確かに成功しさうに見えた。即ち千八百九年にはオーストリアを壓倒し、翌十年から十一年に互つては、ポルトガルとイスパニアの一角を除く外、向ふ所敵無しの概を示した。然かし半島戦争が終熄せざる限り、彼れは其の分割すべからざる精力を、東方に轉ずることが出来なかつた。而もイスパニアを征

するに、背後の安靜を計るべく、親しく東歐諸國の君主を招いた千八百八年九月のエルフルトの會議に於て、彼れは此の會議を催した主要目的の一つである。アレクサンドル一世(ロシア皇帝)の疑惑と恐怖とを除くことに失敗したのであつた。而して半島戦争の繼續はアレクサンドルをして、千八百十一年の末大陸制度脱退を敢行せしむることとなり、延ひてこれが千八百十二年モスコウ遠征の第一歩となつたのであつた。

ナポレオンの苛酷な政策は、再び争鬭(ロシアとの)を惹き起した。其の規模のなる、表面的原因とは全然比較にならなかつた。今述べた所の財政上の問題——大陸制度——以外には、兩皇帝の間に何等重大な争點はなかつた。即ちトルコ帝國の分割は勿論延期せられて宜しいものであつたし、ポーランド問題も協定することが出来るものであり、而して千八百十年の末にナポレオンが嘗無く退位させた、オルデンブルグ太公——ロシア皇帝の義弟——に、ドイツの一公國を與へることも承認し得られないものではなかつた。然かのみならず更に積極的に一步を

進め、イスパニアに於て二十五萬のフランス軍が交戦に従事してゐる大切の場合、總べてをロシアとの一戦に賭するよりも、寧ろ大陸制度の問題中に和解點を見出す方が、ナポレオンに取つては確かに良策であつたのである。然るに彼れは何れの點でも讓歩しようとしなかつた。否然かせざるのみならず、却つてロシア征伐のために六十萬餘の兵を整備したのであつた。而して此の莫大な軍隊の中で、フランス自らが供給したのは、辛うじて其の半数に過ぎないといふのが、彼れの勢力を示す象であつた。千八百十二年はナポレオンの十字軍である。ユダヤ種の一ドイツ青年(ハイネ)は、火の如き言葉で、皇帝が東方に進み行く近衛兵を見詰めてゐる光景から、彼れの心に刻まれた印象を述べてゐる。『余は永久に馬上の彼れを忘れない。永遠の眼は、進み行く近衛兵を運命の靜寂を以て凝視してゐる。凛々しい大理石の様な皇帝の面上に止まる。彼れは斯くして彼等をロシアに送つた。而して老逞兵等は、強烈なる獻身と深甚なる懷慕的熱誠、而して死の誇を以て、彼等の君主を仰ぎ見た。』

『シーザーよ、將に死なんとする者共は、君の健かならんことを祈る。』

此のハイネの言葉は、一世紀前の謎を釋く一助となる。何故ならばロシア遠征は、其の當時に於ても謎であつたが、吾人が總べての事實を知る今日でも、依然として謎であるからである。モスコウ指してニーマン河を渡つたドイツ人、イタリア人、スウィス人、或はオランダ人の何十萬と云ふ大衆の中、誰一人としてナポレオンが命令を下したといふこと以外に、何故彼等がさうしたか(此の遠征に参加したか)その理由を説明し得るものはなかつた。彼等の中の或る者は多分、所謂イギリスの海上に於ける専制を打破するために、大陸制度を回復しようと希望してゐたであらう。然かし其の時既に大陸制度は、それを破壊すべく企畫されたイギリスの海軍條例よりも、一層重き負擔となつてゐたのであつた。これは北ドイツの人々の皆熱く知つてゐた所である。然からば又彼等はロシアに猶一度、イギリス品排

斥を強ひるため、モスコウに進軍したのであらうか。これは彼等の大多数が知つてゐた通り、無益な努力に過ぎざるものであつた。なぜならば『大軍』の著用してゐる外套の大部分は、ヨークシャーから來るものであつたからである。

ナポレオンの性質を説明する一つの面白い事柄を、ロシア皇帝に最後の通牒を持つて行つたナポレオンの使節、伯爵ナルボンヌが語つてゐる。アレクサンドル一世(ロシア皇帝)は會見の終りに臨みナルボンヌに斯う云つた。『皇帝(ナポレオン)は何を望んでゐるのであらうか。彼れは朕に朕の人民を滅亡する手段を採らせようと強ひるのか。而して彼れは、朕が彼れの要求を拒めば、二三次の戦によつて數州或は主要都市を占領し、朕が平和を請ひ、彼れ自ら平和條約を指定することに成功するだらうと想像して、戦争を以て朕を脅迫するのであらうか。然かしそれは間違つてゐる』と云つてから、彼れはロシア帝國の大きな地圖を取つて、靜かにそれをテーブルの上に展げ、更に言葉を續けた。『伯爵、朕はナポレオンをヨーロッパで最も偉大な武將であり、其の軍隊を最も好戰的であり、又其の輩下の將校を

最も勇敢であり、老練であると信じてゐる。然かしながら距離は一種の障壁である。されば若し朕が敗戦數回、而して人民を牽き伴れて退却するならば、又朕が時期と氣候と荒野とに防禦を委せたならば、朕は近世に於て最も怖るべき軍隊の運命に對して、恐らく決定的の言葉を表明することが出來よう』と。ナルボンヌはフランスに歸つて、ロシア皇帝の云つた此の言葉を、隠す所なくナポレオンに報じたが、彼れはこれに耳を傾けずして、モスコウ指して進軍したのであつた。

註 ナポレオンを熟知してゐる人々は凡べて、彼れの驚畏すべき經歷の最後は、慘烈なる滅亡に了るべきことを明かに豫知してゐた。フランスの樞密顧問官連は、ナポレオンが彼等に向つて、『朕は有史以來最大の成功を贏ち得たり。さらば！ 朕は朕の子孫に王座を傳へんがために、歐洲各國の全首都の主長たらざる可からず』といふ、恐るべき運命を豫示する言葉を口にした時、禮讓の城壁に書かれた文字を讀んだに違ひない。

世界帝國の夢はモスコウで消えて無くなつた。然かしロシアで殆ど五十萬の兵を失つた揚句ですらも、千八百十三年のサクソニア戦役中の休戦の際、彼れは尙其の時中立國であつたオーストリアの提示せる媾和條件を拒絶した。此の時オーストリアの要求は無法なものではなかつた。即ちそれによれば、ナポレオンはイタリア領とドイツに於ける支配權は奪はれるけれども、ラインの境界とイタリアの領土は其の手に保留し得られるものであつた。而してこの條件はヴェストリアに於けるフランス軍の惨敗から見ても、決して苛酷のものではなかつたのである。ナポレオンはこれでも尙ルイ十四世よりも、遙かに廣い領土を支配し得られるのであつた。伯爵ナルボンヌは再びドレスデンに於て、皇帝に慎重な方針を取り、そしてオーストリアの中立を確保する様、忠告する役廻りに當つた。彼れは云つた。『皇帝、フランスは陛下のために、最後の一人、最後の一クラウン(貨幣)まで貢獻せり。陛下は目下騎兵三萬を有し給ふ。然かしそれらは眞の騎兵隊を形成せず。陛下の軍隊は今や新兵を以て充たさる。彼等は勇敢なれども戰に習熟せず。

彼等は戰鬪に勝ち得べしと雖も、敗戦又は退却に耐ふること不可能なり。吾人が經驗すべき最初の頓挫は、フランス及び陛下の滅亡を意味す。如何となれば、吾人は今や全歐を迎へて、以て敵としたればなり。平和、事實それは單に一片の休戦條約にせよ、尙能く吾等を救濟せん。假しその平和は僅か二ヶ年の間に過ぎずとも、進んでそれを締結せられよ。而して其の間陛下は、勢力の要素總べてを整頓し給ふことを得ん。吾人は敵に反間の策を計るべく、而して陛下は再び陛下の運命を試み給ふべし。……平和は必須のものなり。而して臣をして跪きて、それを陛下に求めしむるは、陛下に對する臣の献身と忠節となり」と。コーレンクルや其の他の忠誠の臣も亦、同様のことを切言した。然かし其の效はなかつた。年若いプロイが云つた様に、『彼れの心の中には惡魔が居た。彼れは大破裂を來たすべき危機に臨んですら、尙オーストリアに對してあらゆる請託、契約、或は威嚇を用ゐることを惜しまなかつた。』結果は速かに來た。オーストリアは中立の位置を棄てて、聯合軍に加擔した。而して其の結果はライプチヒとなり、無益に大軍を下

イツに投じた更に一つの大損害となつた。

ドイツに於ける戦争にも尙飽き足らなかつたかの如く、彼れはイスパニア、それが叶はざれば同國內に於て彼れの軍隊が支持し得られる限りの地域を維持することに執着した。後日ナポレオンは、千八百十二年の末に、イスパニアから兵を召還しなかつた愚かさを自身承認した。これはドイツに於ける策動に對して、二十萬の兵を供給することの出来るものであつたからである。然るに、戦局が更に一層惡變した千八百十三年の末になつてすら、尙彼れは敢へて此の手段に出でようとしなかつたのである。そして彼れがフランス自身のために、シャンパーニュの平原に戦ひつゝあつた時にも、元帥シューレーは依然としてカタロニア(イスパニアの東北地方)を維持してゐたのであつた。

ナポレオンの性質には、屈服とか妥協とかを輕侮する或るものが確かに存在してゐた。此の屈すべからざる強情の一例は、彼れがドイツの戰場からフランスに歸國後、千八百十三年の十一月にも現はれてゐる。ヴィットリアの大敗(千八百十三

年六月)の後、イスパニアから追はれたジ・セフ・ボナバルトはモルフ・ンティメに恰も囚人の如き境涯で、不遇の日を送つてゐたが、此の時ナポレオンはローデレルを仲介者として兄に向ひ、半島で自身(ジ・セフ)の幸運を壊滅するに與かつて力あつた、彼れの無頓着と無能力に就いて嫌らざる旨を表明し、更に若し彼れ(ナポレオン)が自身にイスパニアを統治したならば、事局の推移は實際とは非常に違つてゐたであらうと云つた。これは確かに事實らしい。なぜならジ・セフは、いつも家屋か女か或は器物についてばかり考へてゐたからである。ナポレオンは怒つて斯う云つた。『余はサンクルーやチュイルリーは少しも念頭に置かない。若しそれらが焼拂はれても、毫も惜しむものではない。余は住宅を重要視しない。婦女子も齒牙にかけない。然かし子供については少し……余はサンクルーを去つてモスコウに赴く。それは余自身の希望や友人のためではない。唯全く嚴正にして情實に捉はれざる思考によつてである。余はジ・セフをイスパニア王たらしめるために、幾千幾十萬の人を犠牲に供した。余の王室を確乎たらしむるため

に、兄弟が必要であると信じたのは、余の一つの思違ひであつた。余が帝統は彼等無しと雖も、確固不拔のものである。それは大勢の力によつて、暴風雨の中にも屹立する。皇后はそれを強靱ならしむるに十分な才能を有する。彼の女は兄弟の誰れよりも聰明である。彼等の誰れよりも機略に富んでゐる。弟ジ・ロームはドイツに於ける余の事業を顛覆して了つた。今日となつては、余は最早イスバニアに於て、フェルチナンドの代りにジ・セフを擁立すべく盡力するつもりは少しもない。斯くする時、イスバニア人は利益のためにも、毎もフランスと聯合するに躊躇することはあるまい。又フェルチナンドと雖も、ジ・セフが余に禍した程余に楯を衝く様なことはないだらう」と。ナポレオンが斯の様に、無情な涙なき理論を尊重するのは、甚だ不思議である。何故ならば此の文句に見る通り、彼れは一の假設から他の假設に跳躍してゐるからである。これは彼れとしては甚だ奇らしいことである。而して計算が此の様に多く誤算を含んだことは、確かに未だ曾て無い所だ。

ナポレオンの様に明哲な歴史研究者が、アレクサンドル大王とカロロ大帝の兩者を兼ねることの至難なのを覺らなかつたのは、驚くべきことである。ヨーロッパの統制と東方の征略とは、絶対に兩立しない仕事であつた。それはルイ十五世時代の未済の課業であつた。ベンガルとオハイオでイギリスと角逐しつゝ、他方ドイツに於てフレデリック大王と輸贏を争ふことは、ルイ十五世の器量としては、到底及ばない所であつた。ナポレオンは彼れより遙かに堪能であつた。然かしマドリッドやネーブルス、又ベルリンを抑へ、且オーストリアとロシアを脅威しながら、トルコの分割、インドの征服を準備しようとしたのは、彼れとしても狂氣の沙汰としか考へられない。彼れの政策はヨーロッパ的同時に、東方的たることは出来なかつたのである。蓋しクレテ、チル、カルタゴ、アテネの昔から、ヴェニス、ポルトガル、オランダ、乃至大ブリテンの時代に至るまで、偉大なる植民的民族は、概して海上で大發展を遂げ得るならば、陸上では側士の役を演じて満足したのであつた。島國民族は能く拓殖者として成功した。これは自然自身が、彼等の大陸の

戦争に目を奪はれるのを禁じたからである。ヘンリ八世がイギリスをフランスとの無益な戦争に再び曳込まうとした時、慧眼な歴史家チャーバリーのロイド・ハーバートは、次の様に警世の言葉を述べた。「吾人は神に誓つて、大陸に對する企圖を放棄すべきである。島國の自然的地位は、斯くの如き征服に適致するものとは考へられない。イギリスは全く正義の國である。即ち吾々が自身を大ならしめんと欲するならば、永遠の神が吾人に命じ給うた海上の道によつて行かなければならぬ様に思はれる。インドは發見された。そして日毎に莫大な財寶が其處から齎される。されば吾等は須らく努力を其の方面に傾注すべきである。若しイスペイン人とポルトガル人とが、吾人と手を握るのを拒むならば、尙他に吾人が享有するに十分な土地があるであらう」と。此の聰明な努力の節約は、實にイギリス民族の繁榮を作り上げたものである。此の理由から又フランスやイスペインの如き、ヨーロッパの事件に係り合ふ位置にある國々は、同大陸に於ける争覇と新領土を開發する仕事との二重の努力によつて疲弊したものであつた。

ナポレオンはフランスを世界の最大強國となすに、最も見事なる機會を握つた。何故ならば、當時他の諸國民は無氣力であり、又よく組織立てられてゐなかつたのに對して、フランス國民は其の智能と威勢の最高點に立つてゐたからである。情勢斯くの如くであるのに彼れは失敗した。即ち彼れの失敗は畢竟するに、其の性格の缺陷に結果したものであつた。「性質は運命なり」とノーヴァリスは云つた。而してナポレオンの經歷は、此の言葉の眞實であることを證明してゐる。此の偉人は若い時分には、大體其の烈しい性質を理性の制御の下に抑壓してゐた。然るに、多年の過勞で彼れの豫見が鈍つたこと、又詳説することが困難な或る肉體上の原因、或は戰勝から來た自負等のために、彼れは千八百七年以後、其の慄悍な本性を解放し、遂に吾人の熟知するあの結果に到達したのであつた。大業を好む彼れの熱情は、最も陥り易い罪業となつた。彼れは敵が非常に穩かに和解しようとした好機會を逸して了つた。即ち彼れは力と才能とを以て、敵の同盟を粉碎しようとして希望したのであつた。然がし彼れが加へた打撃は、唯彼等の同盟を一層強固にし

たに過ぎなかつた。なぜならば千八百十四年には既に、同盟諸國は彼れの言葉を信じない根據を持つ様になり、而して又前二ヶ年の經驗は彼等に、全ヨーロッパを掌握せんとする無益な企のために、一百万の人命を空しく投じた男と、死ぬまで戦ふべく命じたからである。

第八講 流 人

「余は非常に豫感を信ずる。而して余は余の計畫を完現し、フランスを強大ならしめ、且榮譽あらしむべして、豫感を抱く。」——ナポレオン、ローデルルに向つて。

エルバに於けるナポレオンと、セント・ヘレナに於けるナポレオンとの間には著しい差異がある。千八百十四年エルバに流された時は、彼れには尙イタリアの一部、否フランスをすら、再び手に入れる好い機會が残つてゐた。彼れがそれを否認し、且彼れ自身を唯家屋と、牝牛と、驃馬とを所有してゐる死人に過ぎないと述べてゐることは事實である。然かしエルバに於ける彼れの行動は、平凡な農夫の行動とは少々違つてゐた。而もこゝに又當時の彼れを頗る異つた角度から觀測する他の一説がある。後日彼れはセント・ヘレナで、グールゴーに、自分がエルバに向

つてフォンテーヌブローを出發した時は、又何時かフランスに還らうとする様な、大望は抱いてゐなかつたといつてゐる。「然かし」と彼れは附け加へた。「パリー市廳の宴會に、貴族の夫人ばかりが出席して、軍人は誰一人出席したものが無いと云ふ新聞を見た時、初めてエルバ脱出の希望が心に生じた」と。彼れは更に言葉を續けて云つた。「ルイ十八世は第五王朝の創立者として、分相應に行動すべきである。而して彼れは——「余はナポレオンが餘りに多く仕事をしようとする故に、それに代つた。」と云ひ得る。彼れの云ふ事は事實だ。何故なら、余は餘りに多くの仕事に手をつけたからである」と。

皇帝は此の如き簡明な而も鋭い觀察で、千八百十四年の春に於ける彼れの蹉跌、及び一年後のブルボン王族の馬鹿々々しい崩壊を云ひ表はしてゐる。ブルボン王族が些細な事件に對しても無能力であつたことは、フランス人の矜を傷つけた。ナポレオンは鼻張りの強いパリー兒の鬱憤に當てつけて巧みに論じ立てた。「フランスは嘗て一英雄のために、最大の熱誠を致し、而して今は外國人が連れて來た、

自由のきかない因循な、而も年を取つた流人(ルイ十八世)の陳腐な博識振りに、侮蔑の視線を投げ付けた。」

それは暫く措いて、ナポレオンは千八百十三年ドレスデンで、ナルボンヌが彼れに、假令僅か一年か二年の短期のもので、速かに和を講ずる様に、忠告したことを確かに忘れなかつたに違ひない。此の方法が利益であつたことは、ドレスデン大戦後の不幸な二會戰を経て、益々明瞭となつた。千八百十四年春、捕虜にされた約十八萬のフランス兵は、ロシヤ、ドイツ、イスパニア、或はイギリス等の諸國から續々として歸つて來た。彼等は小さくなつたフランスへ歸つて來た。ナポレオンならざるブルボン家は、ライン諸州、イタリア、オランダ、及びベルギーを諸國に分讓した。ナポレオンはフォンテーヌブローの讓位後、大僧正のボーセーに向つて、「余は讓位した。然かし何一つ讓らなかつた」と云つた。彼れは皇帝らしい落着いた態度を以て斯う云つたので、ボーセーは其の冷靜、沈着で又決然たる様子を不思議に感じた位であつた。ナポレオンは此の時極めて自然な語氣で、エルバの話をし、

更に同島のことを書いてある書物を取り上げて、『彼所の空氣は健康的で、住民は優等だ。余は暮しいゝだらう』と云つた。ポーセーは此の異常な靜謐に驚いた。『然かし自分は、ナポレオンが斯の様に落着いてゐたのは、全く一分將來に希望を懷いてゐたことに基くものと思ふ。即ち彼れはブルボン一族の無能を熟く知つて居り、又彼れらブルボン一族がフランス帝國の三分の一を割讓した結果、國民の間に不評判となるのを豫想してゐたからである。而して各國に捕へられてゐた多數の老練兵が、歸國したのを見て、フランスを従前の地位まで回復すべき手段を、考へてゐたに違ひない。』とは云へ、後日彼れはウイナ公會が破裂したと云ふ風説を耳にしてエルバを脱出したのは、時機尙早の憾があつた』と云つてゐる。然かし何方かと云へば、彼れのエルバ脱出は少し遅過ぎたと云つた方が當つてゐる。なぜなら、彼れが脱出した時は既に、列國はお互に喧嘩の始末を付けた後であつたからである。

斯かる明るい希望を心に持つてゐたことは、彼れのエルバ滞在を非常に面白い

ものにした。傷付いた獅子は間もなく自惚れた捕獲者に跳びかゝる用意を始めた。セント・ヘレナに於ては彼れは、イギリス或は全ヨーロッパが革命の巷とならない限り、脱出は成功しないと觀念してゐたが、此の時はさうでなかつた。エルバは警拔な喜劇であり、セント・ヘレナは長たらしい悲劇である。ナポレオンはエルバに赴く航海中、決して鬱々としてはゐなかつた。彼れは乗つてゐる軍艦『アンドーテッド』の艦長アッシャーに向つて、其の艦や水兵を讚めたり、又總べての出來事に深い興味を感じたり、或る場合の如きは、彼れが若しイギリスの大臣であつたなら、イギリスを世界の最大強國たらしむべく試みて見ると云つたりなどした。彼れがイギリスを讚めるのは、單に此の時ばかりではなかつた。エルバに出發する以前、ファンテーヌブローでも、彼れはサー・ニール・キャンベルに、彼れ(ナポレオン)はいづれの國民よりも、イギリス人に敬服してゐると云つたことがあつた位である。

此の航海中、ナポレオンは詳細に、イギリス侵入の計畫を物語り、イギリスの國土

へ上陸してから彼れは三日の中にロンドンに入らうと考へてゐたと云つた。それから何うするかと問はれたのに、彼れはそれに答へるのは困難である。なぜならば、イギリス人の様に氣概ある國民は、さうされて(ロンドンを占領されて)すら屈服しないだらうからと云つた。然かし彼れは、アイルランドがイギリスより分離することを心待ちに待ち、且イギリスの商業と信用の破壊は、彼の女の降服を餘儀なくさせるだらうことを希望してゐたと述べ、又の日彼れは、スコットランドとイングランドの過激派の叛亂を心頼みにしてゐたとも云つた。このことに關聯して、イギリスのヴィヴィアン少將が千八百十五年の初めエルバを訪れた時(ナポレオンの近衛軍の將校等が此の遠征(イギリス侵入)は畢竟失敗に歸すべきものであつたらうといふ、斷乎たる意見を有してゐたのを見出したのは面白い。例の如くナポレオンは部下の者より以上の希望を懐いてゐたのであつた。

エルバに於てナポレオンは概して元氣が良かつた。イギリスの事務官としてナポレオンについて同島に赴いた陸軍大佐サー・ニール・キャンベルは、次の様な寫

實的な文を書いてゐる。

ナポレオンは確かに戦争を放棄したのを遺憾に思つてゐた。而して彼れは余に對して、大略、若し彼れがオージエロの軍の精神と實力を知り、且其の行動が痲痺してゐたのは、唯全く同元帥の背信行爲にのみ因るものであつたことを知つたならば、彼れは其の軍を合せ、イタリアに入つて戦つたであらうといふ様なことを云つた。兎に角此の時には既に、麾下の元帥全部に對する彼れの尊重愛顧の念が減じてゐたのは明瞭なことであつた。その數日前彼れは余に、諸元帥個々の性質の善惡に就いて述べた。サンシルとマッセナ兩元帥は、彼れの表の第一列に並んでゐた。彼れは又元帥連が戦争に倦きたので、徒らに閑地に居らせたこと、他の將官や佐官から若い司令官を求めなかつたことを後悔してゐた。そして彼れは、これこそ自分の滅亡の原因であると云つた。人生の如何なる境遇にあつても、斯くの如き個人的活動力と不休

の努力性を有つた人を、余は未だに見たことが無い。彼れは不斷の活動を悦び、且彼れと一緒に活動して疲勞する人々を心嬉しく感じたらしかつた。これは余が彼れと共にあつて數度實見した所である。彼れの健康状態が體驅の驅使を許す限り、活動することは、彼れの意志であると自身聲明した通り、研究勉學のために座居してゐるが如きは、如何なる隱退を實行するとも、彼れにとつては不可能であると、余は思つてゐる。昨日も彼れは午前五時から午後三時まで炎天下を徒歩で、ブリゲイトや運送船を訪ね更に騎兵を率ゐて要塞をも巡視し、又馬に三時間も乗り歩いた。而も後で余に向つて曰く、「疲勞を癒すために」と。此等は、大規模の戦争や重要な目的を實現する機會が來ない時、彼れが單なる無謀に自分の燃ゆる心を捉はれないやうに、それを他に向けようと欲したことを示すものである。要するに彼れの思想は常に戦争の上にあつたものと考へられる。

けれども皇帝の活動性は、種々の方面に其の吐け口を見付け出した。即ち彼れは道路、葡萄園、新建築、乃至はポトフェラジの埠頭に建つべき隔離病舎等を設計した。彼れの考は、近海を航行する船舶が、イタリアのレグホルンに入るに先立ち、同港に入つて檢疫を受け、従つてエルバに金が落ちるだらうといふのであつた。然かしながら事實は彼れの豫想を裏切つて、隣國はすべて此の設備の承認を拒絶したばかりか、同島との交通をも禁止して了つた。彼れは此の様な態度を、嫉妬から出でたものと解釋した。然かしナポレオンはそれに反抗しない方がよいと思つて讓歩した。その後間もなく彼れは近海の小嶼ピアノザを併合したが、此の行動は列國の懸念を惹き起すものであつた。又彼れはエルバ島民に新税を課した。然かしこれは殆ど叛亂を激發しようとしたので、百人の近衛兵に對して、不逞な彼れの臣民(エルバ島民)が十分に納税する時まで、彼等の許に寄食すべく命じた位だつた。然かしながらこれと反對に、ペイルス男爵は、エルバは今や全く仁政時代を経験しつゝあり、而もナポレオンに面謁せしものは何人と雖も、彼れの

篤厚に魅了せられると公言してゐる。ナポレオンは聯合軍がファンテーヌプロ
1で彼れに給すべく規定した年金を、ルイ十八世が自分に支拂はないのを心から
怒つて居た。ルイの此の遣り方は甚だ大人氣ない行爲であると共に、又愚劣極ま
る手段であつた。如何となれば、それはナポレオンに對し、エルバの試練を切り上
ぐるに好辭柄を與へたからである。此のためにナポレオンは官公吏や軍人の俸
給を低減した。然かし斯くの如き手段を執らなければならなかつたことは、彼れ
としても非常に苦痛らしかつた。とは云へ、いつも彼れが酷く窮迫してゐたと想
像してはならない。と云ふのは、エルバの財政を管理したベイルッスは、ナポレオ
ンがエルバ脱出の際、同島に残留すべき少數の兵士のために若干の金額を控除し
た他、多額の金をフランスに持ち去つたことを、明かに斷言してゐるからである。
皇帝はタスカニーの沿岸を巡廻した人々から熱心にイタリアとフランスに於け
る輿論の趨勢を聴取した。九月十六日(千八百十四年)彼れはキャンベルに向ひ、ル
イ十八世がイギリスの憲法を模倣するのは間違つてゐる。フランスでは立憲政

治を實施するにも、それに適應すべき内容が存在しないと云つた。彼れは更に聯
合國がフランスから要求した領土的犠牲、殊にネーデルランドとルクセンブルグ
に關して口を極めて非難し、それはフランスの北方面を無防禦にしたものだと痛
論した。ニール・キャンベルの日記に従へば、彼れは次の如きことも云つてゐる。

ヨーロッパ大陸ではプロシヤ、オランダ、オーストリア、又はロシアの諸國、東
西兩インドではイギリスが馬鹿々々しく大きくなつたが、^註フランスは全部を
失つた。蕞爾たるサンタルシアさへも、フランスの手から離れた。(彼れ「ナポ
レオン」は何等將來の希望も無く、又現在にも利益關係のない一個の傍觀者と
して語つた。何故なれば、彼れはそのいづれをも有たず、且又彼れ自ら自分の
非存在を主張してゐたからである。)然かしながらそれは當時のフランス人
の資性や氣持について全く無智なのを示すもので、フランス國民の主要なる
感情は矜持と名譽の愛好であつた。而して斯くの如き損失の下に於ては、彼

等は假令それが聯合國全部の眞面目な希望なりと云はれても満足して平静な感情を持ち、將來に期待をかけることは出来ないものである。彼等は甚だ隔絶した優勢によつて壓倒されたのであつて、決してそのために面目を失つたものではない。フランスの人口は想像せられた程の損失は蒙つてゐない。何故なれば、彼れ(ナポレオン)は常にフランス人の生命を惜しんで、イタリア人其の他外國人を危険に曝したからである。(此等の説述は次第に彼れをして戦争に於ける自分の功績と最後の戦役に就いて語らせる様に導いて行つた)彼れは比較し得ない程の劣勢を以て強敵を撃破し、利益を獲得した多くの策動の細目に論及した。而して更に、彼れは元帥マルモンを罵つて、彼れ(ナポレオン)が戦争を放棄すべく餘儀なき状態に陥つたのは、全くマルモンの背信に因るものであると云つた。

註、ナポレオンが失脚後、フランスが聯合國のためにすべてを失つたといつたのは

誤である。なぜなれば、フランスはマウリチウス島を除いては、全部を回復したからである。

皇帝の性質の優和な方面は、彼れの情人であるポーランドの伯爵夫人ワレウスカに對して示された。この金髪の美人は千八百七年ワルソウで、いやいやながら彼れに身を委せて、一人の男兒を生んだ。然るに今やナポレオンが失脚し、マリアルイザは父(オーストリア皇帝)の命令と、伯爵ナイッベルグの誘惑に従つて、あつさり彼れを見棄たのにも拘らず、ワレウスカ夫人は、後年ナポレオン三世の下に大臣となつた一子ワレウスキーを伴つて、元氣よくエルバに彼れを訪ねたのであつた。この時世間ではマリアルイザが來るとの風説が立つた。ワレウスカ夫人の乗つた船の水夫達は儀式張つて彼の女を禮遇したが、ナポレオンは彼の女が此の身分不相應な尊敬を受ける不謹慎を、大變に怒つた。——と云ふのは、ナポレオンは其の頃でも尙マリアルイザを側近く引き付けて置かうと希望したからであつた。然

かし間も無く彼れは、ワレウスカ夫人の魅力に降参して了つた。ワレウスカ夫人のエルバに滞在したのは僅かに二日間であつたが、その評判が瞬く裡に、世間に擴がつて行つた。エルバに行くことには先前から氣が進まなかつたマリアルイザが、尙更それに嫌氣が差したのは當然のことであつた。斯うしてワレウスカは戀の勝利を獲た。乃ちナポレオンとマリアルイザの離間に成功した點に於て、彼の女は恐らくオーストリア皇帝フランシス一世と同等であつたと云ふことが出来る。唯ナポレオンの子ローマ王を、彼れから隔離したことに就いては、誰れも釋明し得るものはない。メール夫人と妹のポウリースは、エルバに来て彼れに傳侍することが出来た。ナポレオンは當然自分の禁錮を怒つてゐた。又マリアルイザに就いては、ナイッベルグ伯との醜關係が大評判となつた後ですら、彼れは尙温やかに斟酌して彼の女の噂をしてゐた。

千八百十四年から十五年へ掛けての冬期に入つて、ナポレオンは次第に焦燥の感に驅り立てられる様になつて來た。或る日彼れはキャンベルに、燃える様な言

葉で、自分の指揮の下にフランス人が成し遂げた功業について詳しく物語つた。彼れは此の如き成功を自分の演説、殊に其の力強い辯舌に歸してゐた。彼れは爪立ち、右手を伸ばし、そして云つた。「開け、鷲の旗を」「開け、鷲の旗を」と。マレンゴの大戦に、フランス軍が危地に陥り、陣容が崩壊した時、彼れは残つた四十人の騎兵を、「いざ行け、進め」と怒號して、再起させたと言つた。キャンベルは此のナポレオンとの會談に於て、始終彼れの態度の中に一種の荒々しい氣分を感じざるを得ざるものであつた。彼れ(ナポレオン)が彼れ自身の政治生活の終焉に關して何と云つた所で、其の行動が事實活氣に満ちてゐたのは明かであつた。彼れが將來に對して陽氣な希望を抱いてゐたことは、エルバに移されて快々として樂しまざる一人の近衛兵に對する應待にも見受けられた。千八百十五年の初めのことであつた。皇帝は快活に彼れ(兵卒)に向つて云つた。「おい、不平屋。お前は不平のために死んで了ふぞ。」「いゝえ陛下。それは眞平御免です。」皇帝は答へた。「お前は考違ひをしてゐる。何でもあしたの天氣に任せろ。」斯う云つて、皇帝は彼れにナポレオン

金貨(二十フラン)を與へ、ポケットの中で貨幣をチャラチャライはせながら、次の様に唄らしいものを呟いて行つて了つた。

^註 これはいつまでも續きはしない。

これはいつまでも續きはしない。

^註、マイルッスの備忘録によれば、ナポレオンに不穩の様子が見えるので、キャンベルはフロレンスを訪れた時、フランスの王黨員アルボン黨の一人ヒド・ド・ニューヴィユに向ひ、ナポレオンがエルバ島を脱出して、フランスやイタリアの不平黨と連絡を取る危険がある旨を警告した。キャンベル自身には、全く彼れの脱出を防止する手段がなかつた。後にキャンベルは此のために非難を雨と注がれた。然かしながら、假令彼れが嚴重にナポレオンを監視するものとしては餘り度々エルバを留守にしたとしても、彼れの蒙つた非難は、苛すぎるもので、其の警告の結果、フランスのフリゲート二隻が、エルバに派遣されたのであつた。

これによつて見ても、ナポレオンが自分の前途を悲觀してはゐなかつたことが窺はれる。

彼れの焦慮の兆候は、ウィнна會議で爭論が殆ど聯合國の間に戰爭を惹き起しかねまじきまで沸騰した千八百十四年の十二月から翌年一月の交、特に顯著なものとなつた。これと前後して、怪しい見馴れない人物がエルバに訪ねて來たが、其の人がナポレオンに面謁してから、皇帝の昂奮は更に高まつて行つた。皇帝暗殺の陰謀、或は彼れを捕縛して、セント・ヘレナに移さんとする企等の風説が、前後して聞えて來た。其の上前に述べた様な財政上の壓迫は、皇帝をして近衛兵の俸給を已むなく減額せしむるの窮境に陥らしめた。然かしナポレオンは未だ尙イタリア諸港に於て穀物や被服用の織物等を購入する手段は失はずに有つてゐた。

遂に彼れはエルバを脱出した。そして其の結果は、吾人の知つてゐる通りである。此の偉人の人格は、勤王主義——ブルボン王黨——のプロヴァンス州の、あらゆる反對を壓倒し、更に北方に續く諸州の全人民の心を征服した。三色旗は此方

の屋根より、彼方の尖塔へと次第に進んで行つた。そしてナポレオンは一弾も發射せずして、パリーのチュイルリー宮に入つたのである。

百日天下の出來事に就いては、吾人は爰に關與しない。然かし其の後彼れが云つた言葉を回想するは、興味深いものがある。それは彼れが「エルバ脱出後、議會と最初衝突した時、直ちにそれを解散すべきであつた」といつたことである。彼れは立憲政治を承認することの不可能なるを示す語氣を以て、屢々此の問題を口にしてゐる。その澤山な實例の中から二つを取つて見よう。彼れがグールゴに云つた、「議會は君主政治に取つて恐るべきものだ」といふのがそれであり、他の一つは、「余は議會を組織するではなかつた。余は余自身を獨裁主權者たるべく聲明すべきであつた。然かし余が議會を召集するのを見れば、聯合國が余を信任するだらうといふ希望があつたからだ。若し余が戰敗者でなかつたならば、余は議會を笑殺して了つたであらう」と云ふのがそれであつた。

註、ナポレオンの自由黨議員に對する憤激は、頗る強かつた。彼れは彼等の反對を罵つて、リニー戰役の翌朝、貴重な時間を徒費した。これこそウァートルローの勝敗の一大分岐點となつた。グールゴのロシア軍追撃が遅れた原因であつた。

ラインの國境とベルギーはフランスの國防上大切な地方であるが、これに關するナポレオンの言葉は、彼れがウァートルロー戰後進退谷まつた場合ですらも、尙フランスのために此等の諸州を、極力維持する決心を持つてゐたことを示してゐる。斯くの如き見解を持つてゐたので、彼れは千八百十五年春、フランス國民と約束した平和的政策を採り得なかつたのである。千八百十四年三月ヨロップバの列強は、平和の保證として、フランスを革命以前の領域内に押込めようとするシ・イモン條約を締結した。然るにナポレオンはエルバ脱出後と雖も、徹頭徹尾大フランスを主張し續けた。實に彼れの天性は、ブルボン王族が承認した小フランスの國境を拒否すべく、彼れに命じたのであつた。ブルボン家の人々には、削除さ

れた國土を、何の不满もなく統治することが出来た。然かしそれは彼れに取つては堪へ得られない所であつた。さう云ふ次第で、列強相手の戦争は千八百十五年には、どうしても避け得られないものとなつたのである。

註、ナポレオンは平和が続いたならば、千八百十五年十月一日までに、十萬の佛軍を整備することを期待してゐた。(ナポレオン書翰集) 尙彼れのセント・ヘレナ流竄中絶えず彼れを惱ましたものは、彼れがウォートローの戦役後、餘り氣早に敗北を承認したことであつた。ナポレオンは何人も彼れの將來を絶望視した第二回目の讓位(千八百十五年六月二十二日)後と雖も、ロアール河南の兵を率ゐて、愛兒ナポレオン二世のために戦ふことが出来たと聲言してゐる。彼れは次の様な注意すべきことを云つた。曰く「恐らく歴史は、朕が餘り飽氣なく舞臺を去つたのを咎めるであらう」と。

ナポレオンの禪位、ロッシュ・フォールへの退去、同港沖の英艦ベレロフ・ソンの艦長メイトランドに對する降伏等は、急速に連續して來た。彼れは、アメリカ合衆國

へ赴くことを希望してゐたが、それは許されなかつた。と云ふのは、同年(千八百十五年)の三月に、ウインナの列國會議は滿場一致を以て、彼れを公權被剝奪者と公告し、且列國は、彼れが容易くヨーロッパに歸來し得る國に向つて出發するのを、許す氣になれなかつたからであつた。エルバで彼れを監視することは、困難ながらも不可能ではなかつた。然かしアメリカ合衆國に於ける彼れの活動を抑制することは、不斷の紛擾を恐らくは戦争を惹き起す虞があつた。彼れが若しアメリカに赴いたならば、どんなことが起つたらうかといふ憂懼を想像して見るに、其の榮耀たる天才は、一週間もかゝらずに合衆國民全體を惹き付けて了ひ、そして恐らく合衆國政府に、カナダ征服の遠征を奨め、彼れ自身其の陣頭に立つことをすら辭せない様な事情が生じたであらう。何故なれば、去る一月(千八百十五年)エルバでヴィアン少佐がナポレオンと面會した時、彼れは、カナダは程なく合衆國の手に歸すべしと豫言した程であり、且彼れは從來自身の云つた豫言を實現せんとする傾向を有してゐたからである。空想は更にワシントンに於て大統領に就任する彼

れを描出する。そして彼れが其の位置に立つたならば、疑も無く合衆國憲法に、必要程度の流動性を賦與したことと思はれる。

ロッシュ・フォールに於て、彼れには尙他に選ぶべき一つの手段があつた。それは彼れが田舎紳士として、イギリスに身を落ち付けることであつた。これは讀者の記憶してゐる通り、彼れが當時イギリスの攝政であつた皇子ジョージに送つた、有名なるテミストクレスを引用した書翰の中に、暗示されてゐる。然るにイギリスはこれを拒絶した。而して此の拒絶は、それ以來現在まで世人の激烈な非難を蒙つてゐるものである。

譯者註、イギリス王ジョージ三世は、千八百七年に發狂したので、其の子ジョージ、即ち後のジョージ四世が千八百十一年に攝政となつた。千八百十五年七月ナポレオンが敗れてロッシュ・フォールに走り、善後策を群臣と討究の結果、イギリス渡航に決するや、同十四日彼れは攝政ジョージに次の如き親書を送つた。

「攝政殿下、朕は内は國內黨派の難に會し、外はヨーロッパ諸國の怨恨を受け、身を安

んずるの地なければ、今や斷然政治的事業を放棄し、テミストクレスの如く、往きてイギリス國民の優情に身を委せんとす。朕は我が敵手中、最も強大堅忍にして、寛仁に富めるものをイギリスなりと思惟す。故に今殿下に請ふに、貴國法律の保護を受けんことを以つてす。」云々。

若し吾人が道義的情操の立脚地から見る時は、ナポレオンをセント・ヘレナ流謫に決定したことに就いて、容赦なき非難を、時のイギリス當局リヴァプール内閣に注がなければならぬ。然かし便宜を主とする功利主義の見地よりする時は、又幾分異なる考察を加ふべきである。吾人は茲に大體此の二種の觀念を人格化し、簡單なる對話文の中に對照せしめて見よう。

道義的情操 當代隨一の偉人ナポレオンは、賓客たらんとしてイギリスに來た。然るに君功利主義は彼れを俘虜として取扱つた。

功利主義 然かし君、彼れはロッシュ・フィールドでペレロファンに乗込んだ時、イギリスが彼れを公權被剝奪者としたウイenna會議の宣言に同意してゐることを十分に承知してゐた筈だ。

道義 然かしナポレオンはフランス國民の心を握つてゐたばかりでなく、全世界亦彼れに同情してゐた。君の名譽のためにも、彼れに寛宏な待遇を與へなければならなかつたらう。

功利 いや、一年前に聯合國はエルバで其の計畫を試みたのだ。そしてそれは失敗した。

道義 それはさうだ。然かしそれは列國が彼れに支拂ふ約束をした俸給を渡さなかつたからだ。

功利 それに違ひない。然かしそれはルイ十八世とフランスの新内閣の怠慢からであつて、其の他のものゝ關知した所ではない。

道義 よし、それなら、なぜ君は彼れを賓客として寛大に待遇することが出来

なかつたのか。

功利 彼れは賓客ではない。彼れは事實に於て一個の捕虜だ。彼れがロッシュ・フィールドに來た時には、進退谷まつてゐたのだ。其の境遇は自他共に知つてゐる。

道義 いや、然かし、種々の事情から判斷するのに、彼れは其の時絶體絶命ではなかつた。彼れは三櫓船に乗つて逃走することも出来たし、又碇泊中の二隻のボルヴラット艦に依つても、其の赴かうとする道を、戰を以て決することが出来たのだ。

功利 いや、それは違ふ。ナポレオンと隨員は、熱心に海上に脱出する機會を研究したが、非常に危険の多いことが判つた。そこで彼れは陸上でフランスの勤王黨——ブルボン黨——に降るか、或はイギリスの軍艦に降るか、二者の中其の一を擇ばざるを得なかつたのだ。そして彼れは遂に後者を擇んだのだ。

道義 彼れが君の許に走つた時、君は男らしく振舞はなければならなかつた。彼れの生涯は既に終つて、唯イギリスに来て田舎紳士として身を落ち付け、ることばかりを希望して、他意なかつたのだ。

功利 いや、さうでない。彼れは未だ四十六歳の男盛りであつた。そしてウ・イトルローの敗戦から六月末までの行動は、最後まで戦はうとした希望を明示してゐる。

道義 君はあんな卑劣な手段で彼れを捕へたために、君の名譽を汚して了つた。

功利 俺達は彼れを捉まへはしない。彼れがロッシュ・フィールドでベレロフ・ンに投降したのは、自發的の意志からで、而もそれには決して何ら將來を拘束する條件はついてゐなかつた。

道義 兎に角彼れに取つては、彼れをセント・ヘレナに幽閉した君の冷酷な決裁に従ふよりも、尙一戦を賭した方が良かつた。斯の様な場合には、大度こ

そ最も深い分別なのだ。

功利 君は敵に對して寛大である前に、同胞に忠實でなければならぬ。殆ど十億ポンドの戦費を使ひ盡した戦争の後では、俺達はどんな犠牲を拂つても、戦争の再發を避けなければなるまい。

道義 然かしながら、あんな絶世の偉人を、あの忌はしい孤島に監禁するのは、云ひ様なき慘酷なことだ。

功利 彼れの偉大と不斷の活動こそ、危険の源泉であつたのだ。俺達は彼れがセント・ヘレナで、他所よりも一層非人間的拘制によつて、監禁されること、が出来ゝるのを希望してゐた。

斯くの如き討論はそれを続けようと思つたならば、殆ど一年に四冊の本を作り得る程度で、永久に續くだらう。

場所は何處とするも、ナポレオンが其處に落着いてゐられるものと考へるのは

事實困難である。政治的生涯からの絶對的離断に満足するには、彼れの性質は餘りに大き過ぎ、其の活動力は餘りに旺盛であつた。さればセント・ヘレナの境涯は、忽ち彼れの無聊に苦しむ所となつた。彼れの妻と子はウインナに止つて來ず、彼れに隨つて謫所まで赴いたものは、幾人でもなかつた。而もそれら隨員の中で知識的天分を有したものは、唯ラ・カーズ一人に過ぎなかつた。ナポレオンに對して、最も惡かつたのは、彼れの到着後六ヶ月を経て同島知事に赴任した、サー・ハドソン・ローであつた。彼れは困難な局面を調停緩和する手腕を持たない、狹量で而も勿體振る人物であつた。けれども彼れ自身としては非常に深切な男であつて、其の事實を十分に證明する確かな證據が存在してゐる。然かし明かに彼れ(ロー)は、自分の任務に附隨する責任の重さに壓迫され、而して彼れはその責任感を、彼れが確かりナポレオンを監視するかどうかを見るために派遣された、フランス、ロシア、オーストリア等の代表者が居るために、軽くすることが出來なかつたのである。ナポレオンは列國共同の捕虜である。單りイギリスのみの捕虜ではない。そして

列國委員のセント・ヘレナ駐在は、此の事實を證明してゐる。これがハドソン・ローの考であつた。

ハドソン・ローの顔貌の表情は、伶俐さうであり、又深切さうであつた。然かし其の容貌にはゆとりがなく、引き締つた口唇は、頑固な意志と、性急な氣質を示してゐた。眼付きは鋭く、落着きが無かつた。實際ローの容貌は、ローマのカシウスの様であつた。其の上に惡かつたのは、彼れは嘗てコルシカで、ブルボン黨の軍隊を指揮したことがあつたことで、これが實にナポレオンの感情を害する原因となつた。それ故ナポレオンは、彼れに初めて會見する時、既に面白くない感情を懐いてゐた。ナポレオンは其の後で、海軍大將マルコム(イギリス海軍のセント・ヘレナ警備司令官)に云つた。『彼れ(ロー)はイギリス人の性質を持ち合せてゐない。プロシアの軍人の様だ。彼れは利口であるが又狡猾だ。彼れは能く文を書くから、定めし政府に良い報告をするだらう。彼れの態度は余に取つては、假令彼れが來て、フリゲートが一隻余をフランスに伴れ歸るやう用意され、そして余は何處へでも自由に行

けるものだ」と告げても、余を喜ばすことが出来ない程、癢に觸るものである」と。マルコムはこれに對して、大いにローを辯護し、且ローはロングウッドの一家、ナポレオンの家族に對して、慇懃であることを、或る例を擧げて立證した。然かしナポレオンは、『彼れは余を喜ばすことは出来得ない。卿は彼れを小供の様だと云ふ。何とでも云ひ給へ。それは君の隨意だ。然かし余は彼れを大將とは見ない。實際彼れは今迄、コルシカの脱走者より他は指揮したことがない。』と云つて承知しなかつた。

斯の様な個性上の反撥は、さらでだに紛糾し勝ちな局面を益々混亂せしめた。一體イギリス政府は、政略上よりも寧ろ論理的の立場から、ナポレオンに皇帝の稱號を與ふることを拒んだ。然かり、イギリス政府は其の稱號を彼れに與ふることを拒絶したのだ。然かし乍らナポレオン失脚後、寛仁は斯かる末節に拘泥する如きことの排除せらるべきを要求してゐた。されど此れはリヴァプール内閣が決定したものでなく、當時の陸軍大臣兼殖民大臣バザースト伯爵の訓令が、此の偉大

な流人にそれを拒絶すべく、ローをして餘儀なくせしめたのであつた。けれども若しローより常識に富み、一層分別ある人物であつたなら、恐らくバザーストの命令を暗黙の裡に握り潰して了つたであらうし、且又ローの様に單に宛名が皇帝とあつたばかりに、書籍をナポレオンに送達しなかつたり、駐屯中の第二十聯隊の將校等に、ナポレオンが皇帝と署名した本をくれようとしたのに、受領を思ひ止まらせたりすることは、恐らくなかつたであらう。此の様な行爲は、取りも直さず形式に拘泥したり、又は偏狹な行爲を敢へてする性質を示すものである。さり乍ら斯くの如き重大な責任を負ふ位置にある時には、人の神経は過敏になる傾向があることも、考に入れなければならぬ。マルコムは後にナポレオンに、ローの性質は狡猾性を含むには餘りに過敏であると説明した。然かし概してローは此の偉大な流人との數回の困難な會見に際して、克く彼れの過敏性を抑制したのであつた。ナポレオンとサー・ハドソン・ローとの間に烈しい争が起つたのは、ベルトラン夫人の行動が原因であつた。彼の女は、フランスの駐島委員侯爵モンシニョーに

封書を送つた。これはローがベルトラン將軍に注意した通り、違法の行爲であつた。然かしベルトランは却つて此のローの注意を怒り、亂暴な返答をしたので、遂に表向きに譴責を蒙ることとなつた。けれども一方ローがベルトランの言葉や行爲に對する不平をナポレオンに訴へようとして、マルコム提督と一緒に、皇帝を訪問したのは、ローの氣轉がきかないことを語る著しい例である。ローはナポレオンに不平を訴へるのに、頗る慎重に且丁寧な言葉を使つたけれども、話の内容が内容なので、忽ちナポレオンの憤怒に點火して了つた。ナポレオンはローに對ひ、大將ベルトランを伍長の如く取扱つたことや、ローが知事の職務を番兵の如く心得てゐること、或は彼れが、ナポレオンの一行をさながらボタニー灣の懲役人であるかの如く、抑制や懊惱を以て苦しめることなどを舉げて、大いに詰責した。概してナポレオンと好かつたマルコム提督はこれを仲裁した。然かしナポレオンの怒の巨濤は、能く自分の憤激を抑へてゐたローを吞ますんば止まなかつた。穩かな抗議を提示しようとして來訪したハドソン・ローは、今や全く反對に被懲罰人と

變つて了つた。終ひにローもナポレオンに向つて、ナポレオンが彼れ(ロー)の性格を甚しく誤解し、皇帝が彼れに對し粗暴な舉動を示すことを、頗る遺憾に思ふと告げ、暇乞をして、マルコム提督と共に退出したのであつた。これが事の概略である。若しハドソン・ローが常規の判別力を有つてゐる人物であつたならば、ベルトランを抑へることをナポレオンに依頼するのに、自身出掛けて行くことの愚劣なるを見通したであらう。そして此の時手紙で同様の意味を通達したならば、斯程までに互に氣を悪くせず、に済んだに違ひない。況や皇帝がローを個人的に憎んでゐたのに於てをやである。斯くの如きは當時セント・ヘレナに度々起つた喧嘩の一例である。それらはいつても些細な原因から起り、感情と退屈とのために、意想外に激烈なものに變るのであつた。然かしグールゴーも認めてゐた様に、ローは皇帝達の可憐さうな境遇を察して、其の不愉快を除かうと努力はした。即ち彼れはラ・カイズ伯に向つては胸襟を開いた招宴を催し、彼れの圖書室はロンダウィッドの人々の自由に委せた位であつた。然るにナポレオン彼れ自身が、此の種の交渉を

止める様に干渉をした。ナポレオンはローに對して抱く憎悪と策略から、自分の隨員達を彼れとの交渉より出來得る限り隔離し、自分の周囲の人々から成立つ一社會の内に足を止める様努めたのであつた。そして又グルゴ、ベルトラン以下の隨員達も皇帝の信任に従つたのである。ナポレオンが斯の様に、流人の身でありながら、尚バリーのチュイルリー宮に居た時と同様、絶對的に隨員等を信服させたのは、彼れの魅力を證明する好い證據である。

或る時、ナポレオンは焦思の餘り、其の慎重な行藏を破つたことがあつた。千八百十六年一月の初めであつた。彼れはグルゴと馬に乗つて出掛けたが、彼れは警護に付いて來たイギリスのポップレトン大尉が、餘り接近してゐるのを見咎め、彼れにもつと遠く離れる様に命すべく、グルゴに云ひ付けた。そしてポップレトンが彼れらの視界外に出づるや、彼れは叫んだ、『グルゴ、駈足。』二人は無闇に馬を駛らせて、ポップレトンをまいて了つた。二人はブリッチャード氏の住宅まで來て馬を降り、其處で、海にまで伸びてゐる二つの谷を眺められる景色

を賞した。ナポレオンはグルゴに、園丁と奴隸とに銘々一ナポレオン(二十ラン)を興へる様に云ひ付けた。そして二人は、夕方になつてロングウッドに歸つて來た。皇帝は此の遠乗で大變愉快な思ひをしたので、又出かけようと云つた。蓋しこれは全くマルコム提督が言つた通り、氣紛れであるが、彼れの元氣が未だ衰へないのを示す一證據である。けれども此の様なナポレオンの行動は、イギリス官憲の警戒心を喚び起し、監視は以後一層嚴重になるのを免れなかつた。

^註千八百十六年の夏イギリス政府は、アメリカのバルチモアに於て、フィルニエと云ふフランスの一將校の懇望により、ナポレオンをセント・ヘレナから救ひ出さうとする遠征の準備が運ばれてゐるといふ風説を耳にした。其の年の十月以降、ハドソンローがロングウッド附近の哨戒に關する規則を、一層嚴重にしたのは、多分其の結果であつたらう。此の哨戒方法の變化は、ナポレオンの懊惱を益々深からしめ、それ以後彼れはロングウッド以外には、殆ど足を踏み出さないやうになつた。即ちそれからといふものは、彼れの配流生活は一層みじめなものになつ

て行つたのであつた。然かし彼れがグールゴに云つた様に、殆ど戶外へ出なかつた爲に、彼れは皇帝の尊嚴を保持することが出来た。彼れは其の時、自分は恐らく一年を出でずして死ぬであらうとも云つた。翌千八百十七年に入つて、イギリス政府は又も二つのナポレオン救出の遠征準備が行はれてゐるといふ諜報を受け取つた。其の一つは七月フィラデルフィアで、一千人から成る遠征隊が組織せられてゐるといふのであり、他の一つは十一月、小型快速の帆船、或は汽船によつて行ふといふのであつた。然かしながら此等の企ての齎した所のは、その報告がイギリス政府とハドソン・ローとを、一層疑念深くするといふ以外には、何物も無かつたのである。

註　グールゴの日記によれば、ブラジルのメルナンブコから汽船を出して、ナポレオンを救ひ出す計畫があつた。

ナポレオンの配所に於ける生活は、其の慘憺たること言語に絶してゐた。政略、行政、戦争、これらは彼れに取つて必需品であつた。國王を擁立し國王を廢黜した彼れは、今や僅に一家族の家政を處理する惨めさであつた。未だ嘗て其の全能力を發揮せしむべき十分なる材料を見出し得なかつた彼れの強大なる頭腦は、今は極めて平凡な四人のフランス人の嫉妬を吟味するに用ひられた。これら凡庸な人々は、餘り甚どい煩悶もなく生活することが出来た。蓋し斯ういふ人達は、晩年を賑やかす嗜好とか道樂とか稱するものを持つてゐる。美術、音楽、文學、乃至一段下つて運動、骨董蒐集、農作、園藝、動物飼養等がそれであつて、此等は陰氣勝ちな晩年に、快明な前途の楽しみを打開するものである。而して此の前途の楽しみを見る人は幸福である。故にさういふ人には靜謐は煩悶であり、退隱は單に退屈に過ぎない。扱てナポレオンに取つては、荒蕪の平野を戦ひ渡ることが、最大な喜びであつた。彼れはジ・ミニに向つて、自分が戦争の刺戟を愛好することを告白してゐる。ナポレオンの様な、百戦を経験したものが、沈滞した靜寂の中に身を落ち付け

得ることは極めて稀れである。彼れの精神は、フランス及びヨーロッパの上に、休みなく駆け廻つた。彼れは美術や音楽、乃至土臭い細末な仕事には、餘り興味を有たなかつたから、セント・ヘレナに於ても、グールゴを相手にウ・ートルローの戦役を論じたり、モンτροンに在りし昔の事どもを口授して筆記させたり、戦術や又は一般の問題を研究したりするのが、一日の時間の大部分を占めたのであつた。然かしこれらの題目は往々苦しい思ひ出を喚び起さざるを得なかつた。それからフランスの古典を讀むことも、彼れの、主要な慰安となつた。吾人の既に研究した通り、彼れは筆致の力強い簡明なものを喜んだ。ヴ・ルテイルの悲劇「ザイル」は、少壯時代と同様晩年になつても、愛讀する所であつた。彼れは千七百九十一年即ち二十三の時著した、『リヨンの話』の中に、このことを夢中になつて書いてゐるが、又こゝセント・ヘレナのロングウッドに於ても屢、讀み聲を杜絶しなければならぬ程、大聲を出してそれを朗讀した。而も深更に至るも卷を閉ぢずに嗚鳴つた。『モンτροン夫人、お身は先へ寝ろ。』遂にモンτροン夫人とグールゴは、皇帝

の熱狂的好尚を阻止する唯一の手段として、此の書物を隠す工夫を講じない譯には行かない程になつた。

ナポレオンは彼れの決心に於けると同様に、其の趣味に於ても、目指す所を固定する性質が目立つて著しかつた。其の頃ではもう彼れは、ルーソーのセンチメンタリズムと、其の平等主義を快く思はないやうになつてゐたので、セント・ヘレナに在つては、『新エロイズ』以外ルーソーの著作は、少しも顧みることをしなかつた。其の行文と措辭とは彼れの太いに喜ぶ所であつたが、其處に記述されてゐる愛の力の過超に對しては、彼れ自身がジ・セフィンに注いだ、あの最初の狂熱的な情愛を全く忘却したかの如く、極力それを攻撃した。ナポレオンは云つた、『愛は快樂であるべきで、苦惱であつてはならない。』ラ・カイズの云ふ所に従へば、皇帝は最後に斯う明言した。『戀愛は^註怠け男の仕事であつて、武士に取つては單に一時の氣晴らし以上のものであつてはならぬ。而して君主に對しては最も恐るべき危害である』と。

註、これはラ・カイズの回想録の第二卷二十四頁にある。然かしそれは同じく隨員としてセント・ヘレナに赴いたグールゴーが書いた日記の第二卷六十六頁に簡単に載せられたものとは違つてゐる。此の兩者の記事は、グールゴーの無能と、ラ・カイズが文學的論題を巧妙に取扱ひ、美しく飾り立てる其の堪能とを對比するものとして面白い。

此の結論は前掲の註によつても知られる通りラ・カイズの捏造に係るものかと考へられる。と云ふのは、ナポレオンが餘り用ひなかつた技巧を用ひて、記述せられてゐるからである。然かしながら此の言葉や其の他にこれに似寄つた表現は、吾人にナポレオンの文學に對する見方が如何なるものであつたかを示してくれる。力弱い直截ならざる筆致は、てんで彼れの感心しない所であつた。そして彼れは純正な文學上の論題から分岐して、脚色の筋に含まれた人間の情緒や私慾に論及して行くのを喜んだ。『ナポレオンは悲劇を研究するに、刑事裁判に對する氣持でこれをなす』といふ、ゲーテの手酷い批評の裡にも、確かに一部の眞理が存在する。

然かしゲーテもナポレオンの文藝批評が犀利で獨創的なことは認めてゐた。而も吾人は彼れの文藝批評について、ゲーテが認めたより以上のものを期待し得られる。此の流人のフランス劇の傑作に對する觀察は、絶大の興味を掻き起すものであるが、不幸にしてそれは、僅かに斷片的のものしか残つてゐない。而もその大部分は、往々ナポレオンの書いたものをフランス人の最も好尚する様式に書き換へることを敢へて辭さなかつた所のラ・カイズの筆に成つてゐるものである。例へば『ザイル』(ゾールテイル)作はナポレオンの愛好した戯曲であるのは、隠れもない事實であるにも拘らず、ラ・カイズは一度もそのことを述べてゐない。のみならず彼れは、ナポレオンはコルネイユやラシーヌの如き高級の作家のものを非常に喜んだと述べてゐる。ラ・カイズは又ナポレオンがゾールテイルの作物を以て、大言壯語に充ち、表面のみは絢爛たるも、内容空虚にして、誤謬多く、又人間及び事物に暗く、眞理と情操の高潔を識らざるものとして侮蔑してゐたと、事細かに縷述してゐる。此のラ・カイズの言葉と、フランス戯曲の『オセロ』である『ザイル』をナポレオ

ンが好んだ事實とを合致させることは到底不可能である。又ラ・カーズは、ナポレオンがヴォルテイルの著作『マホメット』と『ブルータス』に對してなした批評に就いて感想を述べ、更に彼れ(ラ・カーズ)がコルネイユの作である『エヂイブ』の有名な場面をフランス戯曲の最も優れたものと斷言した時、ロングウードの家人が驚喜したと書いてゐる。話は元に戻るが、ナポレオンはギリシアの戯曲の中では、エスキラスの『アガムノン』を最も好み、それに次いでソフォクレスの『エヂイブス・レックス』を好んだ。此の選擇はナポレオンが偉大なものと恐ろしいものとを好んだことを證明してゐる。

セント・ヘレナでナポレオンが書いたものの範圍と種類は偉いものであつた。而して此の事實は取りも直さず千八百十五年には既に彼れの精神が萎靡してゐたといふ主張を、完膚なく論破するものである。然かり、彼れの政治上の判別力と權謀は衰へたに違ひない。然かし精神的能力に於ては、決してさることなかつた。余はこゝに彼れがセント・ヘレナで書いた文書の中、二三をしか紹介すること

が出来ないが、その中最も面白いのは、ヴェルギリウスの史詩『アイニード』の第二卷に對する彼れの批評である。ナポレオンはその様式は華麗であるけれども、内容の事實は大變に違つてゐることを述べ、そして其の中に含まれた事實を、事實の上より批評した。即ち其の中に書いてある、木造の馬の話は、ナポレオンの強く反對する所であつた。トロイの塔からギリシア軍艦の碇泊場が眺望し得られるにも拘らず、何が故にトロイ人は、ギリシア軍が本當に拔錯し去つたかどうかを見るために、軍艦を遣はしたか。又ギリシア側のユリシーズの如き聰明なる人が、何が故に他の大將達と共に木造の馬の腹部に隠れて、彼等自身を完全に敵トロイ人の手中に置くの危険を、敢へて爲さざるを得ざりしか。而も其の木馬は僅かに百人の兵士を收容し得るに過ぎず、而も木馬の重量は、一日の中に海岸から引上げて、二つの川を越え、更に城壁の間を通過するには、其の成功を阻害するまでに大なるもので、戰術的に見て甚だ不適當であつた。これがナポレオンのヴェルギリウスの『アイニード』に對する批評であつた。(ナポレオンは更に續けて評した)、『シノン

の挿話は假令巧妙に出来てゐても不合理であつて、ラオコンの見事な場面によつても救はれないものである。更にギリシアの兵が隠れてゐた木馬は、午前一時までは開扉することが出来なかつたにも拘らず、トロイの陥落は日出前だつた。即ちトロイは三時間乃至四時間の中に陥落したことゝなる。實に此の話は沙汰の限りであつて、トロイの城は二週間以内には到底奪取することは不可能なものであつた。』云々。ナポレオンの批評は徹頭徹尾、神話の上に基礎を置く史詩に、近世の戦術と幾何學的理論とを應用したものであつて、讀物としては極めて興味深いものである。然かのみならずこれは偶然にも、余がナポレオンの頭腦の硬化と云つた所のものを證明する添加的證據を提供する。少壯時代の彼れは感情に走り想像を逞しうしたが、優勢時代に入つて繁雜な世事に深く没頭したので、此等の性質は發達を妨げられて了つた。そのため後年彼れが稗史小説を讀む折も、一番其の感興を唆つたものは、主人公の出費(金錢の費ひ方)と、其の主人公が年何程の經費でどうして暮したかといふ點であつた。ナポレオンは、作者が金錢問題につい

て無頓着である點を摘發し得ると、非常に喜んだものであつた。

譯者註、ギリシアが小アジアの海岸にあるトロイ市を攻めた時、ギリシア人は腹部に兵を潜ませた木造の馬をトロイの城門の前に置き、これを神に捧げる式を行つた。これを見たトロイ人は其の腹部に敵兵の隠れてゐるのを覺らないで、それを城内に引込んだため、夜半木馬中のギリシア兵が竊に立出で、城門を開き身方の兵を導き入れ、トロイを陥れた。

尙ナポレオンの心の『青銅化』——彼れ獨特の穿つた言葉を借りて云へば——を證明するもう一つの證據は、彼れが千八百二十年八月に書いた、自殺に關する一小論文の中に現はれてゐる。讀者は千七百八十七年に彼れが書いた同題目に對するセンチメンタルな發想を記憶してゐるであらう。(第一講參照) 其れに於て彼れは鬱々たる憂悶を以て、彼れ自身を自殺の考にまで導いてゐる。貧窮にして孤獨而して衷心フランスに嫌焉たる而も故國のコルシカ人を、フランスに降服した

る故を以て蔑視してゐた。ナポレオンは、自殺の觀念を弄んでゐた。而して彼れはやがて此の見解から克く離れ去つたけれども、何が原因となつて其の觀念から脱却したのか、吾人は其の理由を知らない。然かし兎に角三十年を経過した今日、彼れは此の論題を次の文章に見る様に、冷靜且批評的に検討してゐる。『……人は自分自身を殺す權能を有つてゐるだらうか。然かり、若し彼れの死が他人を害せず、而して彼れの生命が彼れ自身に取つて害悪であつたならば、然からば生命は如何なる時に人に對して害悪となるか。それは生命が人間に災難と苦痛を與ふる時に於てのみである。然かしながら災難と苦痛とは瞬間毎に變化するものであるが故に、生涯人間が自身を殺す權利を持つ時はない。但し人が自分を殺す時が唯一度ある。それは死ぬ時である。といふのは其の時は、實に彼れの生涯が全く害悪と苦難の連続であつたことが確證されるだらうからである。……』と。此の論文は九ヶ月後に彼れの生命を奪ひ去つた癌腫の兆候が、現はれるに先立つて書かれたものらしい。然かも刺す様な苦痛が不斷に殺到して來ても、偉大な患者

は決して終末を急ぐ様なことはしなかつた。以前ナポレオンはグールゴに、自殺は卑怯者の所爲であると云つたことがある。而して如何なる苦痛を味ふとも、天壽の終るまで生き盡さんとした、其の毅然たる勇氣と決心とを以て、彼れは其の百戰を経験せる勇敢に裏書きしたのであつた。

ナポレオンの鋭い智力が、同情ある豫想を以て働いた問題は、イタリアの將來であつた。イタリア民族の更新した精力に關する彼れの經驗と、殆んど何時も彼れを指導した正確な地理學上の直覺は、次の注目すべきステーツメントの發表となつた。『ヨーロッパの他の地方から海や高い山によつて分離され、其の自然的領域の中に孤立するイタリアは、將來強大な國民を構成すべく天から使命付けられた様に考へられる』と。(當時イタリアは數國に分れてゐた)それから彼れはイタリアの弱い原因と、同國の首都たる諸條件を具備する一地點を選択することの困難とを指摘した後、次の言葉を以て斷つぱり彼れの論を締め括つた。曰く『斯くして、假令ローマは首府として好ましい總べての特點は具へてゐないにせよ、他日確か

にイタリア人が選擇すべき首都の地である」と。これは彼れの一生を通じて最も目立つた豫言である。

ナポレオンがセント・ヘレナで送つた月日は決して有形的には貧しいものではなかつた。島知事ハドソン・ローの提議に依つて、イギリス政府がナポレオンに支給した手當は、最初提示された年額八千ポンドでなく壹萬ポンドであつた。そして其の額は贅澤に流れさへしなければ、ロングウッドの一家族を愉快に生活させるのに十分なものであつた。ナポレオンは決して食道樂でなかつたからではあるが、詳細な又十分に信憑し得べきグールゴの文書の中にも、食物や酒類に對する彼れの不満足の言葉は一言も記してない。更に近年に到つて公にされた、ロ
ーから賄係のイッベストンに送つた書翰は、此の二人がロングウッドの家族のために、良好な獻立を用意すべく、非常に苦心したことを示してゐる。ラカーズやオメーラ、或はモントロロンが、ヨーロッパに於て、ナポレオンに對する同情を煽り立てる目的で書いた製作物には、實際の困苦より誇大なことが述べられてゐる。然

かしそれらの陳述は虚偽で、ナポレオンを始めロングウッドの人々の感じた不快は、精神的部類に屬するものであつた。

註、千九百十二年四月発行の『センチュリー・マガジン』に此の事が、エイ・エム・ブロー
ドレイ氏の論文によつて記載せられてゐる。セント・ヘレナでナポレオンに加へられ
た制裁は、彼れが千八百十一年から同十三年に互つて、ローマ法王に加へたものよりも
恐らく輕かつたであらう。

世界は今尙多大の興味を以て、セント・ヘレナに於ける流人に就いて詳細に知らうとしてゐる。何故なれば偉大が狹隘な範圍内に縮少されることは、悲壯な觀物であるからである。そして其の悲劇は屢々、殆んど喜劇とも稱せらるべき幕間狂言を交へた。殊にベルトラン夫人とモントロロン夫人とが喧嘩をしたり、グールゴ
ーとラカーズが唾み合つた時などが、即ちその最たるものであつた。以前は殆んど記述することが出来なかつた程、廣大無邊であつたナポレオンの行藏は、今や頗

る人間的となつた。恐らく隨員達の喧嘩も彼れを慰めたであらう。確かに此の喧嘩口論は無聊に苦しむ人々の氣にまんざら適あははなくてはならない所であつて、ロングウッドの生活の單調を破つたものであつた。活劇はどうしても避けられなかつた。大朝廷を純然たる闘鶏場と變ずる偉らい嫉妬も、こゝでは僅か一室か二室の中に閉ぢ込められ、そして或は哄笑の糧を作り、又或は涙の資料となるのであつた。

勿論ベルトランとモントロンの兩夫人が、試合の口開きであつた。ベルトラン元帥夫人はフランス大革命で死んだディロンと云ふアイルランド系の軍人の娘であつた。そして又幾分クレオール——西インドに住むヨーロッパ人——の系統をも引いてゐた。其の人を引き付ける點と快樂を好む性質は、パリーにあつても彼の女を道樂連中の中心とした。そのためか夫ベルトラン將軍が愈々ナポレオンに従つてセント・ヘレナに赴かうとした際の如き、彼の女は將軍の同行することを極力阻止したものであつた。そして其の目的を果すべく、船が未だイギリス

のプリマス海峡にゐた時、海中に投身する芝居を打つたのであつた。であるからセント・ヘレナへの航海中も、彼の女は深い憂鬱と強い不平に、烈しく身悶えをしてゐた。然かし彼の女が如何に騒ぐとも、ナポレオンは少しも氣に懸けなかつた。彼れは斯の様なことは、彼の女としては敢へて憚おこべきことでないと考へ、夫ベルトランにそれを抑へ付ける様に命じたが、ベルトランは彼れの満足するやうな、斷然たる處置を取らうとしなかつた。ベルトランは憂鬱らしい容姿の男であつたが、妻に取つては良き夫であり、子には深切な父であつて、彼れの妻の御機嫌を取る様な傾があつた。彼れは、セント・ヘレナで彼れの妻が買物道樂のために、ちよくちよくジュームスタウンに出掛けるのを辯護し、時には二人揃つて皇帝の陪食に缺席することすらあつても、彼れはそれを何かと取繕つたものであつた。このことは非常にナポレオンの感情を害した。彼れは自分の家は旅館同様に見做さるべきものではない。ベルトラン夫婦は常に陪食するか、然からずんば全然出席すべからずと宣告した。この注意やこれと同様の言葉に、ベルトラン夫妻は立腹して、

一時は二人共皇帝の前へ出ないやうになつた。そしてベルトランは同僚のグルゴーに、ナポレオンの彼等夫婦に対する態度に就いて、猛烈に不平を訴へ、且エルバに於て彼等は、既にナポレオンの利己主義なのを見抜いたとさへ云ひ添へた。ナポレオンの方から見れば、ベルトラン夫人の手に負へない我儘と機嫌更へとを嫌ひ、これらの缺點は假し彼の女に僅か許りの智的才能があるとしても、それによつて決して贖はれるものではないとした。其の後ナポレオンは屢々彼等に愛顧と深切とを示したが、これが原因となつて、過去に於ける衝突の回想は全く解消することが出来なかつた。そしてベルトラン夫婦は或る時グルゴーに、皇帝の利己的態度は其の友人の少き原因であり、又實に流竄生活の根源であるとも云つた。ベルトランのナポレオンに對する悶着は、モンτροン夫婦に、ナポレオンに向つて自分達を推稱するに都合のよい機會を興へたのであつた。モンτροンはベルトランよりも陸軍に於ける地位は低かつたが、前者は後者より社會的才能と思想上の才質で優つてゐた。彼れ(モンτροン)の妻も亦世才や教養の點でベルトラン

夫人より立勝つてゐて、夫婦共ナポレオンの忠實な家來であつた。而もモンτροンはフランス國內にナポレオン崇拜を宣布した獻身的行爲によつて、常に世人の腦裡を去らざるものである。然かし斯かる忠實な彼れでもセント・ヘレナに於ては、いつも彼れの主人の氣に入ることばかりはなかつた。或る時彼れは島廳當局に、夜中妖怪が——それは多分暗殺者であつたらう——ロングウードの近傍に出沒するからといふ理由の下に、イギリス哨兵の一層近く來つて警護せんことを要求した。偶然夜中に眼を醒ましたグルゴーは、妖怪の聲を耳にしたと思ひ、大急ぎで起き上り窓から外を見た。所がそこに一人のイギリス兵が居た。そこで更に戸外へ立出で、見たのに、尙一人の哨兵を發見した。事の眞偽は暫く措き、斯の様な話をナポレオンに話すことは餘りによくなかつた。果然ナポレオンはモンτροンを怒り付けた。ナポレオンは云つた、『彼れ(哨兵)が我々の監視人にならうとするからには卑劣な心を持つてゐるに違ひない。此の儘に放置したならば、終には余の寢室までも、入つて來るだらう。何ぞ危険があると主張するのか。若

し實際危険があつたとしても、フランスの將校を一人玄關口に置けば済むのだ。どうかイギリス哨兵の護衛はやめにして貰ひたい」と。モントロンはこれ聞いて大いに立腹したが、ナポレオンは彼れに『五月蠅いから彼方へ行け』と呶鳴つて打切つて了つた。

モントロン夫婦は時々喧嘩をした。或る時小さい自分の娘をモントロンが折檻したのが原因となつて、二人は衝突した。母である夫人は燃え上つて夫を刑吏であると云ひ、尙も氣が済まなくつて、ナポレオンの處へ駈け付けて不平を訴へた。所がナポレオンは彼の女を冷かしたので、彼の女は手持無沙汰で歸つたといふことがある。夫婦喧嘩や親子喧嘩を、皇帝の所にまで持つて行かなければならないとは、随分珍らしいことである。

モントロンの運勢——ナポレオンの寵遇——が衰へた時、一時ながらもグールゴ一の運勢が旺んになつた。然かしグールゴ一には自分に向いて來た幸運を、永く取り留めて置く頭がなかつた。彼れの人相を一目見る時は、其の爲人が知れる。

狭くつて扁平な前額は雀の様であつた。彼れは千八百十四年の初の戦争で、ナポレオンの命を助けた思ひ出をよく自慢した。そして屢、彼れは此の話を繰り返へすのみならず、皇帝が『小人にして陰謀家なる』ラカイズを好んでゐるのは、自分には驚異であると云ふことすら附け加へて云つた。これはナポレオンの手に負へない所で、斯ういふ場合ナポレオンはグールゴ一の出鼻を叩いて劍突くを喰はせるか、或は彼れに、お前は善良だが、頭は非常に貧弱だと言ひ聞かせるより他に手段はなかつた。ナポレオンに取つてラカイズの年配の人間が氣に入るのは當然であつた。何故ならばナポレオンは千七百六十九年生れであり、ラカイズは千七百六十六年生れ、グールゴ一はそれより遙かに遅れて千七百八十三年生れであつたからである。グールゴ一には此の筋合を了解することが出来なかつた。彼れの見る所は次の様であつた。ラカイズは智力と學識とを缺いてゐる。彼れは生れながらの權謀家である。而してナポレオンに従つてセント・ヘレナに來たのは、唯彼れ(ナポレオン)の逸話を書くために過ぎない。殊にグールゴ一から見ても最も不

都合であつたのは、ラ・カイズが一度も戦争に参加してゐなかつたことである。これがラ・カイズに對するグールゴの云分であつた。斯かる場合ナポレオンはいつもグールゴ(ナポレオンは彼れのことを戲談にゴルゴット "Gorgotto" と呼んでゐたの頬を心易さうに手で軽く叩くか、或は其の耳を引張つて此の論をやめさせるのであつた。又さもなければナポレオンは、二人は對等である。兄弟の様に仲好く暮さなければならぬ)と云つて結末を付けるより他仕方がなかつた。これがナポレオンに取つては我慢の頂上であつた。そしてベルトランがグールゴは神経質の怒りつばい男であるからと取り做して、彼れは漸く氣を取り直すのが常であつた。流謫生活に於てすらも斯くの如き抑制し得ざる對象の根源となり、又或る場合には反對に隨員達の氣持を和らげて、其の甚しい嫉妬を鎮靜することの出来る人物が、人の王たるべきは當然のことである。

周囲の人々の心的天分が缺陷だらけであつたために、流人の退屈は慰められなかつた。ラ・カイズを除いては、彼等の中に一人として識者がなく、又話の出来るも

のもなかつた。ナポレオンに従つてエルバにも行き、此の度も主馬頭としてセントヘレナに渡つた、ポーランドの軍人ピオントウスキーと云ふ男は、ロングウーッドの人々の中に或るものを感じ、その溷濁によつて壓迫されるのを覺えた。ベルトラン以下ナポレオンの隨員達は、自分達の立場から誰れも彼れを間諜と思ひ、グールゴの如きはピオントウスキーに關して、根據の確かでない記述を暴露しようとする位であつた。それは扱て措き千八百二十八年十二月二十二日、パリに於て彼れ、ピオントウスキーが歴史家エーム・マルタン氏に送つた、次の手紙は引用する價值があるものである。それはマルタン氏が彼れに回想録を公刊せんことを求めたのに對する返事である。而してピオントウスキーは感嘆に堪へざる言葉を以てこれを拒絶してゐる。

『余の(回想録の中に)云ひ得た所のは餘りに忌はしい。と云ふのは彼れ(ナポレオン)の眞の姿は、彼れが受けねばならなかつた苦難——それは彼をし

て皇帝時代よりも一層頑迷ならしめた——に關して、餘りに忌はしい微細の點にまで踏み込まなければ、敘述するのが不可能であるからである。若し余が回想録を公表するならば、余はロングウードの家族を組織する人々を赤裸々に別抉しない譯には行かない。然かのみならずそれに由つて余は誹謗者と思はれるか、又は人をしてナポレオンを誤解せしめ、或は彼れの人物選擇に就いて、誤つた觀念が形成されるだらう。而してそのために恐らく、ナポレオンは最後に至り、彼れと運命を共にする程十分熱誠ある有爲の人物を見出し得ないので、遂に失脚したと想像されるに違ひない。然かしこれは全然誤まつてゐる。何故ならナポレオンはアメリカに渡航し、同國に於て一私人として餘生を送り、そして平和の裡に、忠實な友人に取り捲かれるのを、非常に希望してゐたからである。尤もその忠實な友人と、彼れの子に附隨する一團とを分離することは、當時彼れとしては出来なかつたけれども、十分に精練された詔諛の毒は、彼れを害すること少くなかつた。そして阿諛者は此の時既

に彼れの境遇にはなくてはならないものとなつてゐた。彼れには又フランスで勢力ある名家系に屬する人物が必要であつた。隨員のモントロンは養子であつたが、スモンヴィル(外交官、元老院議員)の私生兒であると云はれた。此の故を以て、ナポレオンは彼れが個人的に無能なのをも顧みずに、採用しなければならなかつたのである。

明瞭に總べてのことを書けば、敵よりも更に一層彼れに害を加へた彼れの家族を赤裸に暴露しなければならぬ。(中略)斯ういふ次第であるから、余が云つて良いことは餘りない。否全然持たない。沈黙してゐた方がよい。然かし余は、余が友愛と満足とを感じる卓絶した精神と燦然たる知識ある人々を、多くの誤解と間違つた先入觀念から救ひ出さうと努力するが故に、絶えず御身に向つて短翰を送らう。それらは私的生活に於ける此の偉人を敘述するものであり、而してそれは彼れの人物、其の精神、彼れの正しき行爲、並びに彼れの善を行はんとする不斷の希望、及び彼れが心ならずも行つた悪事を償は

んとする不斷の祈願等を表明するに適當である筆によつて、此の偉人を説明するであらう。多くの回想録は概して誤まつてゐる。讀者は其れに於て、ナポレオンを見ないで、唯其の著者ばかりを認め、且彼れ著者の誤まれる斷定や、自著を出來得る限り興味付くべき自己(著者)の希望、又或は他人を傷け、それを犠牲として、自分自身を稱揚せんとする企を發見するに過ぎない。余は決して今まで彼れ(ナポレオン)を稱讚すること以外の意思、或は極力彼れに陪侍せんとする以外の希望を持つたことがない。

後世のためにもナポレオンの流竄は、寄與する所がなくはなかつた。こゝに崇高にして今尙忘れられぬ彼れの言葉がある。『こゝセント・ヘレナに於ける我等の境遇は、魅力を持つてゐる。宇宙は我等を凝視してゐる。我等は不朽の大義のために殉教者として永久に其の名を留める。幾百萬の人々は我等のために涕泣する。祖國は嘆じ、光榮は服喪する。我等は此處に専制者達の壓迫に對して奮闘し、

而して諸國民の熱情は我等に身方する。余が眞正の災苦はこゝに存せず。若し余が余自身のためにのみ考ふるならば、恐らく余は當然歡喜するであらう。不幸も亦勇俠と光榮によつて特色づけられる。余が過去の經歷に對して禍患は未だ不足である。若し余にして萬般意の如くなりし大自在の雲の中に、帝王のまゝ死去したならば、余は多くの人々に一つの疑問を残したであらう。今日人々は余の不運に感謝すべきである。今や彼等は在るがまゝの余を見ることが出来るからである。』(ラ・カリーズ回想録) ラ・カリーズは屢々ナポレオンの思想に化粧し、却つて彼れの思想の勁烈さを、其の小刀細工で抹削して了つた。然かし此の言葉は本當のものである。ラ・カリーズは、ナポレオンの雄辯の魅力である所の比倫稀なる辛辣さを有する、此の様な言葉を表現し得ない。此のナポレオンの訴は、實に人の肺腑を剝刺せずんば止まざる所のものである。流人となつたナポレオンは、五千萬の人民の君主であつた時よりも、一層強く人心を支配した。スコットランドの女王メリーが失脚後と同様、被征服者は勝利を得た。如何となれば、彼れは今や恐怖より

も概して永續性ある、世人の憐愍の情に訴へたからである。

ナポレオンの性格は矛盾に充ちてゐる。彼れは南ヨーロッパ民族の特性である熱情を賦與されてゐたと共に、北ヨーロッパ人に獨特な冷靜にして打算的な本能をも具へてゐた。彼れは間歇的に或る時は溫和であり、又或る時は冷酷であつた。釋然物に拘泥せざる一方、執拗の性質があり、寛大にして而かも又利己的であつた。而して彼れの鑑識眼は非常に先見の明に富んでゐたが、時としては餘りに近視的でもあつた。であるから、彼れは總べての出來事や問題に對して、仰山な程雜多な種類の力を集中した。されば吾人が彼れに關する事業を研究する場合に、必ず如何なる種類の才能が此の結果を導き、何れの部門に屬する本能が、彼れを餘儀なく彼の結果に誘つたかといふことを觀考しなければならぬ。而して吾人は本研究の終りに臨んでも尙最も偉大なる武人にして又空前なる組織者であつたナポレオンが、なぜ其の舞臺に出現する以前よりも一層弱くなつたフランス

及びより強大になつた敵を背後に残したかといふ、深遠不可解の矛盾に依つて、惑はされるものである。

彼れの立身を説くことは、其の没落を論ずるよりも容易である。彼れは天稟と自己教養との二つによつて必然的に、其の當時一大組織者を熱望してゐたラテン民族の指導者となつた。彼れはラテン民族の過去に於て最善であつた所のものの大部分を、自分の性格に取り込んだ。秩序の愛好、組織體制を好む眞正の情熱、ローマの榮譽とフランスの傳統に對する深甚なる尊敬、これらは彼れをしてジャコベン主義的改革者に反對な政治の代表者たらしめた。ロシアのカザリン二世が輕妙に評した様に、ジャコベン黨員は人間の皮を羊皮の如く心得て、其の上に筆を馳らせる人々であつた。然かしながら革命思潮の瀾漫した時代のフランスヤコルシカで受けた彼れの教育と、革命信條の中最も實踐的な信條に對する好尚とは、彼れを時運に遅れさせる様なことはしなかつた。そして彼れの性格に於ける保守進歩兩思潮の融合は、彼れをして革命の擾亂を終熄せしめ、且新らしい鞏固な

基礎の上に君主政治を再建させた。フランスに柔か味のある中庸政治を齎した彼れは、更に他のラテン民族をも一層活動的境地に招致せんと試みた。然かるに夫のイスパニアに於ける致命的過失のために、此の企圖は挫折して、ヨーロッパ史に驚くべき一章を展開すべく彼れをして餘儀なからしめたのであつた。此の時に於てナポレオンは公明と正義から遂に別離した。爾後彼れの経路は、誤用された活動の恐ろしき現れであつた。諸國民は續々と其の統治に堪へ得られないことを示して來た。而して各方面に其の權力を維持しようとする彼れが決心は、疑ひもなく彼れの没落の主要原因となつた。彼れの失脚は、成り上り者に對して由緒ある諸國の王室の妬みに因ると云ふ主張は、注意を惹くべく餘りに淺薄である。彼れはフランスと彼れ自身にとつて十分満足し得る條件の下に、列國と協調することが可能であつた機會に幾回か出逢つたが、其の都度それを取り逃して了つた。事實の上から見てそれは全く間違ひないことである。然かし我等の立場、即ち彼れの性格を研究する立場から見る時、彼れの如き精神のはつきりした人物が、ど

うしてこれらの機會を逸したか。これを鮮明に解説することは困難なことである。セント・ヘレナで彼れ自身も、千八百十四年三月、シャチーヨンの媾和會議で、媾和しなかつたのは非常に愚なことであつたと云つてゐる。然かしこの告白と共に、ナポレオンは「なほ一度自分はフランスに歸りたい。それと云ふのは千八百十六年度と十七年度の募兵によつて、手許に歩兵百個聯隊を準備し、更に一飛躍したいと思ふからだ」といふ熱烈な希望を表明した。かゝる希望が、告白と相並んで來ることは、衝動が判斷力を左右する彼れの性質を證明するものである。

ナポレオンの偉大を好む熱情は、次第に其の少壯時代に於て野望を抑制した算定的性能を壓迫して行つた。アウステルリッツ、イエナ、フリードランド等の諸戰役の後、彼れの精神的平衡は破れた様に思はれる。或る一派の人々が主張する様に、彼れは晩年に至つて精力が減退した爲に、敗滅を招いたといふことは正鵠を射てゐない。晩年となつても彼れは以前と同等の精力を持つてゐた。否前々よりも或は精力が増してゐたかも知れない。然かしその絶大な精力を調整すべき正

確な批判力が、此の時には既に無力になつてゐたのである。統領時代に於ける彼の秩序正しい改造の事業は、最も勝れた政治家的資性が生み出した成果に外ならなかつた。然るに後年の事業の大部分は、無秩序なる構想、反理性的な我儘、或はギリシアの神話時代には價値があつたらうけれども、開明のヨーロッパに於ては既に無効となつた頹迷の象徴をよく現はしてゐる。彼れの爲した社會的大事業はこれから先きも永續するだらう。然かし彼れが軍事的に求めた所のものは、彼れ自身の時代が未だ經過せざるに先立ちて、はや無効に歸して了つた。さり乍ら人間の本性は、ローマンスを愛好するが故に、ナポレオンの性格は偉大なる奮闘的活動、目的に向つての強烈なる精力の集注、或は『不可能』の無視等々、人間の強い方面を、人の心裡に喚起するものとして、永久に存在するであらう。人類は彼れが最後に劃した線とは、遙かに異つた線に沿つて進む。然かし此の舊世界を破壊し、人間活動の範圍を擴大し、後世に對して成功の標準を高めた英雄を推讃することは、恐らく何時までも止まないであらう。

ナポレオンを或る一つの範疇の中に取り纏めようとするのは無駄な業である。斯かる企ては從來幾度か企てられたが、大した成功は獲られなかつた。お世辭の良いアポットの讚頌は暫く措いても、吾人は尙他に四つのナポレオン論を引證し得る。先づ第一にかのエマソンは、的確さよりも寧ろ其の尖鋭なる點に於て優れてゐる評論に於て、ナポレオンは當時擡頭して來た中流階級の特性の具現であると云つてゐる。然かしエマソンは同論半途に至つて、此の偉大なコルシカ人が上流と下流の間に立つ、株式仲買人の位置には、當て嵌まらないのに氣付いたと見え、それ以下彼れはナポレオンをメロドラマの敵役と評論した。第二にテイヌの、ナポレオンはイタリア傭兵隊長の復活であるといふ刺繡的評論は、精緻であり巧妙であるけれども、餘り十分なものは云へない。第三にソレルは、驚くべき技術と完全さを以て、ナポレオンが大フランスの代表者であり、自然的境界——ピレネー山脈、アルプス山脈、ライン河——に對するフランスの要求の首唱者であることを表明すべく努めてゐる。然かし此の論すらも亦唯彼れの政治の一方面を概

説したのに過ぎないもので、余の考では、ナポレオンの没落に關しては誤つた議論をしてゐるものと見られる。第四にレヴィー氏は、此の英雄を模範的國民として云ひ現はさうと骨を折つてゐる。氏の云ふ所に據れば、彼れは常に平和の維持に苦心してゐたが、諸列國の連続的刺戟に驅られて戦つたと云ふのである。此の論も亦假令好意を以て見るとしても、甚だ偏頗なものであることは否まれない。それは屢々ナポレオン自身が話したり書いたりした陳述と衝突してゐる所がある。余は氏を眞面目に描かれたナポレオンの肖像を、平凡なカリカチュアなりとして排斥する第一人者であつたらうと思ふ。

ナポレオンと優勝を争ふべく、多種多様な、又力強い才能を有した人が、唯一人ある。それはローマのジュリウス・シーザーである。シーザーの影像是、丁度此の偉大なコルシカ人が自分の影像でフランス革命時代を蔽ひ隠したやうに、ローマの世界を蔽つたのであつた。シーザーもナポレオンも共に、舊秩序が棄てられて、新らしき理想が時代の承認を求めようとする大變動期に生れ出た。兩者等しく種

種な方面で舊きに對して新らしきを結び付け、且君主政治の原則を永續することに成功した。何故ならば兩者共に、初めは、廣濶で一層進歩した智的政治を熱望したが、後には、すべて古來の習慣と眞面目な因襲のスタンプを押されたものに對する好意的な願慮から、其の態度が緩和されたからであつた。それ故少年期に改革者であつた彼れらは、老熟するに従つて保守主義者と變つて行つた。従つて彼等の名譽心も、次第次第に專制政治に傾く彼等の性格の變遷に伴れて、其の役割を演じた。即ち當初、彼れらの名譽心は改新に向つて働き、後には保守的なものに對して働いた。そして戦争の冒險は此の趨向(獨裁政治への)を一層促進せしめた。とは云へ兩者共に、當時踰越として歸向する所を知らなかつた人々を指導すべく、統治者としての權限を遂行し、且能く其の威儀ある統治を時代の要求に適應せしめたのであつた。或る點に於てシーザーはナポレオンより立優つた人物である。余には思はれる。シーザーが檜舞臺へ上つたのは、年取つてからであつた。然かし彼れは、彼れを殺すに非ざれば到底破壊し得ざる確乎不拔の優越權を、戦争と政

策とによつて、容易く作り上げた。而して彼れは新らしい簡単な戦略の原則を見ずること、單純なローマの政體を、急速に發達したローマ大帝國の要求に適應する様更むることによつて、民衆の先頭に立つた。更に彼れの仁慈と手腕とは、彼れがローマ大帝國の傘下に加へた、被征服民族の好感情をも招來することが出来た。而も彼れは自分が統治者となる前よりも一層廣汎にして又強大な國家を後へ遺したのである。最後に附け加へなければならぬことは、シーザーはナポレオンの様に、國の内外に於けるあの比類ない戰略によつて、自分の觀察眼を盲にすることも、亦其の性質を硬化することも無かつたことである。彼れの絶大な精力は殆ど無盡藏の溫情によつて調整せられ、人間化されてゐた。であるから、若しシーザーが天壽を完うしたならば、あの驚くべき經歷を、謹嚴と慈愛との花を以て、死ぬまで飾り續けたであつたらうことは確かである。

此の點に於てナポレオンはシーザーに一籌を輸する。此のゴルシカ人には、不吉な恐るべき或るものが附き纏つてゐた。彼れの氣分はシーザー的であるより

も寧ろオシアンのであつた。皇帝の稱號を得て後、彼れは終に屬邦を背かしめた所の力の政策を次第次第に用ふる様になつた。其のため彼れは千八百八年彼れの所謂『イスパニアの失策』によつてイベリア半島を失つた。而して其の後彼れは主として威嚇によつて、北ドイツの背馳するのを抑壓してゐた。そしてセント・ヘレナに流されてから初めて其の過であつたことを彼れは悟つた。であるから、彼れのアレクサンドル大王を讚稱する言葉の中にも自責の含意アンチ・イニが窺はれる。曰く『吾人のアレクサンドルに就いて良いと思ふ所は、あの戦争——それは到底吾人の了解し得ない——ではなくして、其の政策である。彼れは年齒僅かに三十三にして十分に組織立てられた帝國——彼れの死後部下の將帥のために分割されて、終りは完うしなかつたが——を遺した。彼れは征服民から愛される方便を知つてゐた』と。然かり、征服者が被征服者に愛されることこそ、最高の政治家の證シロである。ナポレオンは、自分には此の至高の天性が足らなかつたことを、最後に至つて感悟したのであつた。西ピレネー山脈を越え、東ラインの河を涉り、彼れが捲き

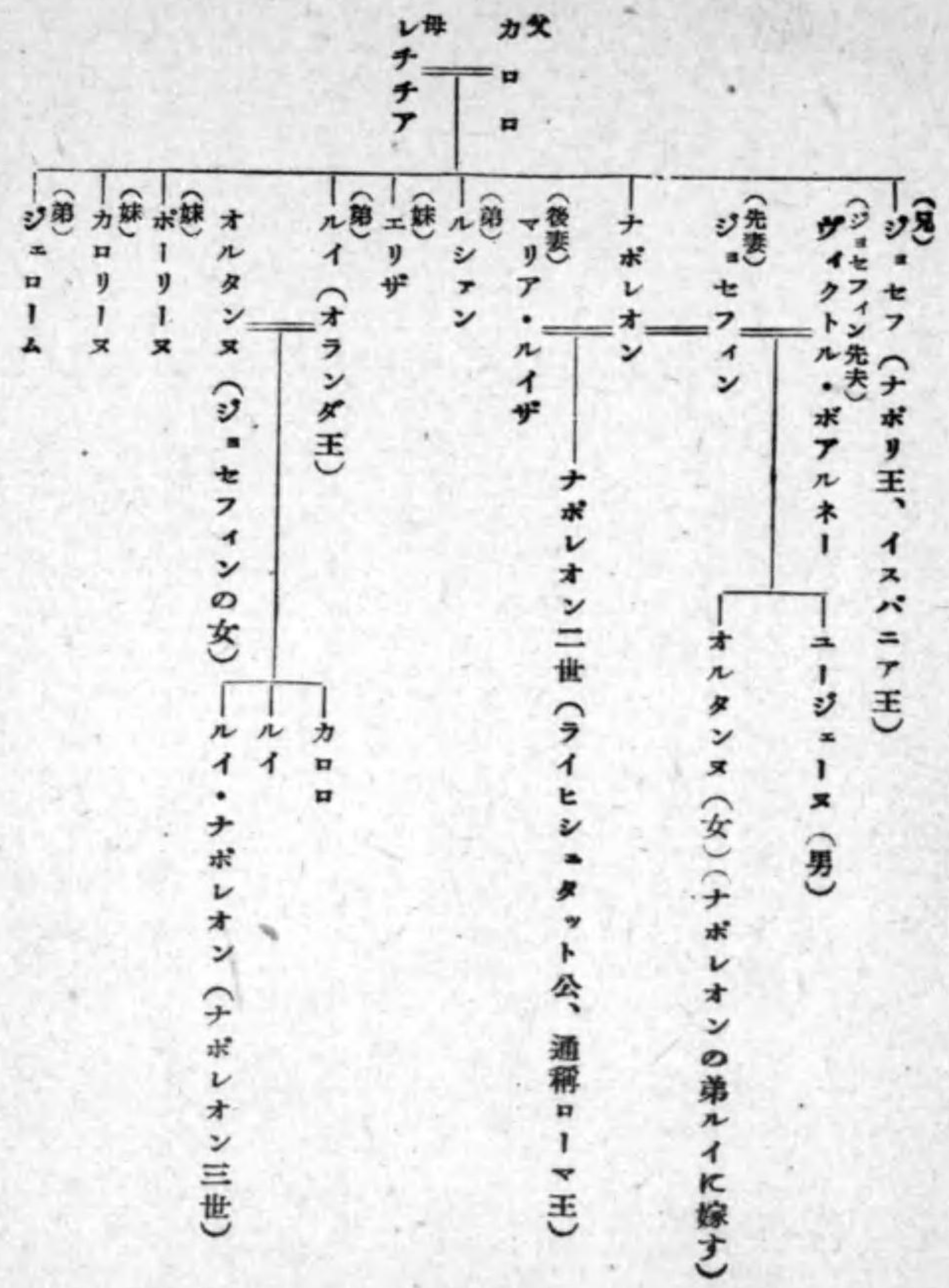
起した所のものは愛よりも寧ろ憎悪であつた。

然かしナポレオンは全然愛さるべき素質を缺いてゐた譯ではない。或る方面ではそれと正反對の事實をも示してゐる。彼れはそれを家族や親密なる友人に對して示した。兎に角彼れの政治に關する概念は次第に硬化し、輿論を愚弄して相手にしなかつた中に、自負心は彼れの全存在を掩蔽するまでに擴がつて了つたのである。よい年配になつた頃餘り幸福に過ぎたのは、彼れの最大不幸であつたと云ふ主張は間違ではない。若しナポレオンがバリーに於て、或は初期の戰爭に於て、確かりした腕のある相手に出會つたならば、恐らく連戦連勝の呪咀——即ち退行變性——を避け得たであらう。彼れは徐々に其の呪に捕はれることとなつた。そしてオーストリアの皇女マリアルイザを娶つた後は、他の忠告にも耳を傾けないで、自分の企てた總べての計畫を遂に慘憺たる結果にまで押し進めた。而して次に來たものは取りも直さず災殃の打撃であつた。然かし彼れの性格は、打撃によつて改造されるには、既に餘りに硬化し過ぎてゐた。彼れの精力が十分に

覺醒させた世界に於ては、斯の様な處世法は永續する成功を獲られなかつた。神は斯くの如き人々を、人類を向上させる神祕な仕事に役立つ間は使用する。然かし革新事業が完成するや、それを棄て、了ふのである。ナポレオンはさう云ふ時期の到來したの知らなかつた。そして又既に明け初めてゐた國家主義の新時代が未だ到らざるかの如く、インドに向ひ、カディズに向ひ、將又モスコウに向つて驀進し續けた。而して其の結果、セント・ヘレナに彼れは其の生涯を終つたのであつた。

(をばり)

ナポレオンの系圖



ナポレオン年譜

一七六九年

○八月十五日、ナポレオン、ヨルシカのアヤッシオに生る。

一七七〇年

○五月十六日、ルイ十六世、オーストリア女皇の末女マリア・アントアネットと婚し、ヴェルサイユ宮殿に式を挙ぐ。

一七七一年

○ナポレオン、アヤッシオの寺院にて洗禮を受く。
○ナポレオン戦争畫家グロイ生る。

一七七二年

○第一次ボーランド分割。
○ミラボー、マリア・エミリア・ド・コヴェユと結婚す。ミラボー時に年二十五。

一七七三年

ナポレオン年譜

☆☆

一七七四年

○五月十日、ルイ十五世死し、ルイ十六世即位す。モルバー宰相たり。

○八月二十四日、チュルゴイ大藏大臣に任ぜらる。

○經濟學者フランソア・ケネー死す。

○ヴェルジエンヌ、フランス外相となる。

一七七五年

○八月、フランスの各地、ディジョン、ポントアーズ、ヴェルサイユ、パリ等に『殺物の争闘』起る。チュルゴイ軍隊をしてこれを鎮壓せしむ。

一七七六年

○五月十二日、フランスの藏相チュルゴイ罷められクリュニー之に代る。此の時國務大臣マイルゼルブ亦チュルゴイと進退を共にす。

○十二月、クリュニー突如死亡し、宰相モールバイ銀行家ネッケルを蔵相に推薦す。
 ○佛將ラファイエット、アメリカ合衆國の獨立を援助せんとし、商船を雇ひアメリカに渡る。ワシントン彼れを陸軍少將に任ず。

一七七七年

☆ ☆

一七七八年

○一月、フランス、アメリカ合衆國の獨立を承認す。
 ○二月六日、フランス、アメリカ合衆國と平和通商條約を締結す。
 ○五月三十日、ヴォルテイル死す。
 ○七月二日、ルソウ死す。
 ○十二月十五日、ナポレオン、父カロロに伴はれて、兄ジョセフ、叔父フェッシュと共にコルシカよりフランスに赴く。

一七七九年

○一月一日、ナポレオン、オータン中學校に入り、兵學校入學の準備をなす。

○十一月三日、フランス、カロンヌ内閣成る。

一七八四年

○ナポレオン、ブリエンヌ兵學校を成績優等にて卒業す。
 ○十一月二十三日、ナポレオン、バリーの士官學校に入る。

一七八五年

○二月二十四日、ナポレオンの父カロロ・ボナバルト胃癌にて死す。
 ○九月一日、ナポレオン、バリーの士官學校を卒業し、砲兵少尉に任ぜられ、ラフェール聯隊附を命ぜらる。
 ○十一月五日、ナポレオン任地ヴァランスに赴く。

一七八六年

○ミラボー、ヴェルジエンヌ伯の委託を受け、プロシア視察の目的を以てベルリンに赴き、フレデリック大王に謁して、大に其の人物に傾倒し、歸國し「フレデリック大王のプロシア國に就て」を著す。
 ○八月十七日、プロシア王フレデリック二世(大王)崩じ、甥フレデリック・ウイルヘルム二世即位。

○四月二十五日、ナポレオン、ブリエンヌの兵學校に入る。

一七八〇年

○ミラボー、バリー郊外シャトー・ド・ヴェンセンヌの獄より出づ。此れを契機として性格一變し、蕩兒一躍國士となる。

一七八一年

○フランス蔵相ネッケル、ルイ十六世に賦役の免除、恩賜金の削減、地方自治の允許を建白す。
 ○ネッケル歳計を公開す。
 ○五月十一日、前項の結果ネッケル辭職す。
 ○六月十二日、前蔵相チュルゴー死す。

一七八二年

○二月十二日、イギリスの水師提督ロドネーは、サン・ドミンゴ島附近に、ドグラス麾下のフランス艦隊を破る。

一七八三年

○一月二十日、ヴェルサイユ平和會議(英佛西間)アメリカ合衆國の獨立承認。

一七八七年

○二月一日、ナポレオン休暇を得て初めて故郷アヤツシオに歸る。
 ○二月二十二日、フランス政府名士會を召集す。
 ○四月十七日、カロンヌ蔵相辭職す。
 ○五月一日、ブリエンヌこれに代りて蔵相となる。
 ○十月十五日、ナポレオン、フランスに戻りバリーに赴く。
 ○十二月二十五日、ナポレオン休暇を得て再びコルシカに赴く。

一七八八年

○四月五日、セウルに暴動起り、ナポレオン一部隊を率ゐて鎮壓に赴き、九月一日歸隊す。
 ○八月八日、ルイ十六世勅令を以て翌年五月三部會召集の事を定む。
 ○八月十六日、フランス政府破産に瀕す。
 ○八月二十五日、フランス蔵相ブリエンヌ罷められ、ネッケル再び財務に當る。
 ○十一月六日—十二月十二日、フランス政府、再び名

士會を召集。

一七八九年

- 一月二十四日、フランス政府、三部會選舉規則發表。
- 四月二十七、八日、レヴェイヨン事件。
- 五月四日、三部會の大行列。
- 五月四日―六月二十日、三部會の決議は三部合同の頭数によるか、各部個々に行ふか争議決せず。
- 六月十七日、第三部獨立して『國民議會』と稱す。
- 六月二十日、テニスコートに於ける第三部議員の誓約。
- 六月二十三日、ルイ十六世會議に親臨、第三部の意見貫徹し、三部合同決議を行ふこととなる。
- 七月十二日、ネッケール罷む。パリに暴動起る。
- 七月十四日、パリーの暴民ベスチューの獄を攻陥す。
- 七月十五日、ネッケール蔵相に復す。
- 七月―八月、各地方農民の叛亂。
- 八月四日、フランス議會、封建的特權廢止を議決す。
- 九月十六日、ナポレオン賜暇を得て、三度コルシカ

に歸る。

- 十月二日、ヴェルサイユに於ける近衛兵主權、フランス聯邦歡迎の祝宴、三色旗懸綱。
- 十月五日、パリ―細民女群ヴェルサイユを襲ふ。王室及び議會パリに移る。

一七九〇年

- ナポレオン、コルシカに滞在し、島内の革命運命に參與す。
- 二月四日、ルイ十六世、議會に親臨、國民誓約。
- 六月、フランス全國聯盟の進行。
- 七月一日―十二日、パリ―全市、シャン・ド・マルヌの聯盟紀念祭に熱狂す。
- 七月十四日、聯盟紀念祭。
- 八月二十四日―三十一日、ナンシーの暴動、ブイエーに鎮撫せらる。
- 九月三日、蔵相ネッケール辭職してフランスを去る。
- 九月三十日、ナンシー虐殺者の葬儀。
- ジャコマン黨、在來フランスに行はれし、半僧院教

育制度を撤廢す。

○ゲーテのファウスト出版せらる。

一七九一年

- 二月、ナポレオン、賜暇を了つて、フランスに歸る。
- 二月二十八日、ヴェンセンヌの攻撃。
- 四月二日、ミラボー死す。
- 四月四日、ミラボーの葬儀。
- 四月十八日、ルイ十六世、セン・クルーに赴かんとして群衆に遮らる。
- 五月四日、セン・チュリージュ、法王の像を焼く。
- 六月一日、ナポレオン、砲兵中尉に昇進、ヴァランヌ砲兵第四聯隊附を命ぜらる。
- 六月二十日、ルイ十六世、オーストリアに逃れんとし、翌二十一日ヴァレンヌに於て捕はる。
- 七月十七日、シャン・ド・マルヌの虐殺。
- 八月二十七日、ピルニッツの決議。
- 八月三十日、ナポレオン休暇を得て、四度コルシカに赴く。
- 九月十四日、ルイ十六世會議の制定せし新憲法を批

准す。

○九月三十日、立憲國民議會の解散。

○十月一日、立法國民議會の開會。

○十月十六日、レスキューイエー及びアヴィニヨンの騒亂。

一七九二年

- 三月、ジロンド内閣の成立。
- 四月、前年來コルシカにありて、島内の革命運動(獨立運動)に参加せしナポレオン、撰ばれて義勇兵隊の少佐となる。
- 四月二十日、フランス對外宣戰。
- 四月二十九日、リールの騒亂、デヨン部下の兵殺さる。
- 五月二日、ナポレオン、フランスに歸る。
- 六月九日、モービュージュの小戦闘。
- 六月十二日、ジロンド内閣の瓦解。
- 六月十九日、ルイ十六世二個の決議案―宣誓せざる僧侶の處分及び聯盟兵パリ―駐屯に關する決議―に中止權を用ふ。

- 六月二十日、パリーの暴民チュイルリー宮に迫り、國王侮辱事件起る。
- 七月六日、パリー市長マチオン解職の命を受く。
- 七月七日、『ラムレット』の接吻、左右兩黨議員相擁して接吻す。
- 七月十一日、立法議會、『祖國は危急にあり』と宣言す。
- 七月十四日、聯盟祭。
- 七月二十二日、プロシアのブラウンシュワイヒ公、對佛宣言を公表す。
- 七月三十日、マルセイユ隊とフィュー・セン・トーマの獵騎兵の衝突。
- 八月八日、ラファイエット、フランスを去る。
- 八月九日―十日、中央執行委員會パリー市政を獨占す。國民衛兵司令官マンダラの虐殺。
- 八月十日、チュイルリー王宮の襲撃、王權の停止、フランス王政の顛覆。
- 八月十日―十二日、ジロンド黨の新内閣成立、ダントン司法大臣となる。

- 八月十三日、ブルボン王族タンブルに幽閉せらる。
- 八月十七日、革命裁判所創立さる。
- 八月二十三日、ロンウィー開城。外敵パリーに迫らんとす。
- 八月三十日、ナポレオン、フランス砲兵大尉に昇進す。
- 九月二日―六日、九月虐殺。
- 九月二日、ブラウンシュワイヒ公ヴェルダンを取る。
- 九月二日、アルゴンヌを占領。
- 九月十四日、ナポレオン五度コルシカに歸り、革命運動に加はり、パオリの政敵となる。
- 九月二十日、ヴァルミーの戦。
- 九月二十一日、憲法制定國會の開會。
- 九月二十二日、フランス共和政治の宣言。
- 九月三十日、フランス國內に進入せし、プロシア、オーストリア兩國軍撤兵を開始す。
- 十一月六日、ジェマープの戦、ジェムリエー、オーストリア軍を破る。
- 十一月十九日、フランス國會各國の専制政治廢棄に

助力することを提議す。

- 十二月十一日、ルイ十六世審問の開始。

一七九三年

- 一月十四日、パリーの亂民大舉議會を包圍し、國王の死刑執行を迫る。
- 一月二十一日、ルイ十六世の死刑。
- 二月一日、英佛開戦。
- 二月二十四日、國民大徵發の決議。
- 三月七日、佛西開戦。
- 三月十日、ラヴァンデーの叛亂。
- 三月十八日、ネールウインデンの戦、オーストリア軍フランス軍を破る。
- 三月二十五日、フランス政府、公安委員會を設置す。
- 四月四日、ジェムリエー、オーストリアに出奔す。
- 五月三十一日、謀叛委員會、ジロンド派十二委員會を廢止す。
- 六月二日、一揆叛亂、ジロンド派代議士の追放、恐赫政治始る。
- 六月十一日、ナポレオン、コルシカに於いてパオリ

黨の迫害を受け、家族と共にフランスに逃る。

- 七月十日、ゴンドー、英埃同盟軍に占領さる。
- 七月十三日、マラー、シャロット・コルデーに暗殺さる。
- 七月十五日、シャロット・コルデー革命裁判所より死刑を宣告せられ、即日斷頭機上に死す。
- 七月二十三日、マインツ、プロシア軍に占領せらる。
- 七月二十六日、アヴィニョン、ジャコマン黨に降る。
- 七月二十八日、ヴァランシエンヌ、英埃同盟軍に降る。
- 七月二十九日、ナポレオン、ボーケイルに入り、八月初旬『ボーケイルの晩餐』を著す。
- 八月一日、前皇后マリア・アントアネット處刑の議起る。
- 八月二十八日、イギリス提督フリード、ツーロンを占領す。
- 九月十七日、嫌疑者檢束の法律。
- 十月六日、フランス政府共和曆を採用す。
- 十月九日、國會軍リヨンを取る。

- 十月十四日、マリア・アントアネット革命裁判所より死刑を宣告せらる。
- 十月十六日、マリア・アントアネットの死刑。
- 十月十九日、ナポレオン、ツィロン包圍軍の砲兵司令官に任ぜらる。
- 十月三十一日、ジロンド黨名士死刑に處せらる。
- 十一月十日、道理崇拜の儀式。
- 十二月十九日、ツィロンをイギリスの手より奪還す。
- 十二月二十二日、ナポレオン軍功により陸軍少將に昇叙さる。
- フランス國會は舊制度の教育に代ふべき、初等及び中等教育方針を發表す。

一七九四年

- 二月六日、ナポレオン、イタリア軍砲兵司令官に任ぜられ、ニースに駐在す。
- 三月十五日、エメールチストの捕縛。
- 三月二十四日、エメールチストの處刑。
- 四月五日、ダントンの派の處刑。

- 六月一日、プレスト沖に於て、イギリス艦隊フランス艦隊を破る。ヴァンジュール號の撃沈。
- 六月八日、エイトル・シユアブレイム(最高存在)崇拜の儀式。
- 七月二十一日、ナポレオン軍事探偵としてジェノアに派遣せらる。
- 七月二十七日、テルミドールの變、恐嚇時代終る。
- 七月二十八日、ロマスビエール、サンジュスト等處刑さる。
- 八月六日、ナポレオン、ロマスビエールと款を通ぜしとの嫌疑により投獄せらる。
- 八月二十日、ナポレオンの嫌疑晴れて、自由の身となる。
- 九月十四日、ナポレオン、コルシカ遠征軍司令官に任ぜらる。
- 十一月十二日、ジャコマン・クラブの閉鎖。
- 十二月八日、ジロンド黨員七十三名の國會復歸。

一七九五年

- 一月、ピシユグールの率ふるフランス軍、オランダ

征服。

- 三月、コルシカ遠征軍イギリス艦隊に撃破せられ、ツィロンに引上ぐ、ナポレオンこれに従軍す。
- 三月二十七日、ナポレオン、ラヴァンデーの砲兵司令官に任ぜらる。
- 四月一日、フランス國會に對する一揆失敗す。
- 四月五日、プロシア、フランスとバーゼルに講和す。
- 四月七日、フランスの公安委員會は、學術的調査を學術委員會に命じ、地球子午線の四千萬分の一を標準とし、これをメートルと名付く。
- 五月二十日、フランス國會に對する、第二次一揆失敗に歸す。ブレイリアルの變。
- 六月九日、ドーファンールイ十六世の子、ルイ十七世と稱せらる一殂す。
- 六月十三日、ナポレオン、ラヴァンデーの歩兵旅團長に任ぜられしも、之を喜ばず、巴里に滞在して赴任せず。
- 七月十日、フランス、イスパニアと講和。
- 九月十五日、ナポレオン政府の命令に服せざる廉を

以て軍職を解かる。

- 九月二十三日、一七九五年憲法の實施、總裁政治の宣言。
- 十月五日、國會に對する最後の一揆運動、ナポレオンはバラの推舉によつて其の副將となり、一舉暴徒を鎮壓す。ヴァンデミエールの變。
- 十月二十日、ナポレオン軍功により陸軍中將に任ぜられ、内國軍司令官に補せらる。
- 十月二十五日、フランス政府法律を以て、教育機關の國家管理を定む。
- 十月二十六日、國民公會の解散、總裁政府の樹立。

一七九六年

- 一月、ポワランド第三次分割に遇ひ、終に滅亡す。
- 三月二日、ナポレオン、イタリア軍司令官となる。
- 三月九日、ナポレオン、ジュセフィンと結婚す。
- 三月十一日、ナポレオン、イタリアに向けパリーを出發す。
- 四月十二日、ナポレオン、モンテノッテにサルディニア軍を破る。

- 四月二十日、ナポレオン、モントヴィにサルディニア軍を破る。
- 五月十日、ナポレオン、ロディに勝つ。
- 六月、イスパニア、フランスと同盟す。
- 七月、フランスの將軍オーシユ、イギリス侵入を計畫し、戦列艦十七、フリゲート十三、他十隻の艦隊を組織し、二萬の陸兵を搭載して出發せしも、暴風の爲め失敗に歸す。
- 八月六日、ナポレオン、カステイグリオンにオーストリア軍を破る。
- 八月二十四日、佛將ジュウルダン、オーストリアのカロロ太公とフランコニアのアムベルグに戦ひ、之を破る。
- 九月三日、ジュウルダン、ウエルツブルグにカロロを破る。
- 十一月七日、ナポレオン、オーストリア軍をアルコレに破る。
- ロシア帝ポール一世即位。年四十三。

一七九七年

- 一月十四日、ナポレオン、オーストリア軍をリヴェリに破る。
- 二月二日、ナポレオン、マンテュアを陥る。
- 二月十四日、英提督ジャークヴィス、イスパニア艦隊をセント・ヴィンセント岬沖に破る。
- 二月十九日、ナポレオン、ローマ法王とトレンチノ條約を締結す。
- 四月十八日、ナポレオン、總裁政府の訓令を待たずして、獨斷オーストリアとレオベンに媾和條約を結ぶ。
- 五月八日、ナポレオン、總裁政府に、新イタリア共和政體の創設と其の施設に關する意見を述べ。
- 五月二十六日、ナポレオン、ヴェニス新共和政府に對し、其の獨立を保證すると同時に、ヴェニス市及び同國領土の東半部を、オーストリアに割譲す。
- 九月四日、菓月のクーデター。
- 十月十一日、カンバーダウンの海戦。イギリス、フランスと同盟せるオランダ艦隊を破る。
- 十月十七日、フランス、オーストリアとカンポフォ

ルミオ條約を結ぶ。

- 十二月五日、ナポレオン、イタリヤよりパリーに引き揚ぐ。

一七九八年

- 五月十九日、ナポレオン、エヂプト遠征の爲め、ツロンを出帆す。
- 七月四日、ナポレオン、アレクサンドリアを占領。
- 七月二十一日、ナポレオン、ピラミッド下にマメルク騎兵を撃破す。
- 七月二十四日、ナポレオン、カイロに入る。
- 八月一日、アブキルの海戦、ブルーエ、ネルソンに破らる。
- 九月四日、ナポレオン、エヂプト人は總べて三色の帽章を着け、ナイル河上の船舶は皆三色旗を掲揚すべきことを命ず。
- 九月二十二日、戦勝のネルソン、ナポリに入るや、同市民彼れを「我等の解放者」と稱して歓迎す。
- 十月、オーストリアのマック亦ナポリに入りて歓迎せらる。

- 十月二十一日、エヂプト人、フランス軍の壓迫に堪へ兼ねて、カイロに暴動を起す。
- 十一月二十四日、ナポリ王三萬八千の兵を以てローマ共和政府を攻撃し、二十九日ローマに侵入す。
- フランス總裁政府、アイルランド叛徒を援助し、イギリス侵入を企てしも失敗す。
- オランダの總裁政府創立。
- フランス、スウイスに干渉し、其の政體を變更して、ヘルヴェティア共和國とす。

一七九九年

- 一月、ウイリアム・ピットの主唱により、第二次對佛大同盟成る。參加國英露埃葡土。
- 一月十一日、ナポレオン、シリアに侵入す。
- 一月二十二日、フランス軍ナポリに入り、王政を廢し共和政を布き、バルテノベ共和國とす。
- 二月十四日、フランス、オーストリアに宣戦し、軍をラインの右岸に進む。第二次對佛同盟との戦即ち始まる。
- 三月、フランス軍トスカナ太公を追ひ、同國を屬領

とす。同所に拘禁せしローマ法王を、ヴァランスに移す。

○三月十七日、ナポレオン、アクレを包圍す。

○三月二十日、オーストリアのカロロ太公、七萬の兵を以て、デュールダン麾下四萬の佛軍を、オストラッハに敗る。

○四月二十七日、八日、露將スワロフ、墺露聯合軍を以て佛將モローをイタリアのカッサノに破る。爲めにチサルピナの共和政治崩壊す。

○四月二十八日、ラスタットに使せしフランス使節、オーストリア兵に虐殺さる。

○六月四日、墺將ヨセフ、マッセナをチュリッヒに破り、スウイスの三分の二を掌中にす。

○六月十四日、ナポリの保守黨、共和黨を破る。

○六月十六日—十九日、スワロフ、トレビア河畔にマクドナル及びモローの軍を粉砕す。

○六月下旬、ナポリの保守黨、バルテノベ共和國を顛覆す。

○八月十五日、モローに代りしジュール、スワロフ

とノヴァイに戦ひ、敗れて死す。

○八月二十八日、イギリス・ロシア聯合軍、オランダに上陸。オランダ艦隊イギリスに内應す。

○八月二十九日、ローマ法王ピウス六世遷化。

○九月十九日、佛將ブリュニス、ヨーク公の兵を破る。

○九月下旬、マッセナ、スワロフをスウイスに破る。

○十月九日、ナポレオン、エチプトよりフレジウスに到着す。十二日パリに入る。

○十月二十二日、ロシアのポール一世、書をオーストリアのフランシス一世に送りて同盟を拒絶す。乃ち第二次對佛同盟に龜裂を生ず。

○十月三十日、夜、ナポレオン、シエリス及び兩院の溫和派議員と會見。事を共にせんことを約す。

○十一月九日、ブリュニールのクーデター、ナポレオン政權を掌握。

○十一月十一日、ナポレオン、シエリス、デューコーの三假統領初會議を開く。

○十二月、ナポレオン、内務省内に教育局を設く。

○十二月二十二日、ナポレオン、新憲法に對する一般

投票の結果を待たず、其の確定を宣言し、四十八時間以内に諸官吏を任命す。

○十二月三十日、ナポレオン、ローマ法王ピウス六世の葬儀を執行す。

一八〇〇年

○一月、ナポレオン、マルタに孤立せる佛軍を救援せんとし艦隊を派遣せしも、イギリス艦隊に妨げられて成らず。

○一月十七日、フランス政府、新聞紙に大壓迫を加へ、其の六十を廢刊せしめ、檢閲に服するもの僅十三を存續せしむ。

○一月十八日、ナポレオン、商工業獎勵の爲め資本金參千萬フランのフランス銀行を起し、政府をして五百萬フランを支出せしむ。

○二月十七日、ナポレオン、地方制度法を發布す。

○三月二十五日、クレール、エチプト、ヘリオポリスに於て、味方に倍するトルコ軍を破り、低下せんとするフランスの勢力を挽回す。

○四月、ナポレオン、對英政策より海軍を擴張し、ア

ントワーブよりツィロンに至る海岸を六區に分ち、兵員士官を増加す。

○四月五日、マルタ島、フランスの手よりイギリスに移る。

○五月二十日、ナポレオン、アルプス、サン・マルナールを越す。

○五月、イギリス、アイルランドを合併す。

○六月二日、ナポレオン、ミランに入る。

○六月四日、ジェノアに孤立せしマッセナ、救を待ち得ずメラスに降る。

○六月十四日、マレンゴの役。

○同月同日、クレール、エチプトに於てアラビア人に刺さる。

○七月初旬、ナポレオン、イタリアよりパリに凱旋。

○八月、ナポレオン、トロンシェー、ビゴード・アレムニュー及びポルタリスの三名を編纂委員として法典の編纂に着手す。

○十月十九日、ナポレオン教書を下して、脱走貴族僧侶の宥免を公布す。

- 十二月三日、ナポレオン、ホーヘンリンデンにオーストリア軍を破る。
- 十二月十六日―十八日、ロシアのポール一世、イギリスの暴慢を怒り、スウェーデン、デンマーク、及びプロシアと、武装中立を結び、ロシア港灣に碇泊中のイギリス船三百隻を押収す。
- 十二月二十四日、ブルボン黨、ナポレオンがオペラに赴く途を要して暗殺せんとせしも成らず。
- ナポレオン、バルマ公をエトルリア王とし、其の報償として、エルバ島を取る。
- 此の年フランスの歳入不足一億フラン。

一八〇一年

- 一月、ナポレオン、ガントームをしてエチプト救援に赴かせしも成功せず。
- 二月、イギリスのピット内閣倒れ、平和主義のアディントン内閣成立。
- 二月九日、ナポレオン、オーストリアとリネヴィエに媾和條約を結ぶ。
- ロシアのポール一世、書をナポレオンに送りて、親

佛反英の意あるを示す。

- 三月二十三日、夜、ポール一世、ズボフ公、メンニヒゼン伯、ヤチュヴィル公等に暗殺さる。
- 四月二日、ネルソン、コペンハーゲン砲撃。
- 六月二十九日、孤立のフランス軍、エチプトに於てイギリス軍に降る。
- 七月四日、佛提督リノア、英海將ソーマリーをアルヘシラスに破る。これ實に革命戰爭よりナポレオン戰爭に互りて、フランスの勝ちし唯一の海戰なり。
- 七月十五日、ナポレオン、ローマ法王ピウス七世とコンコーダットを結び、一七九一年の宗教法を廢す。
- 九月、フランス主税局は納稅者臺帳を作り、山林の管理を改良し、歳入を倍加す。
- 九月十四日、ナポレオン、オランダ政府に干渉し、憲法改正に關する宣言を發せしめ、其の十八日駐屯軍の將オージューローに命じ、武力を以て、攝政々治を設立せしむ。
- 九月二十九日、ナポレオン、ポルトガルとマドリッド條約を結び、フランスはポルトガルに領地を還し、

ポルトガルはフランスに、ブラジルの北部を割讓す。

- 十月一日、ナポレオン、イギリスと平和假條約を結び、フランスは海外領土の大部分を回復す。
- 十月十一日、フランス、ロシアと祕密條約を結び、フランスはナポリ不侵略を約す。
- ハノーバー人シャルンホルスト、プロシア軍に搭す。

一八〇二年

- 三月二十七日、フランス、イギリス、アミアンに和し、前年の假條約を確定す。
- 四月十八日、ナポレオン、ノートルダムに於て、コンコーダットを宣布す。
- 五月一日、ナポレオン、公共教育に關する法律を發布す。
- 五月十九日、ナポレオン、レジヨン・ド・ヌールの制を定む。
- 五月二十日、ナポレオン、ウイユルテンベルヒと條約を結び、其の領土擴大を承諾す。
- 五月二十三日、ナポレオン、バヴァリアと同様の條約を結び、尋でヘッセン、バーデン等とも亦彼等に

有利なる條約を締結す。即ち彼れの對普對奧政策に基く。

- 六月、ロシア帝アレクサンドル一世、ナポレオンとドイツ處分案の履行に協力すべきを約す。
- 八月、ナポレオン、在來の名士表を廢す。
- 八月二日、ナポレオン終身の第一統領となる。
- 八月四日、フランス元老院は、第一統領の權限擴張を決議し、附與するに特赦權、條約締結權、元老院議員任命權を以てす。
- 九月、ナポレオン、サルディニア王國をフランスに併合す。

一八〇三年

- 二月、リーグンスブルグ帝國代表者會議成立し、ドイツ帝國に於けるオーストリアの勢力減退す。
- 五月、ナポレオン、イギリス艦隊索制の爲めに、オトラントを占領す。
- 五月十二日、英佛平和關係破れ、駐佛英國大使バリ

1を引揚ぐ。

- 五月十八日、英佛開戦。
- 五月、ナポレオン、ドイツのハンノフェル(イギリス領)を占領。北海岸の主要河口に於ける對英通商を禁ず。大陸封鎖の濫觴なり。
- ナポレオン、一千五百萬ドルを以て、ルイジアナをアメリカ合衆國に賣却す。

一八〇四年

- 三月、ナポレオン、ダンチアン公を銃刑に處す。
- 三月二十四日、ナポレオン法典實施せらる。
- 四月、イギリスのアディントン内閣倒れ、主戦的のピット、内閣を組織し、對佛大同盟の結成に努力す。
- 五月十八日、フランス、共和政治を廢し、帝政を布き、ナポレオン帝位に即ぐ。
- 五月二十四日、プロシア、ロシアと對佛防禦の協商を結ぶ。而かもプロシアの態度不鮮明なり。
- 九月、ナポレオン、ドイツの諸侯をアーヘンに會同せしむ。
- 十一月六日、ロシア、オーストリア、對佛秘密條約

を結ぶ。

- 十二月二日、ナポレオン、ノートルダムに即位式を擧ぐ。
- 十二月、フランス、イスパニアと同盟す。
- ネッケール死す。
- シュタイン、プロシアの商務大臣となる。

一八〇五年

- 三月、ナポレオン、オランダの攝政政治を廢し、シメルベンリンクを執政官とし、專權を揮はしむ。
- 三月三十日、ヴィルヌーヴ、ナポレオンの命に依り、イギリス艦隊を西インドに誘致すべく、ツーロンを抜錨す。
- 四月、ナポレオン、パリを發してイタリアに赴く。
- 四月十一日、英露同盟條約締結、他國の對佛同盟參加に努力す。
- 五月十日、ナポレオン、ミランに入る。
- 五月十三日、ヴィルヌーヴ、イギリス艦隊を誘致しつゝ、西インドのマルチニク諸島に達す。
- 五月二十六日、ナポレオン、舊イタリア王の鐵冠を

受く。

- 六月四日、ヴィルヌーヴ、マルチニクよりヨロップバへ歸航の途に就く。
- 七月七日、オーストリア、英露の勸説に従つて對佛大同盟に参加。
- 七月八日、ナポレオン、トリノを發し、同十一日フオンテヌブローに歸る。
- 七月二十日、ヴィルヌーヴの爲め、西インド迄誘致せられしネルソン、ジブロールターに歸る。
- 七月二十二日、フィニステール岬沖の海戦。英提督カルダー、西インドより歸途のヴィルヌーヴをフィニステール岬沖に要して破りしも、ヴィルヌーヴ、フェローレルに入ることを得。
- 八月三日、ナポレオン、オーストリアに最後の通牒的交渉を爲す。
- 八月二十日、ナポレオン、イギリス侵入の好機を逸す。即ちナポレオンはヴィルヌーヴをして、フェローレルより、ブレストに赴かしめ、同港の艦隊を合せ、更にブローニニに現れ、陸兵を護送してイギリス

に上陸せしめんとせしに、彼れは却つて南下してカディズに入港し、ナポレオンのイギリス侵入策を根本より覆す。

- 八月二十七日、イギリス侵入の策に破れしナポレオン、オーストリア征服の令を下し、大陸戰に轉ず。
- 九月八日、オーストリア軍漸くイン河を渉る。
- 九月十三日、ナポレオン、オーストリア軍のダニユーヴ渡河を耳にし、其の戰略を變更す。
- 九月十七日、ナポレオン、各軍團にラインの渡河及び其の後の戰略を授く。
- 九月二十三日、埃將マック、メムミンゲンを占領す。
- 九月二十五日―二十八日、フランス軍ラインを渡る。
- 九月二十七日、ナポレオン、マックのウルム滞在を見て、ベルナドットに旋迴運動を命ず。
- 九月二十八日、ネルソン、カルダーに代りてカディズの封鎖任務に就く。
- 十月五日、マック、フランス軍の運動を探知して、分散せる兵をウルムに集中すべき運動を開始す。
- 十月七日、フランス軍ミュラーを先頭に各軍團ダニ

ムーブを渡る。

○十月八日、フランス軍、ウエルティンゲン附近にオーストリア軍を撃破す。

○十月九日、夕、マック、ダニエーブ左岸に退却せんとせしも成らず、ウルムに還る。

○十月十日、フランス、オーストリア兩軍、ギェンツブルグ(ウルムの東北東約二十軒)に闘ふ。

○十月十一日、兩軍ウルム近郊ハストラッハに戦ふ。

○十月十四日、スール、ウルムの南方メムミンゲンを占領す。

○同日、ネイ、ウルムの北東エルヒンゲンを攻撃し、包圍線を完全にす。

○十月十六日、ナポレオン、ウルムを包圍し、市街を砲撃す。

○十月十八日、マック、ウルムに於て、ナポレオンに投降状を致す。

○十月十九日、ヴィルヌーヴ、カディズを發して、ジブールター海峡に向ふ。

○十月二十日、ナポレオン、ウルムを占領す。

○十月二十一日、トラファルガーの海戦。ネルソン、ヴィルヌーヴの率ゐし佛西聯合艦隊を粉碎し、身亦斃る。

○十月末、ロシア帝アレクサンドル一世、ベルリンに赴き、プロシアの對佛同盟参加を勸告す。

○十一月六日、プロシア、フランスに對し武力調停を試み、成らざれば同盟に加入することに決す。

○十一月十三日、ナポレオン、ウインナに入る。

○十一月二十二日、オーストリア來援のロシア第一軍(クツゾフ麾下)、後發の第二軍(ブックスヒューデン麾下)に合す。ナポレオンの位置危険となる。

○十二月二日、アウステルリッツの會戦。フランス軍大勝。オーストリア軍死者六千、ロシア軍死者二萬一千、フランス軍の死者八百、鹵獲砲百八十門。

○十二月四日、ナポレオン、フランシス一世の請によりリナシェドロウイッツに會見す。

○十二月六日、フランス、オーストリア休戦條約成る。

○同日、ロシア帝アレクサンドル一世、フランスの提出條件を認めずして歸國す。

○十二月十五日、シェーンブルン條約。ナポレオン、

プロシアの使臣ハウグウィッツと假條約を締結し、

イギリスに對し、プロシアの全海岸を閉鎖せしむ。

○十二月二十六日、フランス、オーストリア、プレスブルグに和す。

○十二月二十七日、ナポレオン、『ナポリ王國に於けるブルボン家は、其の統治權を中止せり。』と宣し、マッセナをして、同地を襲はしめ併吞す。

一八〇六年

○一月九日、ネルソン國葬を以て、セントポール寺院内に葬らる。

○一月十四日、ナポレオンの義子ユーージェニス、結婚政略に因り、バヴアリア太公の女アウグスタと婚す。

○一月二十三日、イギリス首相ピット死す。グレンヴィル卿後繼内閣組織。

○二月六日、ナポレオン、タレーランを介して、オランダ執政官シンメルペンニクに、其の政體を變更し王國たらしむる旨を傳ふ。

○二月十五日、ナポレオン、パリに於てプロシアの

ハーグウィッツに、シェーンブルン條約よりも一層

親佛排英的の條約締結を強制的に承諾せしむ。

○二月二十日、ナポレオン、議政府に於て、女子教育案を説明す。

○三月、ナポレオン、兄ジョセフをナポリ王となし、イタリア全土を掌握す。

○三月、ナポレオン、妹婿ミュラーをベルヒ(バヴアリアより割取せる)に封じ、太公を稱せしむ。

○三月十日、ナポレオン、オランダの政體變更不承諾を一蹴す。

○四月、トラファルガーの敗將ヴィルヌーヴ、イギリスより歸り恥を思ひ自殺す。

○四月、イギリスはプロシアの排英的態度に對し、自國港灣在泊のプロシア艦船を拿捕し、航海中のものを掃蕩す。

○四月八日、ナポレオン、政略の爲めバーデンの公太孫チャールズとジョセフィンの姪ステファニーを婚せしむ。

○四月十二日、ナポレオン、プロシア王(フレデリッ

- ク・ウイリアム)に迫り、己に好からざるハルデンベルヒを罷めしめ、ハウグウィッツに代らしむ。
- 六月、ナポレオン、英外相フォックスの親佛政策に應へ、パリに抑留せるフォックスの友人ヤーマスを釋放し、英政府に平和談判開始を申込みしめ、兩國交渉開始せらる。
- 六月五日、オランダ、ルイ・ボナパルトを國王に推戴せん爲め、大使をチュイルリー宮に派す。
- 七月一日、プロシア、フランスの不信を感知し、使をロシアに送り、秘密條約を締結す。
- 七月十二日、ライン同盟成立。
- 七月三十日、ロシア、英佛間の和談進行を知り、殘留孤立を虞れ、使節をパリに送り平和假條約を結ぶ。
- 八月六日、神聖ローマ帝國の解散、オーストリア帝フランシス一世により宣言せらる。
- 同日、駐佛英大使、ハノーヴァー還附問題をプロシア大使に漏らす。プロシア大いにフランスを怒る。
- 八月九日、プロシア、對佛動員開始。
- 八月二十六日、ナポレオン、『屈抑のドイツ』を出版せる書肆バルムを處刑。ドイツの人心大いに沸騰。
- 八月末、プロシア、ブラウンシュヴァイヒ公を征佛軍司令官に任ず。
- 九月十三日、イギリスの外相フォックス死す。
- 九月二十六日、ナポレオン、プロシアに向つてパリを發す。
- 十月二日、ナポレオン、ウエルツブルグに達す。
- 十月八日、プロシア、フランスに向つて宣戰。
- 十月九日、普佛兩軍シュライツに於て衝突し、プロシア軍敗る。
- 十月十四日、イエナ、及びアウエルシュタットの戰、佛軍兩ら勝つ。
- 十月二十五日、ナポレオン、ポツダムに入り、メルリン市特派委員より、同市の鍵を受く。尋で文武官僚を随伴し、ガルニソン寺院に、フレデリック大王の墓に詣づ。
- 十月二十六日、ナポレオン、ポツダムを發し、メルリンに向ふ。

- 十月二十七日、ナポレオン、ベルリンに入る。
- 十一月二日、ナポレオン、ロシア牽制の爲め、ポーランド人ドンプロフスキ及びウイビチキ等をして、ポーランド人に對し、煽動的宣言書を發布せしむ。
- 十一月初旬、ナポレオン、戰線進出に伴ふ後方聯絡線延長の爲め、七萬の増兵を本國に命ず。
- 十一月十六日、プロシアの使節、ナポレオンの提示せる過酷の休戰條約を承認す。
- 十一月二十一日、プロシア王フレデリック・ウイリアム、オステローデに御前會議を開き、此の休戰條約を認めずして、戰爭繼續に決す。
- 同日、ナポレオン、ベルリンに於て大陸封鎖令を發す。
- 十一月二十六日、プロシア王、東プロシアの將校に軍隊改革の必要を告ぐ。
- 十二月一日、プロシア王、軍隊改新を宣言し、軍規を肅振す。
- 同日、サクソニア、ライン同盟に加入。
- 十二月十五日、ザクゼン、ワイマール、ゴータ、マインゲン、ヒルドブルグ等亦同盟參加。
- 此の年フランス國民と軍隊の比は、國民二千八百萬に對し、兵役に適するもの二十五萬、而して勤務せしもの八萬人なり。フレデリック大王が、國民の百分の二を兵に用ひしに比すれば、其の比輕少なり。
- ナポレオン、フランス帝國貴族制度を制定す。
- 一八〇七年
- 一月一日、ナポレオン、東プロシアよりワルソーに入る。
- 一月十一日、メンニヒゼン、ロシア軍司令官となり、これと不和なるブックスヒューデン召還され、軍部内統一せらる。
- 一月、イギリス、ナポレオンの大陸封鎖令に對し、樞密院令を發す。
- 二月八日、アイラウの戰。
- 三月、ナポレオン、パリにユダヤ僧侶を集め、ユダヤ高利貸取締を議せしむ。
- 四月三日、オーストリア、佛對普露關係争の仲裁提

- 四月、ハルデンベルヒ、再びプロシアの外相となり、獨裁権を振ひしも、七月ナポレオンの要求により、フレデリック・ウイリアム三世、已むなく彼れを罷免す。
- 四月、グナイゼナウ、コルベルヒ防禦司令官となり、プロシアの諸城、風を望んで佛軍に降りしも、獨り休戦まで開城せず。
- 五月二十五日、ダンチヒ、フランス攻圍軍に降る。
- 六月、ナポレオン、ミラン勅令を發布して、益々大陸封鎖の嚴行に努む。
- 六月十四日、フリードランドの戦。
- 六月二十一日、ナポレオン、アレクサンドル一世とニーメン河中筏上に會見。
- 七月四日、シャトープリアン、マルキュール・ド・フランス紙上に、ナポレオンの壓制攻撃の論文を掲ぐ。
- 七月七日、チルジットの和約、佛露平和成る。
- 七月九日、第二チルジットの和約、佛普平和成立。
- 七月十日、ハルデンベルヒ、建白書をフレデリック・ウイリアム三世に上り、國家革新を強唱す。
- 七月二十五日、プロシア王、軍隊改革の一端として、軍制革新委員會を設置、少將シャルンホルストを委員長とし、グナイゼナウ中佐、グロールマン少佐等委員となる。
- 八月三日、プロシア皇后ルイザ、第二チルヂット條約の緩和を、ナポレオンに哀願せしも成らず。
- 八月、イギリス、デンマルクに、其の艦隊を自國の保監の下に置くべきことを要求す。デンマルクこれを拒絶す。
- 八月末、ナポレオン、大陸封鎖境域擴大を期し、エトルリアを壓迫し、目的を達す。
- 九月二日―五日、イギリス海軍、コペンハーゲン攻撃、デンマルク政府屈して、イギリスの要求を容る。
- 九月三十日、シュタイン、フレデリック・ウイリアムの招請により其の行在所に候す。
- 十月九日、シュタイン、自由平等の改革令を勅令の形式の下に發布す。

- 十月二十七日、ナポレオン、フォンテースプロローに於て、イスパニア公使とポルトガル分割の秘密條約を結ぶ。
- 十月三十日、デンマルク、イギリスの行動を怒り、フランスと同盟す。
- 十一月、イギリス、第二樞密院令を發す。
- 十一月七日、ロシア、イギリスに宣戰す。
- 十一月二十九日、プロシア、英露開戦の結果、獨力中立を守るを得ず、ロンドンより其の使節を召還す。
- 十一月三十日、ナポレオン、ポルトガルの大略封鎖不参加を憤り、三萬の兵をジュノーに授けて、これを攻む。ポルトガル王軍艦を率ゐて、植民地ブラジルに走る。
- 十二月末、ナポレオン、大陸封鎖履行と、法王壓迫の爲め、將軍ルマロアに命じ、ウルピノ、マチュエラ、アンコナの三法王領を占領せしむ。
- ナポレオン、政略の爲め、弟ジェロームをして義に結婚せしアメリカのパターソンを離別し、ウエルテルベルヒ公の女、カタリナと結婚せしむ。
- フランスの民心漸くナポレオンより去る。
- 一八〇八年
- 一月、ナポレオン、ミリオスにローマ占領を命ず。
- 二月二日、ミリオス、ローマに入り其の實權を掌握す。
- 二月十三日、プロシアの宰相シュタイン、對佛償金支拂の窮餘の結果、初めて所得税法を發布す。
- 二月末、ナポレオン、スウェーデンが依然イギリスと同盟せるを見て、ロシアに勸めて、これに侵入せしむ。
- 三月、ナポレオン、公、侯、伯、子、騎、の五爵を制定。諸將及び舊貴族等に授けて、其の歡心を買ふ。
- 三月十八日、イスパニア、アランフェスに一揆起り、皇太子フェルディナンドを戴き、王チャールス四世及び王族を抑留。王乃ち禪位、皇太子即位す。フェルディナンド七世。
- 五月、エトルリア領トスカナ、フランス直轄領となり大陸封鎖範圍に入る。
- 五月二日、イスパニア人、マドリッドに排佛暴動を

- 起す。
- 五月、オーストリア陸相カロロ太公、国防調査委員會を設く。
- 五月二十一日、ナポレオン、警視總監フリーシエに、凡べての刊行物の半島戦争記事は、モニートル紙に準ずべき旨の公布を命ず。
- 六月九日、オーストリア国防調査委員會、國防法を發表す。
- 六月十五日、ナポレオン、イスパニア名士會をベヨンヌに召集し、兄ジョセフのイスパニア王及びインド王たらんことを要請して、これを承認せしむ。
- 七月二日、ナポレオン、オーストリアの戦備を詰り、開戦を以て威嚇す。
- 七月、イスパニア新王ジョセフ・ボナパルト、マドリッドに入る。
- 七月十四日、イスパニアの野戦軍、フランス軍とリオセコに戦つて敗る。
- 七月二十二日、デュボン、バイレンに於て、イスパニア軍に降る。
- 八月二十一日、プロシアの宰相シュタイン、シャルンホルスト、グナイゼナウ等と熟議、對佛策戦を王に上れども、王これを用ひず。
- 八月二十八日、トルコ新王マムード二世即位、排佛政策を施行す。
- 九月八日、バリー協商。プロシアは十ヶ年間四萬二千以上の兵を蓄へざること、償金一億四千萬フランをフランスに支拂ふことを約す。
- 九月二十七日、ナポレオン、ロシア帝アレクサンドル一世とエルフルト市外に會見、轡を並べて同市に入城す。エルフルト大會議始る。
- 十月二日、ナポレオン、ゲーテとエルフルトに見ゆ。
- 十月十二日、ナポレオン、アレクサンドル一世、協商に署名す。
- 十月末、イギリス、ナポレオンのイスパニア遠征に備へ、ジョン・ムーアに三萬の兵を率ゐしめ、ポルトガルに上陸、イスパニア境界に向つて進軍せしむ。
- 十月三十一日、ルフェーブル、イスパニアのブレイクをサラゴサに破る。

- 十一月三日、ナポレオン、イスパニア征討の爲めベヨンヌに到り、自ら全軍を指揮し、マルチエーを參謀長とす。
- 十一月十日、フランス軍大いにイスパニア軍をブルゴスに破る。
- 同日、ヴィクトル、ブレイクをエスピノザ附近に破り、イスパニア軍壊走して、死傷三千に達す。
- 十一月十九日、プロシア王、シュタインの進言に基き、『プロシア王國全都市に關する勅令』を發布す。
- 十一月二十四日、シュタイン、ナポレオンの忌諱に觸れ、プロシア王彼れを罷職す。
- 十二月一日、イスパニア、ソモシエラ山峽の激戦。
- 十二月二日、ナポレオン、マドリッド郊外に達し、勸降狀を城内に送りしも、市民これを拒絶す。
- 十二月四日、ナポレオン、マドリッドを占領。
- 十二月十六日、ナポレオン、マドリッドより前ドイツ宰相シュタインの逮捕令を發す。
- オーストリア、ナポレオンの要求により、イギリスに、前年來其の抑留せるデンマルク艦隊の返還を請
- 八月二十一日、プロシアの宰相シュタイン、シャルンホルスト、グナイゼナウ等と熟議、對佛策戦を王に上れども、王これを用ひず。
- 八月二十八日、トルコ新王マムード二世即位、排佛政策を施行す。
- 九月八日、バリー協商。プロシアは十ヶ年間四萬二千以上の兵を蓄へざること、償金一億四千萬フランをフランスに支拂ふことを約す。
- 九月二十七日、ナポレオン、ロシア帝アレクサンドル一世とエルフルト市外に會見、轡を並べて同市に入城す。エルフルト大會議始る。
- 十月二日、ナポレオン、ゲーテとエルフルトに見ゆ。
- 十月十二日、ナポレオン、アレクサンドル一世、協商に署名す。
- 十月末、イギリス、ナポレオンのイスパニア遠征に備へ、ジョン・ムーアに三萬の兵を率ゐしめ、ポルトガルに上陸、イスパニア境界に向つて進軍せしむ。
- 十月三十一日、ルフェーブル、イスパニアのブレイクをサラゴサに破る。
- 十一月三日、ナポレオン、イスパニア征討の爲めベヨンヌに到り、自ら全軍を指揮し、マルチエーを參謀長とす。
- 十一月十日、フランス軍大いにイスパニア軍をブルゴスに破る。
- 同日、ヴィクトル、ブレイクをエスピノザ附近に破り、イスパニア軍壊走して、死傷三千に達す。
- 十一月十九日、プロシア王、シュタインの進言に基き、『プロシア王國全都市に關する勅令』を發布す。
- 十一月二十四日、シュタイン、ナポレオンの忌諱に觸れ、プロシア王彼れを罷職す。
- 十二月一日、イスパニア、ソモシエラ山峽の激戦。
- 十二月二日、ナポレオン、マドリッド郊外に達し、勸降狀を城内に送りしも、市民これを拒絶す。
- 十二月四日、ナポレオン、マドリッドを占領。
- 十二月十六日、ナポレオン、マドリッドより前ドイツ宰相シュタインの逮捕令を發す。
- オーストリア、ナポレオンの要求により、イギリスに、前年來其の抑留せるデンマルク艦隊の返還を請
- 一月五日、シュタイン、ナポレオンの壓迫に堪へず、密かにベルリンより、オーストリアに走る。
- 一月、チロルのアンドレアス・ホーフエル、ウインナに赴き、佛澳開戦せば舊領主オーストリアの爲めに立つべく約す。
- 一月十七日、ナポレオン、バリーに向つてイスパニアを去る。
- 一月二十三日、ナポレオン、イスパニアよりバリーに到着す。
- 一月二十八日、ナポレオン、タレーランがオーストリアと内通したる罪により、侍從長の職を奪ふ。
- 二月八日、オーストリアの對佛作戦計畫成る。
- 二月末日、オーストリア帝フランシス一世、對佛開

戦を決意す。

○三月二日、ロシアのアレクサンドル一世、オーストリア大使シュワルツェンベルヒに、佛墮保争に關しては、ロシアはフランスに味方すべき旨を聲明す。

○四月九日、オーストリア、カロロ太公、戦争宣言を發す。

○同日、墮將デュ・シャストレー、一萬五千の兵を率ゐて、チロルに入る。

○四月十二日、チロル民軍、主都インスブルグを陥れ、ベウァリア兵を降す。

○同日、ナポレオン、パリに於て、オーストリア軍のイン渡河を耳にす。

○四月十三日、ナポレオン、オーストリアに向つてパリを發す。時にナポレオンの戦備已に成り、對墮兵力(イタリア地方軍を除き)二十萬に達す。

○四月十七日、ナポレオン、ドナウヴェルトに着。

○四月十九日、ナポレオン、オーストリア軍を、アイムスベルグに破る。

○四月二十二日、エックミュールの戦。

○四月二十八日、プロシア驍騎兵少佐フェルディナン・ド・シル、プロシア朝廷の優柔不斷に憤慨し、演習に託し、部下を率ゐてベルリンを發し、ドイツ各地に互り、ナポレオンに隸屬せる各國軍と戦ひ、五月三十一日ストラルズンドに於て、フランス軍と戦ひ、戦死す。

○四月二十九日、デルンベルグ大佐亦シルと謀を通じ二千の農兵を率ゐ、ホンブルグを發し、カッセルに於て敗北し、ボヘミアに逃る。共にプロシア國民のナポレオンに對する反感の象徴なり。

○五月、ナポレオン、ローマ法王ピウス七世を廢す。

○五月十三日、ナポレオン、ウインナを陥る。

○五月二十一日—二十二日、アスペルンの戦。ナポレオン、カロロ太公に破られて、初めて退却す。

○七月三日—六日、ワグラムの大戰。

○七月六日、ミュラー、ナポレオンの命によりローマ法王をクイリナル宮に捕へ、グルノーブルに送致す。

○七月十一日、オーストリア休戦を提議す。ツナイム休戦協約成立。

○七月二十六日、ナポレオン、シェーンブルンより命じて、パリーのガゼット・ド・フランスの記者を禁錮す。

○七月二十七日—二十八日、ウエリントン、イスパニアのタラヴェラに、ウイクトルの軍を破る。

○十月四日、ナポレオン、オーストリアの全權リヒテンシュタインと、ウインナに平和條約を結ぶ。

○十月二十日、ナポレオン、メテルブルグに書を送りて、彼れがポーランドの再興に、意なきことを辯明す。

○十二月十五日、ナポレオン、チュイルリー宮に皇族會議を開き、ジョセフィン離別の決意を表明す。

一八一〇年

○一月二十七日、マレー、ナポレオンの意を體し、内閣會議に於て、ロシアと姻戚關係を結ぶは不利にして、オーストリアと結ぶの有利なることを演説す。

○二月五日、ナポレオン、言論取締を一層嚴酷にし、印刷物検査の爲め、特に監察官を設定す。

○二月六日、ナポレオン、駐露佛國大使に令して、前

言を齟さしむ。

○二月七日、ナポレオン、皇族會議に於て、オーストリア皇女マリア・ルイザと結婚すべきを聲明し、即夜駐佛オーストリア大使シュワルツェンベルヒは、結婚の豫約に署名す。

○二月九日、對墮結婚政略成立の報を耳にし、パリに於ける公債價格暴騰す。

○二月十七日、ナポレオン、元老院をして法律を發せしめ、公然法王領を併吞し、法王には年金貳百萬フランを支給する旨を宣す。

○三月十一日、ナポレオン、マリア・ルイザの結婚式、ウインナのアウグスチン教會に於て擧げられ、カロロ太公、ナポレオンの名代として式に列す。

○四月一日、ナポレオン、マリア・ルイザとの俗世的の結婚式を、セン・クルー宮に擧げ、翌二日ルーヴル宮の禮拜堂に於て、宗教上の儀式を行ふ。

○四月、ウエリントン、トルレスヴェドラス(ポルトガル)に退却す。

○七月、オランダ王ルイ・ボナパルト、兄ナポレオン

○大陸封鎖に堪へず、密にオーストリアに逃れ、位を第二子ルイ・ナポレオンに譲る。ナポレオンこれを認めず。

○八月五日、ナポレオン、大陸封鎖履行の爲め、トリアノン勅令を發布す。

○九月、スウェーデン王カロロ十三世、イギリスに宣戦。

○十二月、ナポレオン大陸封鎖を完全ならしむる爲、ウエーゼル、エルベ河口の併合を執行す。

○年末、ナポレオンの法王に對する壓迫益々甚しく、文書類の披見を許さず、筆墨すら奪ふも、ピウス頑として屈せず。

○十二月三十一日、ロシア帝アレクサンドル一世、ナポレオンがウエーゼル、エルベ河口併合に際し、親戚オルデンブルグ公領を併呑せしを怒り、勅令を發して、親英反佛の政策を執る。

○ロシア、チルジット條約によりイギリスと絶交せし結果、財政逼迫し、紙幣の價值は此の年に至り、額面の四分の一に下落す。

○ナポレオン、フリーシェが彼れを排斥せんとする陰謀に加はりし疑に依り、其の職を免す。

○プロシア政府、ベルリン大學を創設し、フィヒテ、シュライエルマッヘル、フンボルト兄弟等教鞭を執る。

一八一一年

○三月二十日、マリア・ルイザ、皇子フランソア・シャルル・ジョセフを生む。

○三月、ナポレオン、エルベ河畔駐屯のダウーに、對露作戦に機を逸せず、ダンチヒに急行し、同所に於ける五萬のポーランド人及びサクソニア人を併すべく命ず。佛露風雲次第に急なり。

○六月、ナポレオン、宗教界の混亂を整理の爲め、フランス、イタリア、ベルギー等の監督を會合せしむ。

○八月十五日、ナポレオン、アレクサンドル一世がオルデンブルグの代償として、ワルソウを得度き旨提言せしも拒絶す。

○此の年フランスの歳出豫算九億五千四百萬フラン中、陸軍費四億八千萬フラン、海軍費一億七千萬フ

ランナリ。

一八一二年

○一月、スウェーデン王嗣ベルナドット、ポメラニア地方を公開して、イギリス船の碇泊を許し、ベルリン條例を無視し、盛にイギリス品を輸入せしを以てナポレオン其の背恩を怒り、兵を出してポメラニアを占領す。ベルナドット乃ち救をロシアに求め、アレクサンドル一世これを容る。

○二月二十四日、ロシア、ナポレオンの強請により、已むを得ず、フランスと同盟す。

○三月十四日、フランス、オーストリアの對露同盟成立。

○四月三十日、ロシア帝アレクサンドル一世、ナポレオンに最後の通牒を發す。

○五月、ナポレオン、ロシア遠征の爲め、兵十五萬を率ゐて、パリイを發し、ドレスデンに赴く。

○五月二十八日、ナポレオン、ドレスデンを發す。

○五月末、トルコ、ナポレオンの勸説に従ひ得ず——イギリスの壓迫と、ロシアの寛容の爲め——ロシア

と和睦す。

○六月、アメリカ合衆國、イギリス海軍の亡狀に堪へず戰を宣す。

○六月、ナポレオン、法王ピウス七世をサヴォナよりフォンテーヌブローに移す。

○六月二十三日、ナポレオンの中軍、コヴノ附近にてニーメン河を渡る。

○六月二十八日、ナポレオン、ヴィルナを占領す。

○七月十日、ナポレオン、ヴィルナを發し、ヴィテプスクに向ふ。

○七月二十二日、マルモン、サラマンカ(イスパニア)に於て、ウエリントンに大敗す。

○七月二十八日、ナポレオン、近衛兵を率ゐてヴィテプスクに入る。

○八月三日、ロシアのベクラチオン、パークレーの兩將スモレンスクに會し、兵數十一萬に達す。

○八月十日、ナポレオン決戦を期し、ヴィテプスクを發す。

○八月十四日、ナポレオン、ドニエール河を渡り、

- 八月十六日―十九日、モスコウへの退路を断たんとす。
- 八月二十九日、ロシアの軍司令官バークレー勳爵、クツゾフ之に代る。
- 八月末、アレクサンドル一世、オーボ(フィンランド)に於て、ベルナドットと會見。ベルナドット、ロシア帝に最後まで戦はんことを勸む。
- 九月一日―七日、ポロヂノの戦。佛露兩軍各四萬四千の死者を出す。佛軍勝つ。
- 九月十四日、午後、フランス軍モスコウに入る。全市寂として音なし。
- 九月十四日―二十日、モスコウの大火。
- 九月十八日、プロシアのシュタイン、論文『ドイツ將來の憲法に就て』を發表す。
- 十月五日、ナポレオン、ローリンストンをクツゾフの許に遣し、休戦を提議せしむ。
- 十月十九日、ナポレオン、モスコウより退却を開始。
- 十月二十三日、パリに於て共産主義の將軍マレ、ナポレオン覆滅の陰謀を企てしも、成らずして

捕はる。

- 十月末、セン・シル及びヴィクトル、チャチュニキに於て、ヴィトゲンシュタインに破らる。
- 十一月三日、ナポレオン、退却の途、ウイアスマに於て、兵士に解隊を命ず。
- 十一月六日、退却途上のフランス軍最初の吹雪に逢ひ、困苦の狀言語に絶す。
- 十一月九日、ナポレオン、モレンスタに歸着す。
- 十一月二十七日、ナポレオン、ベレジナ河を渡る。
- 十一月二十八日、ベレジナ河畔の激戦、佛露勝敗未決。
- 十二月三日、退却中の佛軍、零下十六度の寒氣に遇ひ、銃を手にするもの僅に九千人、加之六日には零下二十四度、八日には同四十度の酷寒に襲はれ、既に銃を持つ勇氣あるもの無く、毎夜數百人の凍死者を出す。
- 十二月五日、ナポレオン、ウイルナ東方の地點を發しパリに直行歸還の途に上る。馬車に同乗せしもの、コーレンクール、ダリユー、ムートンの三名。

前程二千軒。

- 十二月十日、ナポレオン、ワルソウに達す。
- 十二月初旬、ロシア軍亦寒氣に悩ませられ、入院するもの四萬八千に達し、中旬に至りては戦闘力あるもの四萬に減ず。
- 十二月十四日、ナポレオンの『大軍』潰滅せしを見て、『大軍』の右翼たりし埃將シュワルツェンベルヒ、自軍を率ゐスロムニよりワルソウ公國方面に退き、程無くロシアと休戦す。
- 十二月十八日、ナポレオン、パリに歸着す。
- 十二月二十五日、プロシアのハルデンベルヒ、アンチロン及びクネーゼベック密議、ナポレオン壓迫を策しフレデリック・ウイリアム三世に上奏す。
- 十二月三十日、ロシア、プロシア間に、タウロゲッテン協商成立す。

一八一三年

- 一月、ロシア皇帝アレクサンドル一世、大勝紀念幣を鑄造す。
- 一月十三日、プロシアのナッツメル中佐、密かにリ

トニアのロシア大本營に到り、プロシアの親露排佛の精神を奏す。

- 一月二十五日、ナポレオン、法王とファンテーヌブロー協約を結ぶ。
- 一月二十八日、プロシア宰相ハルデンベルヒ、武装委員會を組織し、懇請してシャルンホルストを委員の一たらしむ。
- 一月二十九日、ナポレオン、プロシアに跪れ、其使節ハッツフェルトに對露再戦の意圖を語る。
- 二月三日、プロシア武装委員會、宣言書を發して、良家の子弟の義勇兵たらんことを勸説す。
- 二月八日、プレストラウ大學物理學教授ステフェンス、講義時間に愛國演説をなす。
- 二月九日、プロシア武装委員會、十七歳以上二十四歳に至る丁年者に對し、總べての服役に關する制限を撤廢すべきことを發令す。
- 二月十二日、プロシア政府、シレジア及びボメラニアに動員令を下す。
- 二月二十八日、プロシア王、國民の熱誠に驅られ、

- カリッシュに於て、對露同盟締結に署名す。
- 三月、法王ピウス七世、フォンテーヌブロー協約に於ける讓歩を悔ひ、これを取消す。
- 三月三日、イギリス、スウェーデン、對佛條約締結。
- 三月十七日、プロシア王フレデリック・ウイリアム三世、宣言書「我が臣民に寄す」を公にす。
- 同日、プロシア宰相ハルデンベルヒは、駐普フランス大使に普佛開戦の旨を告ぐ。
- 三月二十三日、スウェーデンのバルナドット、フランスに宣戦す。
- 四月十五日、ナポレオン、大勢非なるを察し、機先を制すべく、パリイを發しサクソニアに向ふ。兵十三萬五千。
- 五月二日、プロシアのシャルンホルスト戦死す。
- 同日、ナポレオン、普露聯合軍と、リッツェン、グロース・ゲルシエンに戦つて、勝敗決せず。
- 五月六日、ナポレオン、ドレスデンに入る。
- 五月二十一日、ナポレオン、聯合軍とバツツェンに戦ひ、聯合軍退却す。

- 六月二十一日、ウエリントン、フランス軍をヴィットリア(イスパニア)に破る。
- 六月二十六日、オーストリア宰相メッテルニヒ、ナポレオンの招に應じ、ドレスデン王宮に會見す。ナポレオン、オーストリアをして武装中立の位置より先前の同盟關係に復歸せしめんと力説九時間に互れども、メッテルニヒ遂に讓歩せず。
- 六月二十七日、普、奥、露、三國間の秘密條約成り、オーストリア事實上對佛同盟に参加す。
- 六月三十日、ナポレオン、オーストリアに讓歩し、一八一二年の佛奥同盟條約を廢棄し、フランス一世の武装仲裁を承認、マレー、メッテルニヒ同協商に署名。
- 八月十二日、オーストリア、大勢を察し、居中調停の位置を棄て、公然フランスに宣戦す。
- 八月十四日、六月三十日以後の休戦破る。ネイ、ブリュッセル、シレジアのポベル河畔に戦ふ。
- 八月二十三日、ウーヂノー、マルリンへの途中グロースマイレンに於て、ビュローに破らる。

- 八月二十六日、同盟軍主力、シュワルツェンベルヒを將として、ドレスデンを攻撃す。
- 八月二十七日、フランス軍、大いにドレスデンに勝つ。同盟軍の損害は其の三分の一、佛軍の損害輕微。
- 八月二十九日、ヴァンダム、同盟軍主力を追撃してクルムに到り、優勢なる塊露軍と衝突。翌三十日、プロシア軍背面より挾撃、却つて潰走す。
- 九月、ウエリントン、サン・セバスチャン(イスパニア)を抜き、將にフランスに入らんとす。
- 九月六日、ビュロー、ネーをデンネウイツツに破る。
- 九月二十五日、ナポレオン、副官フラオーを、フランス一世の許に派し、平和の希望を傳へしむ。オーストリア帝これを拒絶す。
- 九月二十七日、フランス、一八一四年度の兵をも徵集し、パリイに二十八萬の兵を備ふ。
- 十月八日、バウアリア、終にナポレオンを捨て、同盟加入を約す。
- 十月十四日、諸般の作戦計畫不成功に終りしナポレ

- オン、ライプツヒに入る。
- 十月十六日―十八日、ライプツヒの大戦。
- 十月、オーストリア軍、ユージェーヌの軍を、アヂヂェ河(イタリア)以西に逐ひて、トリエストを占領す。
- 十月二十九日、メッテルニヒ、アレクサンドル一世、及び駐英英國大使アバディーンと商議、ナポレオンに對し、「フランスの自然的境界を平和の基礎として、會議を開くべきこと」を、俘虜セン・テーニャンを釋放、其の口頭を以て傳へしむ。
- 十月三十一日、ウエリントン、パンプロナ(イスパニア)を陥る。
- 十一月八日、ウエリントン、終にフランス國土を冒す。
- 十一月九日、ナポレオン、ドイツよりパリイに歸還す。
- 十一月十六日、ナポレオン、十月二十九日の同盟國提議に對し、曖昧なる返書を送る。
- 十二月二日、ナポレオン、コーレンタールをして、

同盟國提示條件を基礎として、平和會議を開くべき旨をメッテルニヒに通じ、彼れそれに同ず。

○十二月十日、ウエリントン、ニヴェル河畔にスールを破り、四千二百人を殺し、砲五十一門を鹵獲す。

○十二月十九日、ナポレオン、立法會議を開き、自ら平和を熱望せることを強調す。

○十二月二十日、ナポレオン、外相マレーを免じ、コーレンクールをして代らしむ。

一八一四年

○一月、ナポリ王ミヌラー、イタリヤ統一の野心を抱き、ナポレオンに背きて、同盟軍に参加す。

○一月三日、ナポレオン、勅令を以て公衆徵募法を發布せしむ、實行せられず。

○一月六日、フランス外相コーレンクール、平和談判の爲め、同盟軍本營に赴く、戦線通行證を求む。

○一月八日、メッテルニヒ、シュワルツェンベルヒに決戦を回避すべく訓令す。

○一月十三日、ロシア軍、バーゼルに於てライン河を渡り佛境に進む。

○一月十八日、イギリスのカッスルレー、バーゼルの同盟軍本營に到着す。此の時に於けるイギリスの主張はナポレオンの絶對廢位にあらず。

○一月二十五日、ナポレオン、同盟軍に備ふべく、パリを發し、シャロンに赴く。手兵四萬。

○一月二十六日、アレクサンドル一世、ラングルに達し、シュワルツェンベルヒに急進撃を促す。

○一月二十九日、ナポレオン、ブリュッヘル、及びグナイゼナウとブリュンヌに戦ひ、プロシア軍を破る。

○同日、メッテルニヒ、同盟各國元首の名を以て、コーレンクールに、シャクションに於て協商開催の旨を通告。

○二月一日、ブリュッヘル、ナポレオンをラ・ロチエールに破る。

○二月三日、各國全權シャクションに到着す。

○二月七日、第二次シャクション會議に於て、同盟側はフランスに對し、漠然たれども、苛酷なる條件を提示す。

○二月七日、ナポレオン、マレーの請により、讓歩の

最大限度を口授す。

○二月八日、ナポレオン、前日マレーに授けし、讓歩の極限を變更す。形勢有利に展開せし爲めなり。

○二月九日、ロシア全權ラスモウスキイ召還の命に接し、シャクション會議一時中止せらる。

○二月十日―十四日、ナポレオン、シャトー・チエリ附近に、同盟軍を撃破す。

○二月十一日、同盟國宰相會議地トロアに、シャトー・チエリーの敗報臻る。乃ち英、墺、普の委員、速決平和を主張せしむ、ロシアの宰相ネッセルローデ、單り皇帝の意を體し強硬。會議分裂の危機に臨む。

○二月十二日、マレー、コーレンクールに平和條約の基礎を、フランクフルト條約に置くべく進言す。

○二月十七日、シャクション會議再開。

○二月二十八日―三月十四日、形勢次第にナポレオンに非なり。

○三月九日、英、墺、普、露、各國使臣、シ・モーモンに會し、一層戰意を固うす。

○三月二十八日、ナポレオン、ヴィトリイを發し、フ

★ンテームプロローに向ふ。

○三月二十九日、マリア・ルイザ、及びローマ王プロアに避難す。

○三月三十日、パリ、同盟軍に開城。

○同日、ナポレオン、フォンテームプロローに到る。

○三月三十一日、ロシア皇帝アレクサンドル一世、プロシア王フレデリック・ウイリアム三世、パリに入城す。オーストリア皇帝フランシス一世はディジーンに止まる。

○四月一日、フランス元老院、假政府組織を決議す。

○同日、コーレンクール、ナポレオンの命を受け、パリに赴き、平和條件を提案せしむ、同盟側拒絶す。

○四月二日、フランス元老院、ナポレオンを廢位。立法議會これを承認し、各官衙亦盲従す。

○四月三日、マルモン、ブルボン黨の誘引に惑され、ナポレオンを賣り、私かにブルボン黨を援助すべきことを約す。

○四月四日、ナポレオン、コーレンクールの大勢に基きてなせる退位勸告を斥け、尙一戦を賭せんとせし

- も、諸將軍これに従はず、已むなく退位宣言の草稿を認む。
- 四月五日、マルモン、部下一萬二千を故ら同盟軍重圍の下に拘鎖す。
- 四月六日、ナポレオン、遂に退位宣言を認む。
- 四月六日、フランス元老院、ルイ・ブルボン（ルイ十八世）に、新憲法に忠誠を誓はしめ、王に推戴すべく決議す。
- 四月十一日、同盟國、コーレンタールを介して、ナポレオンに講和條件を提示す。ナポレオンこれに署名す。
- 四月十二日、アルトア伯、兄ルイ十八世の代理として、パリに入る。
- 四月二十日、ナポレオン、フォンテーヌブロー宮の前庭に於て、近衛兵に告別す。
- 四月二十八日、ナポレオン、フレジュス港よりエルバに向ふ。
- 四月二十九日、ルイ十八世、イギリスより還つて、コンピエーニユに着す。
- 五月三日、ルイ十八世、パリ入口セントワンに於て宣言書を發し、四月六日元老院制定の新憲法不承認を表示す。
- 五月四日、ナポレオン、エルバ島ポルトフェラジョに着、島民代表歓迎の辭を述べ。
- 五月九日、タレーラン、同盟側と平和談判開始、講和委員ラフォーレ、オスモンをして強剛なる條件を提示せしむ。
- 五月三十日、フランス、同盟側、シエーモンに和す。第一次パリ條約。
- 六月四日、ルイ十八世、同盟側の督促により、フランス憲章を公布す。
- 九月、ウィーン公會始る。
- 九月二十二日、カッスルリー（英）、ネッセルローデ（露）、メッテルニヒ（奥）、ハルデンベルヒ及びフンボルト（普）等、諸條件をウィーン會議參加國全部に謀る以前、豫め四國間に秘密に協議すべく協定す。
- 九月二十五日、ロシア皇帝アレクサンドル一世ウィーン着。翌日カッスルリーに其の本志を明かす。

- 十月、タレーラン、ウィーン會議の席上、エルバ島のフランスに近きを以て、ナポレオンをアゾーレス島に移すべく提議す。
- 十一月七日、プロシア王フレデリック・ウィリアム三世及び大臣ハルデンベルヒ、ロシア皇帝と長時間會談し、對オーストリア同盟を締結。
- 一八一五年
- 一月三日、英、奥、佛の三國、對普露防禦同盟を結ぶ。
- 二月八日、ナポレオン、マレーの密使としてエルバに來れるフルーリ・ド・シャブローンより親しく、フランス國民の對ブルボン王室不平、及び列國不和の狀を聽く。
- 二月十六日、ナポレオンの監督、兼タスカニー公使サー・ニール・キャンベル、エルバより大陸に赴く。此の不在に乗じ、ナポレオン脱島を企つ。
- 二月二十四日、ナポレオン、突然部下に出帆の用意を命じ、同時に在泊の船舶を抑留して、秘密の漏洩を防ぐ。
- 二月二十六日、ナポレオン、エルバを脱出す。
- 三月一日、ナポレオン、ジュアン灣に入る。
- 三月六日、メッテルニヒ、ナポレオンのエルバ脱出を耳にす。
- 三月十四日、ルイ十八世の命により、ナポレオン征伐に向ひし元帥ネー、部下の親ナポレオン感情と、ナポレオンよりの勧誘狀により、彼れに和す。
- 三月十九日、ルイ十八世、パリより逃竄す。
- 三月二十日、ナポレオン、チュイルリー宮に入る。
- 四月二十二日、ナポレオンのコンスタンに命じて草せしめし新憲法脱稿す。
- 五月二日—三日、ナポリ王ミヌラー、復ナポレオンに味方し舉兵せしも、トレンチノ附近に於て、オーストリア軍に破らる。
- 六月一日、シャン・ド・メイの集會。
- 六月十二日、ナポレオン、聯合軍の出動に對して、パリを發し、ベルギーに向ふ。
- 六月十四日、ナポレオン、シャルロア附近に於てプロシアの前衛を襲撃す。

- 六月十六日、ナポレオン、ブリュッヘル麾下のプロシア軍をリニーに破り、ウエリントン将軍はネーをカールスラールに破る。
 - 六月十八日、ウォートルローの大戦。
 - 六月二十一日、ナポレオン、パリに入り、即日議會に敗戦を報告し、議會彼れの退位を要求す。
 - 六月二十二日、ナポレオン、帝位を其の子ローマ王に譲る。
 - 六月二十五日、ナポレオン、パリを發しロッシェンファールに向ふ。
 - 七月三日、ナポレオン、ロッシェンファール着。
 - 七月三日、同盟軍パリに入り、ナポレオン退位と共に成立せる假政府を解散す。
 - 七月十五日、ナポレオン、英艦ベレロフォンに乗り翌十六日、イギリスに向け解纜す。
 - 七月三十日、イギリス政府、ナポレオンに流竄の宣告をなす。
 - 八月七日、ナポレオン、スタートポイントに於て、ベレロフォンより、ノーザンバーランドに移乗す。
 - 八月十一日、ナポレオン、セント・ヘレナに向けイギリスを出帆す。
 - 十月十六日、ナポレオン、セント・ヘレナに上陸す。
 - 十一月二十日、フランス、聯合國間に、第二次パリ條約成立す。
 - 十二月十日、ナポレオン、ロングウッドに居を定む。
- 一八一六年
- 四月十五日、ハドソン・ロウ、臨時島司コックバーンに代りて、セント・ヘレナ知事として來島。
 - 十月二十七日、ナポレオン病む。侍醫オメラ、ロウに向ひ、ナポレオンに轉地の必要あるを説くも、知事許さず。
 - 十二月二十九日、ラ・カーズ、喜望峰に護送せらる。其の出發に先ちナポレオンに面會せんとせしも、ロウ許さず。
- 一八一七年
- 三月十五日、ハドソン・ロウ、ナポレオンの散歩道に制限を加ふ。
 - 七月、ブラムピン、セント・ヘレナ護衛艦隊司令官

として来る。

○夏、ナポレオン、健康を害す。死因となれる胃癌の初徴候なり。

一八一八年

- 二月十三日、グールゴ、モントロンに對する嫉妬の結果、ロングウッドより辭去。五月一日、イギリスに赴く。
- 五月十六日、ハドソン・ロウ、在島官吏、住民、其他の人々の、監禁中なるフランス人と交通することを嚴禁す。
- 七月二十五日、バサースト、ロウに向つて、オメラを捕縛し本國（イギリス）へ護送すべきことを命ず。
- 年末、ロウ、ナポレオンに親善なるものを、セント・ヘレナより追放す。

一八一九年

○一月十日、ナポレオンの病勢増進。英艦コンケラーの軍醫ストーコー、ナポレオンの求めに應じて診察す。ロウこれに不快なり。數日後ストーコー陥られ

てセント・ヘレナを去る。

○九月二十日、醫師アントマルシ、ナポレオンの叔父フェッシュに選ばれて、セント・ヘレナに來る。

一八二〇年

○九月二日、マルトラン、ナポレオンの病勢昂進するを憂ひ、英國首相リヴァプールに、轉地療養を請ふ書を送りしも、ロウ其の進達を妨げて、目的を果さず。

○十一月十二日、ナポレオンの病狀愈險悪となり、身體冷却、又昏睡に陥る。

一八二一年

○二月、ナポレオン、胃部の苦痛激増し、食物は唯ジュエリーを口にのみ、記憶亦著しく衰ふ。

○三月下旬、ナポレオン、屢々床上に吐血し、病勢日を追うて進む。

○四月十五日、ナポレオン、遺言書を認む。

○四月十六日、ナポレオンの容態不良。英醫アルノット此の旨をロウに報ず。ロウ責任の重大なるに驚き、遽に禁令を弛め、在島の醫師全部をロングウッドに集めて、ナポレオンの診察に従はしむるも效無

し。
 ○四月二十三日―二十四日、ナポレオン、遺言書に追加をなす。
 ○四月二十八日、ナポレオン、アントマルシに死後、遺骸の解剖を託す。
 ○五月二日、ナポレオン、体温高く、心氣鮮明ならず。フランス、ローマ王、或は麾下諸元帥等の名を口に、又急に起ち上りて庭に出でんとして倒る。
 ○五月三日、ナポレオン、容態小康を得、懇々遺言について近侍の人々に遺囑する所あり。
 ○五月四日、ナポレオン、長時に互りて少量の薬湯を服す。此日天候頗る險惡にして、旋風ロングウッドを襲ふ。
 ○五月五日、ナポレオン、始終意識昏濁。言語稀にして意義不明なり。最後に聴き取れしは、『軍の先頭』の一言なり。午後五時四十九分、溘焉として逝く。
 ○五月八日、ナポレオンの葬儀、セント・ヘレナに行はる。

一八四〇年

○五月十二日、フランス内相ド・シムザ、ナポレオンの遺骸を、セント・ヘレナよりパリーに改葬せんことを議會に提案し、可決せらる。
 ○七月七日、フランス王ルイ・フィリップの第三子ジョアンヴィル親王、ナポレオンの遺骸を迎ふべく、軍艦二隻を率ゐて、ツーロンを發す。
 ○十月八日、右の一行、セント・ヘレナ、ジェームスタウンに到着。
 ○十月十四日、夜、ナポレオンの墓を發掘。
 ○十月十五日、午前十時二十五分、アツペー・コックロー主式の下に、ナポレオンの柩を地上に上ぐ。
 ○十月十八日、佛艦ナポレオンの柩を載せて、セント・ヘレナを解纜。
 ○十一月二十九日、ナポレオンの遺骸、シユルブール着。
 ○十二月十五日、ナポレオンの遺骸、オテル・ド・ザンワリッド到着。ルイ王これを迎へて、二時間に互る祭式を營む。ナポレオン今や彼れが愛したりしフランス國民の中、セイヌ河畔に祭らる。

昭和十七年六月十日印刷
 昭和十七年六月十五日發行

出文協承認ア60658號
 發行部數 2000 部

小店出版物中萬一落丁、佩丁等不完全な品が
 ありましたら御手数ながら發行所に御申出
 下さい、早速御取替へ致します。

ナポレオンの性格 ④ 定價 參圓五拾錢

譯者 砂川 一平

發行者 松崎 勝義

印刷者 長谷川 隆士

發行所 富士書店

東京市板橋區板橋町三丁目六五番地
 電話 板橋一四七〇番
 振替東京一三五二九七番
 會員番號一八〇四二番

配給元 日本出版配給株式會社

東京市神田區淡路町二丁目九番地

21404 776

62

931

91

終

